

# 東京都立産業技術大学院大学

ADVANCED INSTITUTE OF INDUSTRIAL TECHNOLOGY

---

## AIIT FD レポート 第36号

2025年2月

<https://aiit.ac.jp/>

# 目 次

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 第 36 回 FD フォーラム .....               | 1   |
| 2023 年度後期「学生による授業評価」結果の概要報告 .....   | 33  |
| 2023 年度第 3 クォータ 教員各自のアクションプラン ..... | 45  |
| 1 共通科目 .....                        | 45  |
| 2 事業設計工学コース .....                   | 49  |
| 3 情報アーキテクチャコース .....                | 55  |
| 4 創造技術コース .....                     | 65  |
| 2023 年度第 4 クォータ 教員各自のアクションプラン ..... | 74  |
| 1 共通科目 .....                        | 74  |
| 2 事業設計工学コース .....                   | 77  |
| 3 情報アーキテクチャコース .....                | 84  |
| 4 創造技術コース .....                     | 94  |
| 2023 年度後期 コースごとのアクションプラン .....      | 101 |
| 1 事業設計工学コース PBL .....               | 102 |
| 2 情報アーキテクチャコース PBL .....            | 103 |
| 3 創造技術コース PBL .....                 | 104 |

## 第 36 回 F D フォーラム

## ■第36回(2024年度第1回)FDフォーラム■

令和6年9月4日

東京都立産業技術大学院大学にて開催

### 参加者

[招聘講師]

放送大学 岩崎 久美子教授

### [東京都立産業技術大学院大学]

|        |     |        |           |
|--------|-----|--------|-----------|
| 橋本 洋志  | 学長  | 吉田 敏   | 研究科長      |
| 板倉 宏昭  | 教授  | 内山 純   | 教授        |
| 追川 修一  | 教授  | 奥原 雅之  | 教授        |
| 越水 重臣  | 教授  | 小山 裕司  | 教授        |
| 高嶋 晋治  | 教授  | 中鉢 欣秀  | 教授(FD委員長) |
| 飛田 博章  | 教授  | 浪岡 保男  | 教授        |
| 林 久志   | 教授  | 細田 貴明  | 教授        |
| 松尾 徳朗  | 教授  | 三好 きよみ | 教授        |
| 三好 祐輔  | 教授  | 村越 英樹  | 教授        |
| 田部井 賢一 | 准教授 | 五十嵐 俊治 | 助教        |
| 尹 国花   | 助教  | 河西 大介  | 助教        |
| 木下 修司  | 助教  | 佐藤 里恵  | 助教        |
| 柴田 敦司  | 助教  | 張 晁逢   | 助教        |
| 中内 療吾  | 助教  | 松井 実   | 助教        |
| 横山 友也  | 助教  | 牧野 千里  | 特任教授      |

### ■開催内容:

|              |               |
|--------------|---------------|
| 13:00 -13:05 | 学長挨拶 橋本洋志学長   |
| 13:05 -15:55 | 岩崎久美子教授によるご講演 |
| 15:55 -16:00 | 吉田研究科長講評      |

令和6年9月4日（水）

○開 会

**中鉢FD委員長** みなさん、こんにちは。本日は、第36回FDフォーラムということで開催をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、時間になりましたので、早速ですけども、学長のほうからご挨拶賜りたく存じます。よろしくお願いいたします。

**橋本学長** みなさん、こんにちは。初めに、今回のFDフォーラムで貴重なご講演をいただけることになりました放送大学の岩崎先生をお迎えできることをうれしく存じます。ありがとうございます。また、ご参加されている本学の教員及び関係者には、このフォーラムをよき内容にするようご尽力をお願いいたします。

毎回のこととなりますが、FDであるファカルティ・ディベロップメントの意味を考えたいと思います。FDとは、定義によりますと大学教員の教育能力を高めるための方法、これを大学全体として取り組む活動を指しています。本学は、専門職大学院です。文部科学省の定めと東京都及び経済界の要請によって、産業技術分野において、国内外で活躍できる高度専門職業人、すなわち高度プロフェッショナルを育成することが本学の第一の使命となっており、そのために、エッジの効いたものとポテンシャルの高い社会人、しかも現役の方々が多く入学されています。そのような方々のポテンシャルを、さらに高めることが本学の使命です。しかし、技術革新が激しい現在、何年も同じ教授法が続くとは到底思えません。ですので、日々教授法を全員で見直し、改善を図ることが必要と考えます。その糧を得る、または改善の指針を得るために、本日は岩崎先生をお招きしてございます。

岩崎先生のご専門は、生涯学習、成人期の学習、キャリア発達、国際バカロレアであり、いずれも素晴らしい研究成果を収められてきております。この中でも、私が拝読しまして先生の業績のほんの一部でございしますが、「社会人の学び直しにおける放送大学の役割」または「生涯学習教育」研究の射程があります。これらにつきましても、本学としても大変参考になる研究というふうに思っております。そのため本日の講演テーマである「おとなを教えること：成人学習理論から見る社会人学生の学びの特徴」、この内容は本学にとって大変な貴重な知見を得られるものに違いないというふうに確信してございます。岩崎先生には、お忙しい中お時間を割いていただき、ご講演いただけることを改めて感謝申し上げます。

それでは、フォーラムを開始するため、中鉢先生にマイクをお返しします。

**中鉢FD委員長** 学長、どうもありがとうございました。

それでは、早速ではございますが、岩崎先生のご講演に移らせていただきたいと思います。

講演のテーマですけども、先ほどもお話ありましたとおり、「おとなを教えること：成人学習理

論から見る社会人学生の学びの特徴」と題してお話いただきます。

それでは、先生、ご準備のほうをお願いいたします。

**岩崎講師** ただいまご紹介をいただきました岩崎と申します。先ほど産業技術大学院大学の学長のお話を伺い、私が勤務している放送大学の学生と、産業技術大学院大学で学ばれる学生さんとは全く違った特徴を持っているとの印象を持ちました。産業技術大学院大学の学生さんのように一定の属性を持った学生と、放送大学の学生とは少し異なるかもしれませんが、まずは放送大学について紹介しながら、今日の本題に入っていきたいと思います。

自己紹介になりますが、私は放送大学に参る前は、文部科学省の国立教育政策研究所の生涯学習政策研究部というところに勤務しておりました。生涯学習政策研究部というのは、学問的には非常に曖昧な内容を扱う部署で、研究所の中で、教科教育、教育政策といった伝統的学問領域からこぼれ落ちる内容を拾う何でもありの部でした。この研究所で仕事をしている中で、私が抱えていた大きな問いがありました。成人の学習の特徴は、自発的に学ぶということです。学校教育であれば高校進学、あるいは大学進学、大学に入れば単位取得・卒業、そしてその後の望ましい就職、といった目的の下に学習が行われるわけですが、一旦大学を出た後の学習活動は、学校や大学といった組織の中で一律に行われるのではなく、個人の行動や判断に基づいてなされるわけです。そのような自発性に基づく個人の学習活動に、国の研究所が生涯学習政策の名の下に政策介入する余地はあるのか、政策研究として何が有効なのかという問いでした。

ご縁があって9年前、放送大学に赴任しました。研究から実践の場に職場が変わりました。放送大学に来てお会いする学生は自分でお金を払って自発的に学ぼうという意欲を持った方々でした。こういう人たちは、どうして学ぼうとしているのか、そこに非常に関心を持ちました。実は、そのことと表裏一体なのですが、最近、私が関心を持っているのは、逆に意欲のない人たちをどうするかということです。学長のお話を伺うと、産業技術大学院大学のターゲット層は、スキル更新を望むエッジの利いた優秀な技術者とのことでした。ナレッジソサエティー、知識基盤社会という名称で、知識がすぐにお金に結びつく、あるいは労働市場で継続的に学習することで雇用を確保・維持できるといわれる時代にあって、学習の意欲、学習をできるスキルを持っている人たちは、どんどん有利になっていく。そのような意欲のある方が産業技術大学院大学、そして放送大学もそうかもしれませんが、学んでいることになります。それに対して、学習する意欲がない、あるいは学習に対して肯定的な思いがない人たちは、どんどんそこからこぼれ落ちていく。そのような格差が生じていることが非常に気になっております。

今日もそのような内容にも触れたいのですが、それはそれとして主として産業技術大学院大学の先生にお役に立つような話を中心に進めていきたいと思います。最初は格差の話もいたしますが、今日の目的は、「大人はなぜ学ぶのか」、その目的、ニーズ、支援方法について、子供と違う観点を、成人学習の代表的理論から考えていくことにあります。せっかくお忙しいところをお集まりいただ

きましたので、せめて楽しい時間を過ごしていただけたらと思っていますところです。ご依頼された内容に沿って、前半が理論編で、後半が実践編ということで、組み立ててまいりました。先生方のご専門に比べると砂糖菓子のように甘い話しかできませんけれども、取り組んでいただきたい課題を2つ持ってまいりましたので、ご一緒に参加いただけたらと思っていますところです。

さて、大人になってからの学習される方の特徴は、多様な目的、多様なニーズ、多様な属性といった多様性にあります。そこでのポイントは、自分が自発的に自己決定的に学ぶ行動を取ることにあります。では、どんな人が学んでいるのかを少し考えてみたいと思います。コロナの前に外国に行く機会があったときには、私はまずその地域の図書館に行きます。図書館は地域の指標の一つで、その地域が経済的にどのくらい豊かか、税収がどの程度か、あるいは住民の民度はどのくらいか、など、図書館に行けば蔵書数、滞在している人の姿などからこれらのことが把握できるものです。それに、図書館はただで入れるという特徴があります。図書館は誰もが利用できますが、そこで見られるのは非常に限られた人たちの風景なのです。一定の人しか来ない。その地域の人の中でも限られた人しか利用しないのです。

この写真はニューヨーク公共図書館です。ここに写っている人たちは、コンピューターを開いています。仕事をしているのか学習をしているのかわかりませんが、静かにみなさん何か作業しています。こちらはボストン公共図書館です。誰もが入れる場所、誰もが使える場所ですが、図書館を利用しているのは限られた人なのです。たとえば、ボストン公共図書館ではオンライン教材を貸与しているとのこと。無償のオンライン教材があっても、たとえば移民の人たちはそれを使おうとしないわけです。そのため、NPOなどが、公共施設などの場所を定め、学習サークルをつくってオンライン教材を使って学習機会を創出するとの取り組みもあるそうです。たとえ無償のオンラインの教材でも、アクセスできる人とできない人がいるということなのです。これはハーバード大学の近くにある地域の公共図書館です。地域の公共図書館ですから、身近な地域の図書館なわけですが、見てわかるようにみんな真剣に何かをやっています。土地柄というか、大学のある地域の公共図書館は、普通の地域とは異なるのかもしれません。

成人のうちどのような人たちが学習しているかを考えみましょう。たとえば放送大学で学んでいる人たちはどんな人がいるか、赴任して驚いたことがありました。放送大学の学生の中には、世代間で入学される動機が異なる場合があります。昔学習の機会に恵まれなかった年代の人たちでは、学習したいという根源的ニーズを持って学習される例があります。私が9年前に赴任した最初の卒業式で、名誉学生として表彰された加藤栄さんという方がおりました。当時100歳前後の方で、息子さんと一緒に壇上に立たれ表彰を受けられました。加藤さんは、四男八女12人兄弟の四男で、小学校高等科を卒業後、地元の農協に就職。55歳で定年退職、その後80歳過ぎまで中小企業診断士として働いたとのこと。面白そうな科目をとって楽しもうと80歳代で放送大学に入学、95歳で最初の卒業、コースを変えて2019年に3月に4度目の卒業をされました。加藤さんは80歳から放送大学に入った

とのことですから、それを考えると、「私たちはまだひよっこだね」と学生さんたちと話しております。

加藤さんは、小学校のときに優良児童として表彰されております。中等教育には進学されなかったわけですが、優秀であったのでしょう。その後、農協に勤めるわけです。小学校の先生から「ほとんどの生徒は10年後には勉強しなくなる。そうなるなよ」と言われて、その言葉を引きずりながら生きてきた、と新聞の記事には書かれていました。産業技術大学院大学にいらっしゃる方は、多くは恵まれた環境で大学まで行かれた方が学ばれるのだと思いますが、時代背景もあって、加藤さんのような方が放送大学には時々在学されています。加藤さんは、中学校には進学しませんでした。早稲田大学中学講義録というものを独学したそうです。たまたま松本清張の『半生の記』という自叙伝を読んでいたら、「私は早稲田大学から出ている講義録を取ってみたり、夜の英語学校に通ったりしたが、意志の弱いためにどちらもモノにならなかった」と書いてありました。加藤さんは、小学校しか出ていないけれども、一人で講義録を取り寄せて独学をしてわけです。成人になってからの学習のポイントは、一人で自律的に学習ができるか、自発的に学習する意欲があるかが大きな意味を持つことがわかる話です。

もう一人は、私が会った学生さんで、その方も加藤さんと同じような方でした。この方は加藤栄さんよりは年代が後で、現在90歳に近い方です。この方は、兄弟が7人おられ、中学校を卒業後、NTTの前身の通信講習所の技術者養成機関に入るのですが、夢は定時制高校に通うことだったと言います。山間部の勤務先でそれができずにいたとのことですが、お子さんが2人いらして、そのお子さんたちの学歴欄に両親が中卒と書くのはかわいそうだといって通信教育を受けるのです。当時、電電公社と言った時代、職場で通信教育を受講し終了すると受講料を全額負担してくれたそうです。そこで、次々通信教育を受けられ、また高校資格として大学入学資格検定合格者になり40歳のときに産能短大に入学、退職後、仏教大に入り、その後仏教大学の修士課程まで進学されました。

継続的に学習するとの姿勢は、初期の学歴と一定の相関がある場合もありますが、必ずしもイコールではないことが、このお2人の例からわかるかと思います。社会に出てからも学習する人はますます学習をし、学習しない人はますます学習しなくなっていく。先ほどお話ししたようにマタイ効果というものが、年齢を重ねれば重ねるほど、その傾向が拡大していき、個人差が大きくなっていくのです。

大人になってから学習する人としらない人の格差を考えるに当たり、今のリスキリングの流れについても少し考えてみたいと思います。生涯学習、生涯教育という言葉が現れた50年ほど前は、今お話ししたお2人の例のように、世代的に教育機会の恵まれなかった人たちに対し、世代間格差を是正し保障しようという、社会正義や社会的公正という観点からの生涯教育や生涯学習や生涯教育が唱道された時代が長く続きました。

ところが、1990年代以降になってくると、グローバリゼーション、知識基盤社会と言われるよう

になり、知識そのものが資本と考えられるようになりました。国際機関、特にEUやOECDなどを中心に人的資本モデルに基づくマンパワー政策、つまり、学習することや知識を獲得することが社会の国際競争力を高め、個人に経済的恩恵をもたらすとのモデルが前面に出されるようになります。このことは、日本企業では、戦後の終身雇用制、年功序列といった雇用慣行が崩れ、グローバリゼーションの波にのまれていったということを意味します。いわゆる終身雇用制では白紙で入ってきた若者を企業の中で訓練し、一人前にして定年まで雇用するという雇用慣行でしたから、企業としても企業内教育・訓練で投資をすれば、いつかその利益は組織に戻ってくるとの考えに基づくシステムであったわけです。

ところが、自分で自己武装して雇用を確保、維持するとの時代の流れになっていきます。それには、転職をすることが成長する機会であると捉える風潮もあると思います。現在では、企業内の教育訓練システムから、産業技術大学院大学の学生さんの中にもいらっしゃると思いますが、個人で学習する、個人の責務で学習するという時代になってきています。この個人の責務で学習することは、当初リカレント教育という言葉で言われていましたが、徐々にリスキリングという言葉に置き換わり、さらにリスキリングという言葉自体も、DX、デジタルスキル、AIといった特定の言葉を意味するものを強調するようになってきています。ここで、みなさんと考えたいのは、こういった強い自己、強いアイデンティティを持って自ら学習できる、戦略的に学習を計画して実行して評価できるという人が成人学習者の理想であるとして、全ての人がそうであるのだろうか、という率直な疑問です。

この個人に委ねられる学習の判断、個人に委ねられる学習活動への参加、このことは個人がお金を払って行うことで、個人の意思、個人の能力、そういうものが非常に大きく問われることになります。国が学び直しを推し進めるのは、背景に国際機関も含めて世の中全体において、スキル獲得といった道具的な学びを推奨しないと、国際競争力に勝てない、あるいは失業対策にはならないということがあります。特にヨーロッパでは、若年失業者の問題は深刻で、若者には、学校教育も含めて個人として学習する意欲、学習のスキルと行動力を持つことが求められています。

グーグル社の人事の方が書いたビジネス書では、グーグル社が採用したい人材は、継続的に自分で学習できる人とありました。また、日本のサイバーエージェントの執行役員の方が新聞で言っていたのは、戦略的学習力、つまり何を学ぶ必要があるか見定め、最適な学習内容、学習方法を考え、効率的に習得する力を持っている、そんなリスキリング・アップスキリングが自分でできる人を採用したいとのことです。この大学院大学にいられている方の属性はよく分かりませんが、先ほどの学長のお話を聞くと、この戦略的学習力というものを兼ね備えて、目的を持って特に明確なスキルを獲得したいという目標を持っていられている学生さんなのだろう、と推測しているところです。

次にお見せするスライドは、学習者の偏在に関するものです。インターネット調査の結果です。年代・雇用形態・性別等でセグメントを分けて、50人ずつセルに入るよう設計し、調査対象数を2,400としウェブで回答を集めました。無業者、退職者などのセルも全部50として、全てのセルを等分にと

っています。このことで、年代、性別、雇用形態でどういう傾向があるかを調べました。

非常にシンプルな質問の回答結果をお示ししたいと思います。「あなたは昨年度何か自主的に学びましたか」という質問です。結果は、「学びたいことがあり学んだ」という自主的に学んだ層は、この調査では全体の23.2%。アメリカの調査など見ても、自主的に学んでいるのは大体4分の1以下の数字です。多くて3割という感じです。「学びたいことがあって学ばなかった」という人は、何か事情や阻害要因があるわけです。その阻害要因を検討すれば、解決に向けて公的機関が介入できる余地があるかもしれません。学びたくない人に学べというのは越権行為で、学びたくないと言っている人に、私たちは何かをすることはできませんが、学びたいけれど、それができなかった人には環境整備をするなど、学習がなぜできなかった阻害要因を除去する支援ができるわけです。

それから、「学びたいことはなかったが、学んだ」という人も1割以下ですがおります。自分は学びたいわけではないけれど、上司から資格を取ってくるようにと言われた、といった理由かと推測する層です。最後になりますが、この中で「学びたいこともないし、学ばなかった」という人たちが4割います。このような層の人たちは、別に学びたくないのだから放っておけばいいと思うかもしれませんが、しかし、このような人たちには、無業者などが多く、世帯年収、婚姻の有無、満足度などに課題があることがわかります。無業者ですから、年収が低く、婚姻率も低く、人生に対する満足度とかウェルビーイングの値も低いんですね。

意欲があって学習を実施している層は、明らかに正規雇用が多いのです。一方、意欲がなくてやらなかった層は無業者が多いのです。意欲があって学習を実施している層に、学習する上での阻害要因を聞くと「特になし」との回答が多くあります。問題になることは特になく学習を行なっているわけですから、「特になし」との回答は当然です。このような層が意欲もあって学習を行っているわけです。そういう人たちがいる一方で、意欲があって学習できなかった人たちの問題は何かというと、「費用がかかる」「時間がない」「学習が続かない」「年を取り過ぎている」「学ぶための場所が近くにない」「学習する自信がない」、このような理由が挙がるわけです。

成人の学習者の二大阻害要因は、「お金がかかる」、あるいは「時間がない」ということです。「お金がかかる」ことを阻害要因と考える人は、公民館とか無料の講習とかに行く傾向があり、「時間がない」という人は正規雇用の忙しい人が多いので、オンライン学習、あるいはeラーニングなどで独学とかする人が多いのです。ただ、産業技術大学院大学に学びに来られる方たちは、施設などを使わなければやれない学習もあるでしょうから、大学にいらっしゃるかもしれません。「年を取り過ぎている」というのは心理的要因なのですが、こういう理由を挙げる方も多い。あるいは、「自信がない」という理由にあっても、こういう場合には支援をしなければならないですね。つまり心理的支援が必要だということがわかるわけです。

みなさんに考えていただきたいのは、産業技術大学院大学ではあまり問題にはならないことかと思いますが、意欲がなくて学習をしない人の理由としては、「特になし」「何を学んでよいか分から

ない」「特に学習する必要に迫られない」「学習する自信がない」「学習しようと思わない」といった回答が多いのです。「何を学んでよいか分からない」という人に対しては、学習相談とかという形でかかわれるわけですが、「特になし」、あるいは「必要性に迫られない」「学習しようと思わない」という人には、介入はできないわけです。一方で、このような理由を述べて学習をしていない人たちの層というのは、男性で30代後半の無業等、男性の40代前半の無業等、男性の50代後半の非正規、男性の30代前半の無業等のセグメントが多いのです。退職者や専業主婦も混ざって無業者等にしてしまえども、男性の30代とか40代の無業等というのは、定年退職者ではないと推測されるので、非常に課題があるということがわかるわけです。

次に理論編に入ります。

成人教育学の特徴は、学際的ということがあります。使える学問は、心理学、社会学、文化人類学、どのようなものも理論として活用する、非常に学際的領域です。学習を行動の変化、経験と広く捉えるのも特徴です。学習心理学ですと、たとえば、学習をした際に、「この教室に入ったときこの教室を出ていくときにどんな変容がありましたか」といったミクロなテーマを扱うかもしれませんが、成人教育学は、人生の中に学習の意義があるとの前提で、学習の定義も広いのです。プラグマティックというか、実践に近いところで理論を考えると面白と思います。学習の定義としては、「学習は毎日の経験を意味づける連続的なプロセス」ということが挙げられています。そのような成人学習の理論で、出てくるキーワードが3つあって、1つは経験、2つ目は対話、3つ目が振り返りです。このうちの経験ですが、成人学習者のリソースは経験にあるとされます。先生方が学生さんと会うときに、その人の経験をないがしろにすると、その人は自分のアイデンティティ自体を否定されたように思うぐらい、その人の過去の経験はその人自身の礎となっており、また非常に大きな学習の基盤であるのです。

学習のモチベーションが知的関心から生じる場合や、転職のためのスキル・資格が欲しいという人もいるかもしれませんが、しかし、私が接している学生さんの多くは、「自分の人生を肯定したい」「今のキャリアじゃ嫌だ」「もっといい人生にしたい」「もっと自由になりたい」などの肯定的な生き方をしたいために学習するという人も多いのです。先生方の学生さんは、スキルをすぐに身につけたいという方も多いかもしれませんが、根本的にあるのは、自己の成長欲求だったり、自分の人生を変えたいという思いであったり、そういった根源的な欲求が学習意欲を底支えしていると感じます。

さて、それでは具体的に子供と大人の学習とで、何が違うのかを動画を見ながらみなさんと考えてみたいと思います。お手元にワークシートがあると思いますが、子供の学習と大人の学習という表があります。写真や動画をご覧いただき、子供の学習の場面と大人の学習の場面の違いをメモ書きしてもらえるとありがたいと思います。

(フランスの子供の授業風景の写真を投影)

(ドイツの子供の授業風景の写真を投影)

ドイツはすごいなと思いました。個別にプリントを進めていくんです。

(日本の子供の授業風景の動画を投影)

これは学力向上のためのモデル授業です。みなさんに見ていただきたいのは学校の風景と授業です。教員と子供、教材、発言の仕方、などです。先生の教材の提示の仕方とかですね。

(大人の学習風景の写真を投影)

これは大人の学習の風景です。何が違うのでしょうか。

(大学生のワークショップの風景を投影)

次は大学生のワークショップの風景です。大人の学習の要素がたくさん入っているので、こちらをもってきました。大人は子供と何が違うのか、具体的に何が違うのか、教材、テーマの提示の仕方は何が違うか。……ヒントをちょっと言うと、経験への注目、アクティブラーニングの手法、主体性、など、いろいろ違う点を見つけて欲しいですね。

恐縮ですが、委員長の中鉢先生、どうでしょう、何か違いを感じますか。

**中鉢FD委員長** ありがとうございます。小学校のほうのビデオは大変懐かしいなと、結構上手な先生だなと。あんなふうに手際よく授業を受けた記憶はあまりないかなという感じでした。ただ、子供向けの学習については、教科書があって、それに沿った形での指導を行っているというところはあるのかなと、すなわち正解に近いものがあらかじめあって、そこに導くような指導をされていたというような印象を受けました。

対して、成人の学習は、まず参加者が能動的、主体的であるということ、単に誰かの話を聞いているのではなくって積極的に、それこそアクティブに学習をしているという印象を受けた次第です。

それから形式ですね、授業の形式としてはいわゆるスクール形式ではなく、ワークショップとか、あるいはフィールドワーク、そういった辺りのところで展開されておられるなというところでありました。恐らく一番大きな違いは、答えに相当するものをどのように学習者が自分でそれにたどり着くのか、それを自分自身の経験、興味、それから既に持っていたもの、プラスたとえばフィールドワークやディスカッションというような新しい発見の中から、何か新しいものを創発していこうと、そういった辺りのところを考えながら行動していたような、そんな印象を受けました。

以上です。

**岩崎講師** ありがとうございます。さすがですね、越水先生、どうでしょう。

**越水教授** 中鉢先生が物すごく完璧な模範解答されたので、あまり補足はないんですけど、小学校の授業風景は懐かしいなと思って見ていましたけど、やっぱり生徒さんがみんな先生のほうを向いて着目して、提示される教材に沿って先生の誘導で進んでいく、そこには中鉢先生も言っていましたけど、何か答えがある、文科省の指導要領みたいのがあって、そのパターンで展開されているのかなと思いました。もう一方の成人の学習は、やっぱり対話があったりディスカッションがあったり、フ

ィールドワークがあったり自由連想的で、主体的な感じなんですよ。そこに答えがあるのかないのか、多分答えがないんじゃないかと思うんですけど、答えがない中でみんなそういうふうに主体的に探していく、そういう印象を受けました。以上であります。

**岩崎講師** じゃ、すみません、もう少し踏み込んでみましょう。では、子供はなぜ教員が答えを導くような授業をしているのでしょうか。

**越水教授** それは文科省があるからって言っちゃ駄目なんですか、それは冗談ですけど、冒頭フランスとかドイツの写真が示されたじゃないですか。その振りとしては、海外の小学校は日本の小学校みたいなことをしていないのかなと。日本の小学校はみんな同じペースで学ぶんだけど、海外はてんでばらばらで、プリントの進め方もばらばらなのかなと思ったんですけど。

**岩崎講師** 日本ではなくて、フランスもドイツも教員がいて、子供は教えられる立場にいる。教科書があって、教材があります。それはどんな理由でしょうか。

**越水教授** それは、小学生が年代的にまだ自分で考えて主体的にできるようなレベルに達していないからというようなことでしょうか。

**岩崎講師** そうです。それが正解です。

**越水教授** そうなんですか。

**岩崎講師** そうです。なぜかという、子供は経験知が少ない。ジョン・ロックの言葉を借りれば「白紙で生まれてくる」。そのような子供を私たちの社会の良き構成員にするために、社会が文化的な存在になるように子供に働きかける、ソーシャライゼーションさせるのが教育の意味であるといわれるんですね。

**越水教授** なるほど。

**岩崎講師** 先生ももうちょっとお付き合いいただいて、大人はどうでしょうか。

**越水教授** 「経験」というのがキーワードだとすると、大人は十分に経験が備わっているから、自分が学びたいこととか足りないものを自覚しているということなのではないでしょうか。

**岩崎講師** そのとおりです。もう今日はこの話だけで終わりでもいいぐらいです。要は、子供はこれからいろいろなことを学び、社会の良き構成員になってもらわなければいけないので、先に生まれた者が子供たちを社会化するために働きかける、その装置、組織が学校なのですね。教員は、我々の世代の代表者として子供に教えるわけです。子供との間で、アクティブラーニングをやりましょうといっても、うまくやらないと全然進まないこともあります。非常に経験知のある高校生どうしですとアクティブラーニングは非常に有益なことも多いのです。経験に基づく学習には、成熟度が必要ということでしょう。子供には指導者としての教員が必要になりますが、大人の場合はそれぞれ異なる経験を有していて、それがリソースかつアイデンティティになるわけですから、その経験を活用する教育をしなければならないということなのです。

子供の教育とは別に、このような成人教育に目が向いていったのは、実は100年ぐらい前なんです

ね。リンデマンという人が、1926年に*The meaning of adult education*という成人教育の古典的な本を書いたんです。どうして100年前に成人に目が向けられたかというと、その当時、軍事心理学と言われる戦争に関し知見を提供する心理学の領域で、成人の学習の知能測定の機運が高まったんですね。戦争に参戦する際に徴兵した多くの人々を軍隊で適材適所に配置をするのに成人の知能検査が必要になったということです。そのようなデータが集積される中で、大人も学習する能力があることが科学的に実証されていきます。また、1926年に成人教育の学会をつくられたりしたこともあって、100年ぐらい前に成人教育学への関心が生じるようになりました。それまで子供の教育への関心は持たれていたのですが、成人に対してはあまり目が向いていなかったんですね。

このリンデマンの著作である*The meaning of adult education*の中に、非常に有名な言葉があります。「成人教育における最高の資源は学習者の経験である。経験は、成人学習者の生きた教科書である」という言葉です。学習者の経験がリソースであれば、学習者が気楽に語れる雰囲気を作って、お互いの経験を共有して自分の糧にするという作業が重要だということを、リンデマンはいみじくも言ったわけです。そのため、子供の教育では教員が指導者として教えるようになりますが、成人教育の場面では指導者というよりはファシリテーターという形で、学生さんの経験を引き出すことが重要になるということになります。

少し余談です。リンデマンは経験が成人の学習のリソースだと言っています。人によっては、経験というとジョン・デューイという哲学者を思い浮かべるかもしれませんが。リンデマンが言っていることは、私はデューイの受け売りっぽいなと思っていたんですが、その後、実はこの二人は親しい関係で、リンデマンはデューイの哲学にかなり影響を受けているということがわかりました。研究とはそういうものなのでしょう。身近に一緒にいると触発されるということでしょうか。また、リンデマンが、どうして1926年に*The meaning of adult education*を刊行したか、あるいはこの年に成人教育に関する学会がつけられたかということ、カーネギー財団のトップがヨーロッパ視察に行って、ヨーロッパの成人教育に感銘を受けるのです。それで米国に戻ってカーネギー財団が成人教育の諮問委員会を組織します。ちなみにリンデマンはこの委員会の委員になっています。おそらくリンデマンはカーネギー財団と顔がつながっていて、成人教育の興隆に一役かっているのではないかと推察します。いずれにしても、みなさんに覚えておいていただきたいのは、リンデマンの古典的著書である*The meaning of adult education*の中の「経験」という言葉です。成人教育における重要なことは、学習者の「経験」というところなのです。

次に、成人教育学で有名なのはマルコム・ノールズという人です。このノールズという人は、リンデマンより何十年も後に出てくる実践家です。リンデマンの古典的な本を読みながら、YMCAで成人教育に従事していました。リンデマンの理論を基にした実践家なので、そこで成人の教育や学習にかかわって肌で感じたことを仮説の束みたいにあンドラゴジーという言葉を使ってまとめているんです。アンドラゴジーとは、成人学習の原理や成人学習の教授法をまとめたものです。子供の教育・

教授法はペダゴジーと呼ばれるので、対比的に成人の教授法としてアンドラゴジーという言葉が使われています。

ノールズはシカゴ大で学位も取り、実践家として経験知に基づいた内容をきれいに整理した著作物を多く出しております。しかし、実践家のイメージが強かったのか、学术界における研究者としての評価はあまり高くはありません。そのため、「アンドラゴジーは理論じゃない」「仮説の束にすぎない」、「実務経験をまとめただけじゃないか」とか、いろいろと言われています。しかし、ノールズが整理した成人の学習の特徴は、実際にそうだなと思うところが多々あります。

たとえば、ノールズの挙げている成人の学習の特徴の1つ目は、自律的ということです。要するに、自分でやるということです。それには、成熟していないと無理なわけです。全ての成人が自律的に学習できるわけではないのです。冒頭に1年間のうち自分でやりたい学習があって学習したのは4分の1以下だったとお話ししました。自律性がないと学習はできないわけですから、大人でも学習する人ばかりではないということです。

2つ目は、学習の資源は人生の経験であるということです。

3つ目は、学ぶ目的に関連したレリバンスのある内容で学ぶということです。

それから、4つ目が即座に役立つものを学ぶ傾向がある、ということです。成人は実利的なものを学ぶということです。

5つ目は動機づけで、内発的に自分から自ら自律的にやるわけですから動機が必要である。学ぶ理由を知っていることが重要になります。

いろんな人が成人学習に言及し、アンドラゴジーに近い内容を解釈してまとめています。学習に対して成人はどういう視野が必要かという点、「学びたいという思いが重要である」「大人は学ぶ必要があると思ったことしか学ばない」「大人は実践により学ぶ」「大人の学習は問題解決に焦点が当てられ、その問題は現実的なものである」「それまでの経験は大人の学習に影響する」「インフォーマルな状況において、より学ぶ」…という整理もあります。最後の「インフォーマルな状況において、より学ぶ」という点、これすごく重要ではないかと思っており、たとえば、授業の合間にお茶飲み場で雑談するとか、先生とパーティで歓談したとか、飲み会で「その研究いいね」と話が弾んだとか、大人はそういったインフォーマルな場のほうが、より学ぶと言われています。また、大人はガイダンスを求めるとことが挙げられておりますが、大人が学習する際に情報提供や選択肢の提示を求めていることを、アメリカの成人学習の原則の中で経験知として書いている人もいました。

まとめになります。子供と大人の違いとしては、子供は依存的で、年齢が上がるにつれて経験が増し、依存性が減少していきます。子供は経験知が少ないので、学校教育の場面ではあまり経験は重視されません。教師が教科書を重視して教えるということです。特に学習の見通しというのは、即座の活用ではなく将来を見据えた教育方法が取られます。一方、大人といえば、自己主導的で自律的に学習を決定し、経験が貴重な資源とされ、すぐに生活や仕事に応用できる即時性を求めて問題解決的

に学習します。

ここまでは、ノールズが活躍した1970年代ぐらいまでの話でした。少し脇にそれますが、ノールズがアンドラゴジーという言葉で大人の学習を整理した後、高齢化社会の到来において高齢者に対し研究関心が向けられるようになります。そうすると、二十何歳から八十何歳、あるいはそれ以上まで、成人として一括りで考えるのは適切ではないのではないかという考えが出てきます。成人の中でも高齢期の教育や学習は異なるのではないかということで、老年教育学、ジェロゴジーという学問領域が現れます。

ジェロゴジーによれば、高齢期には学習者は依存性が増し、子供と同じように教えてもらうことを期待する傾向があると言われていました。しかし、放送大の高齢のお二方は、全く依存はしていませんでした。お一人は、当時83歳でしたが、新潟から一人でスーツを着てやってきて、フェイスブックもやればeメールもやりとりされますし、ほかの学生さんと比べて年齢を感じさせませんでした。ただ、一般論として高齢期になると依存性が増大して子供の教育に近い教授法が必要になると言われているということです。

さて、成人の学習が自律性によるものであるとして、学習意欲があったとしても、それが出来ない状況もあるわけです。いわゆる学習を妨げるといった阻害要因も明らかにされています。

最初に挙げられる阻害要因としては、制度的要因があります。制度的要因というのは何かというと、制度が若い人に限定されているなど、教育システムに柔軟性がないことで学習が妨げられる場合です。日本の通学制大学は、その多くが18歳から24～25歳までの学生に限定され、一定の年代のみを受け入れる制度になっています。しかし、アメリカは、通学制大学であっても成人学生が一定の割合を占めるわけです。こういった制度的要因は、学習の阻害要因としては障壁として大きいものです。私の知人の例ですが、彼女は大学受験を失敗したのですが、親が浪人を許してくれず、英語の専門学校に進学、卒業後、外資系企業で働いていました。当時の日本では25歳すぎて大学に入るという人は稀だったわけです。そこで、同僚のアメリカの人から「大学行きたいならアメリカ行きなよ」と言われてアメリカへ行きを決断、最初はアメリカのコミュニティーカレッジに入って、その後3年制の州立大学の学部にトランスファー、最終的に大学院博士課程まで行き、博士号を有してユネスコに勤めていました。当時、あるいは現在であっても、日本の大学制度では年齢規範は強く、また就職する際も新卒でないと受け入れられなかった。25歳を過ぎて、また就職してから大学行きたいと思った場合、日本では難しいと心理的に思ったのかもしれませんが、実際、そのような人は非常に多かったと思われます。

状況的要因というのは、経費、時間といった個人を取り巻く状況です。経費と時間は生涯学習を妨げる二大阻害要因と先ほど言いました。情報的要因、これは情報の格差があるということです。ボストンの公共図書館ではオンラインの教材が自由に借りられる、いろんな教材があるとのお話をしました。でも、移民の人は、借りられるのに自らアクセスしない場合も多い。そのような存在すら知ら

ない可能性もあります。一方で、そのように疎外されている人たちを支援するNPOもあるのです。以前、ボストンに行ったときに、P2P University (peer to peer university) というNPOの活動をしているMITの大学院を出た関係者とお会いしました。このNPOは、移民のためにオンラインで学習機会を提供する活動を行っており、アメリカにはそのような支援を行うNPOが存在し、社会のセーフティ・ネットになっているといえます。ただし、現実として情報量の格差、情報のアクセス格差は存在するのです。その他には、「学習するには年を取りすぎている」「自信がない」などの心理的要因も阻害要因の一つになっています。

理論的にいうと、何度も申し上げていることになりますが、成人は自分で決定して自律的に学習するのです。アメリカの研究によれば、学習する人は、そもそも学習に関する成功体験があり、また学習が楽しく面白くなり成長欲求に合致する、そしてさらに学習で満足した経験をする、ますます勉強するようになるわけです。ところが、学校時代に学習に良いイメージがなく、報われた思いや経験がない人は、学習を忌避し、学習しても無駄と思い、ますます学習しなくなっていくと言われます。そうすると、人生100年時代と言われて、学校を離れてから人生が長くなっていく中で、学習する人と学習しない人の差は、ますます拡大していくというわけです。それでは、どのような人が成人になってから自分で学習するのでしょうか。やはり、過去の学習歴というのが大きいと言われます。自己効力感、自己概念、個人の責任感、オーナーシップ、エージェンシー、いわゆる主体性とか言いますが、学習する人としらない人の差としては、このような個人特性があるのではないかと、いったことがよく研究されています。

産業技術大学院大学の先生方は、これまで学習したことで報われ、学習することはいいことだと思われた経験が多いのではないかと思います。私は、失敗も多く、学習で報われてはこなかったようにも思いますが、それでも私も学習したほうがいいとの価値観はおそらく持っているのだと思います。「学習したら幸せになる」「学習したらいいことがある」と思っているわけですが、そういう考えを押しつけてはいけないと思う場面があるのです。「本当に学習したくない」「もう嫌いだ、こんな学習は嫌いだ」という人に対し、「それは実はよくないよ」とは言えないわけです。個人の考えはそれぞれ尊重されなければならないからです。しかし、研究の結果を見れば、「学習している人は幸福度が高い」「学習している人は収入も高い」「学習している人のほうが雇用は安定している」のは事実なのです。という点で、自律的に学習することは益が多いとの前提で、どういう人が大人になってから自律的に学習するかを測定する尺度の例を紹介します。自律的学習の構成概念がわかるかと思います。

「計画的に問題を解決する」「仕事に優先順位をつける」「時間をうまく管理できる」「優れたマネジメントスキルを持っている」「きっちりとした時間枠、期限を設定する」「自分自身の学習計画を立てることを好む」「体系立てて学習する」「問題に着目することができる」「理由を知りたと思う」「新しいアイデアを批判的に評価する」「自分自身の学習目標を設定することを好む」「自分の

失敗から学習する」「新しいアイデアに対してオープンである」「自分で解決できないような問題を出されたら援助を求める」「責任感がある」「自分のやることを評価するのが好き」「自分への期待が高い」「自分への基準が高い」「自分の能力を高く信頼している」「自分の限界に気づいている」

「情報を探し出す能力に自信がある」「勉強を楽しめる」「学習の必要性がある」「挑戦することが楽しい」「新しい情報を得たい」「新しい情報を得るのが楽しい」「時間を決めて勉強する」「自分に厳しい」「判断する前に事実に関する情報を集めるのが好きだ」「物事を整理するのが得意である」「論理的だ」「几帳面だ」「自分のパフォーマンスを評価する」「自分のパフォーマンスを評価する自分なりの基準を設定することを好む」「自分の判断や行動に責任を持つ」「きっと自分自身の学習を追求していくことができる」「自分で情報を見つけ出すことができる」「自分で何かを決めることが好き」「ゴールを設定することを好む」「自分の生活をコントロールできる」といった項目が並びます。つまり、こういうことができる人が自律的に学習する人と想定されています。このようなことができる人は、おそらく、職業人としても優秀な方と言えるのではないのでしょうか。

すべての人が自律的に学習できると仮定するのは難しいということもあって、先ほど紹介したノールズは、学生と「学習契約」結ぶ実践を挙げています。自律的、自己管理的にできる人ばかりではないというのが現実なのでしょう。わたくしは「学習契約」を学生との間で結んだことはないのですが、どういうものかについて説明しますと、学習の目的、学習の支援や戦略、いつまでにどうするかを明確に書かせて、教員と学生で実施にむけて契約を結ぶということのようです。社会人の博士の学生ですと時間の使い方に工夫があるので、契約というかたちで、一緒に研究の進捗状況について合意形成をするのはいいのではないかと思うところです。

最後に、人生の転機と学習の関係について触れたいと思います。実は学生と話すときに学生が一番関心を持つのは、この人生の転機と学習との関係、特に、人生の転機に学習の動機づけが上がるという理論だったりします。特に心理的危機が生じた際、そこから立ち直ろうとしたときに、成人は学習へのモチベーションを持つことも多いようです。人生は、山あり谷ありで、人それぞれ個人的にはいろいろな経験をするわけですが、心理的危機に落ちいったときに、たとえば大きな病気などで自分の生きる意味を探究する中で、それを乗り越えどうにかしようとする時に学習へのモチベーションが生じるという理論があります。今日はこれには触れないつもりですが、そのような理論もあります。

もちろん、心理的危機の最中では、人は絶望に陥って立ち上がる気力もないわけです。ですから、そこから立ち上がれる人が学習で自分の人生を組み直すということになるのかもしれませんが。キューブラー・ロスという「死の受容過程」について多くの書籍を書いている人がいますけれども、ロス は、つらい経験や心理的危機に陥るといことは、洗濯機の中に石として入るようなもので、洗濯機の中で石が回って、その後ピカピカになるか、ばらばらに砕けちるかだと言っています。ピカピカになって出てこられた人だけが、そのつらい経験や心理的危機を糧にし、そこから立ち上がる契機と

して学習活動が不随し、人生の転機の中で学習のモチベーションが生じるのかもしれませんが。

前半は理論編ということでしたので、成人学習理論の主要なものをご紹介いたしました。ご質問とかあればと思いますが、いかがでしょうか。

**中鉢FD委員長** 先生、ちょっとその前に、後半のお話の内容って簡単に言うとどういった内容になりますか。

**岩崎講師** 後半はファシリテーションなどの実践についての話をしようかと思っています。

**中鉢FD委員長** なるほど、分かりました。じゃ、まず一旦ここまでというところで、どうもありがとうございました。

ご質問、せっかくですので、たくさんいただければと思います。ちょっと時間少ないですけども。

**三好教授** ありがとうございます。実は私ずっと学び直しの研究やっていて、岩崎先生の放送大学の講座も実は履修していたので。何か復習になった部分もあり、新しくああそうだっけみたいなのところもあり、非常に今日は実はすごく楽しみにしていたので、後でまたちょっとお話ししようかなと思っていました。

**岩崎講師** うれしいです。

**三好教授** 調査されていたとおっしゃったじゃないですか、放送大学の費用で。あの中で焦点を当たっていたのが、学習意欲がない方をどうしたらいいかみたいなのところだったように思います。私が今考えているのは学習意欲があるのに学習に行かない人みたいな、あともうちょっと押してあげれば行くのに、行かない人が結構いるということが分かってきました。その辺りってどういうふうにお考えですか。

**岩崎講師** 全く学習意欲がない方に関しては、哲学的な抽象的な話になりますが、生きる意味や学習意欲を持たせることから始まる必要があると言われていています。実践共同体のように仲間と一緒に学習すると学習意欲が向上する傾向があります。楽しい雰囲気や学習の場をつくってあげると学習するのです。成人の場合、教員ではなく仲間がいるというのが良いようです。かつ、学習活動は、人間関係上も学習の内容でつながる関係なので、その人間関係は快適ということも言われます。そういう人たちにとっては、モチベーション上げるのには仲間と一緒にやるのが大事と思われれます。

**三好教授** はい、分かりました。ありがとうございます。

**岩崎講師** インフォーマルな場は大事で、お茶を飲みながら、お菓子を食べながら、お酒を飲みながらというのが、成人の学習にとっては有効とも言われています。そうやって仲間ができると、一緒に学習すると言われたりします。

**三好教授** ありがとうございます。

**中鉢FD委員長** 三好先生、どうもありがとうございました。ほか、どなたか。

**牧野特任教授** 興味深いご講演どうもありがとうございました。2点質問させてください。

まず1点目なんですけども、アンドラゴジーとかジェロゴジーで、年齢で分けられていたんです

けども、大きな組織でいうとこれはグラデーションになっているなというふうに思っています。要するに、分布は変わっていつていると。若い人でも成熟している人はいるし、中間ぐらいでも頼り切ってしまうような人もいて、そこら辺に関する調査結果とかあるんでしょうかというのが1点目。

2点目、先ほどの4象限のお話があって、勉強する気もなく勉強もしなかったという方が、4割が多いというふうに私には聞こえました。充実しているから学ぶ必要がないと思っている人もいると思います。ただ4割というのはちょっと多めに見積り過ぎているのかなというふうな印象を持って、ちょっと伺いました。ここに関して何かコメントあったら、よろしくお願いいたします。

**岩崎講師** まず、1点目はこの後にお話しますが、子供でも成熟している人がいれば、大人でも成熟していない人もいます。個人差があるわけです。その個人差に応じてどう指導していくかのモデルがあります。高齢になればなるほど個人差が拡大していくのだな、というのは実感としてあります。個人差が広がっていく過程でもあるのです。

**牧野特任教授** ありがとうございます。ちょっと私は教育の経験が浅いので、そういうところも最初から見極められると便利だなと思ったので。

**岩崎講師** そのモデルは、学習者と教育者との関係を理解する上でとても良いものです。2点目には、現状に満足し、学習をしない人も確かにいるかもしれません。ある知人から「うちの娘は、「お父さんとお母さんと一緒にずっと暮らしたいし今のままで何の不満もないので、別に勉強しなくもいいし、いい大学に行かなくてもいい」と娘は言うけど、どうやって大学進学にモチベーションを持たせたらよいんでしょう」と聞かれたことがありました。現状に満足すると学習しないという傾向はあるかもしれませんね。4割の回答の一部に入っているというのは、確かにご指摘のとおりだと思います。一方で、人は自分が満足できない状況が訪れることがある。たとえば、知識や技術がなく自尊心が傷つくといった簡単なことから、自分が死に直面するような重たい病気になるとか、人は「今のままではいけない」「これはまずい」と思ったときには必死になって学習するのではないかと思います。この4割の中には、確かに現状を満足している層の人が一定はいるとは思いますが、それを細分化していくと、無業で収入がない場合、ウェルビーイングの値が著しく低かったりします。推測ですけど、必ずしも現状に満足しているので学習していない層であるとの結論ではないように思いました。

**牧野特任教授** ありがとうございます。多いと言っているわけではありません。ただ、4割がちょっと多く見積もっているのではないかというだけのことです。実は私もそこは興味があって、恐らく一定じゃないと思うんですね。人間というのは、経時変化をしている。そこをうまく何かしらモデリングできると面白いなと思っていました。さっきの転機があったら変わるんだというのも一番のポイントだと思いました。私専門が生物工学なんですけども、トリガーがあるから変化するんだという風に、そこら辺のタイミングが見えれば、より教育効果を上げることはできるんだろうなというふ

うに思っていました、ちょっと質問させていただきました。

**岩崎講師** ありがとうございます。私も、そのトリガーに興味があります。なぜ学習するかというと、意外に否定的要因が学習動機に影響するのではないかと思います。たとえば上司から、「おまえは何だ」と理不尽に叱られたときに、「自分はこんなんじゃいけない」「こんなこと言われて悔しい」といった何かネガティブな理由のほうが意外とトリガーとして強いのではないかと思います。成人になってから「こんなんじゃいけない」、自分が思う理想と現実のギャップを埋めるようにするときに動機が喚起されるのではないかと思います。

**牧野特任教授** どうもありがとうございました。

**中鉢FD委員長** ご質問どうもありがとうございました。

すみません、ちょっと時間ですけど、私どうしてもお伺いしたいことございまして、社会人の学習において経験がリソースであるということは、もうまさにその通りなのだろうと思います。ただし特に新しい何かを学習する際に、その人が持っている経験がその学習を阻害しているという場面が結構見受けられるように考えております。そうなってしまうと、どうしてもその人の学習が今までの経験の延長線にあることは受け入れられるけれども、そうでないことをすることについては拒絶してしまう、こんなことがあるというふうに感じております。

そういった場合に、新しいやり方を教えると、それがその人の経験と大きくかけ離れていた。たとえば、その人は今までの経験で〇〇ということをやっちゃいけないんだというふうに経験をしていたとします。ところが、「実際にそれやってみたらどうなりますか、やってみましょうよ」というふうなことを言う。あるいは、その人がやっている流儀と別な流儀、こちらをたとえば教えようとする、こういうとき物すごく拒否反応を示す方がおられる。経験は大事にしなければいけないのですが、そういった経験を持っている人に対して、さらなる新しいことをお伝えするにはどうしたらいいんだろうかと悩むことが多くございまして、何か先生のお考えをお聞かせいただければと思います。

**岩崎講師** 私自身は、知識として知っているだけですが、アンラーンという言葉が最近出てきています。学びほぐしとか学習棄却ともいいます。新しい知識に対して経験が邪魔をするということなのです。特に産業技術大学院大学の学生さんと先生方が接する上では、そういうことは障壁になるのではないかと思います。そのときに考えられるのは、社会の変化に伴ってマインドセットを変える必要性を伝えるしかないと思います。つまり、学びほぐしをどうするかを設計していくことかと思います。経験が学習の資源であると言っているのは、人生的な学習というのでしょうか、人生における学びをどう考えるかといったときには有効だと思いますが、いわゆる科学・技術的知識やスキルに関しては、アンラーンが先に必要な場合もあるだろうと思いつきながらお聞きしていました。

**中鉢FD委員長** ありがとうございます。まさにアンラーンってキーワードだと思うんですね。あと社会人の方が学ぶときのマインドセットですかね。子供はマインドセットはないので、何でも受け入れられる。大人になってしまうと自分たちが今までやってきた学習に対する経験に当てはめて、

こちらは学びに来ているんだから、それに従った教え方をしてくれるだろうという期待があって、それに外れるとまた混乱をしてしまうというようなことも見受けられたりするんですね。そのときに、アンラーンが大事なんですよという話は、機会があればやっています。ただ、なかなか伝わらなくて、何かどうしたらいいのかなと思っています。

**岩崎講師** ノールズが指摘しておりますが、経験が資源であるとする意味は、その人の経験がその人のアイデンティティを形成するので、その経験を否定すると、その人は自分のアイデンティティを否定されたように思うため、気をつけなさいのことです。その点に気をつけながら、新しいことを教えることの工夫をしなければならないことを、今伺って考えました。

**中鉢FD委員長** ありがとうございます。我々ちょっと日々それで悩んでおりますので、今日はどうもありがとうございました。では、まず前半どうもありがとうございました。

#### ○休 憩 5分

**中鉢FD委員長** それでは、休憩に引き続きまして、後半をお願いいたしたいと思います。

それでは、引き続き岩崎先生、どうぞよろしくお願いいたします。

**岩崎講師** アンラーンの話をした後、経験の話に戻して恐縮ですが、経験による学習を重要視する点で、コルブのサイクルモデルは参照に値します。経験した内容を振り返り、抽象的に概念化し、またその概念を試行、そして再度経験する、といったこのコルブのサイクルモデルが経験の活用という意味で有名なのです。このサイクルモデルの図を見てもなかなかイメージがわからないかもしれませんので、コルブのこのサイクルモデルに基づいた経験学習の例をご紹介します。

社会学の最初の講義では、格差とか貧困といったテーマを扱うことが多いのですが、学生の一部はその現実を知らないことも多いわけです。ここで紹介するのは、そういう学生が、実際にフードバンクに行った経験に基づく学習の例です。フードバンクとは、ご存知のように、市場で流通できなくなった食品を貧しい困窮者に配給する活動です。

「授業の一環としてフードバンクに行けと言われたわけですがけれども、授業の一環としてこのような経験ができるとは思いませんでした。フードバンクでの時間は、ほかの授業でレポートを書くことや週末フードバンクで食品などを受け取る人を見かけるのと全く違いました」と最初はその経験の感想を述べています。社会学で貧困とか格差といっても、大学に来る学生さんはどちらかというと貧困の状態にない学生さんが多いと考えられるので、想像力が働かないことに対し、逆に現実としての経験に基づく学習をさせるわけです。

この具体的な経験の後、この学生は次に振り返って、それを客観的に見るといった学習のプロセスを経ます。そのコメントは、「フードバンクで作業をしていると、毎日毎日たくさんの方がやってきます。今は慣れましたが、その数は本当に圧倒されました。そこに来るのは、私や友人や家族と同

じような人たちでした。真面目に働こうとしない人やお金を浪費するための人がフードバンクに来ると思っていました。でも、私が会っていたのは、そんな人たちではなかったのです」という、客観的にその状況を振り返って評価するプロセスになります。

次に、これを抽象的に概念化するとプロセスになるわけですが、「社会的不平等や政治問題に関する大学の講義内容を踏まえると、フードバンクでのサービスラーニングは視察以上に意義ある経験でした。そこでは個別の社会問題と思える、たとえば飢えという状況が現実には社会レベルでの構造的な不平等の結果であるとの事実と直面させられました。州に飢えている人々が増加したのは、地域の自営農家に対する政治的決定の影響であるということを、正直言ってそれまで理解できなかった」というコメントになっています。

これに対して、実践的にどういうアクションを起こすかというプロセスになると、「飢えの問題は個人の問題ではなく社会的要因によって引き起こされている、そのような理解が進めば同様の物の見方はホームレスや非識字などの社会問題を理解する洞察にもつながるでしょう。このような社会問題には、どのような共通性があるのか、どのように理解すべきなのか」という、コメントの変化が見られるのです。この具体的な経験、それから客観的に振り返る、そして抽象的に概念化する、実践的に試行するという端緒に、フードバンクでの経験があり、それが学習のリソースになっているのです。

経験がリソースだと言う場合には、経験がない人に経験を付与するところから始まり、それを概念化して行動させ、意識がなされていないところを意識化させるというプロセスが必要です。企業は、このコルブの理論を重用する傾向があります。企業での経験を生かして、それを振り返って概念化して、また新たな経験を付加していくということに価値を感じているのかもしれません。

経験には人生全体の経験が含まれるので、それぞれの経験は現在の状況と同じくらい学習者自身の過去によっても影響を受けます。経験をどう扱うかが社会人の学習の肝のような気がします。経験は活用されるべきであり、経験を上手に取り扱わないと学習効果は逆行し、経験を扱うのは難しいと、今日私もあらためて考えているところです。

アンラーンについても目を向けていく必要があると思われますが、同時に成人学習における経験については、前に紹介したリンデマンの「成人教育における最高の資源は学習者の経験である。…経験は、成人学習者の生きた教科書である」という言葉は非職業的な成人の学習においては重要と思われます。リンデマンがいった経験が資源ということに関して、先生方は言葉だけではイメージが持てないかもしれませんので、「あああれは成人教育の典型的場面だった」という私の経験を一つお話しします。

何十年も前ですが、私の父が末期がんの宣告を受け、手の施しようがなくなり、最終的な選択肢としてホスピスに入ることになりました。ホスピスに入れるまで、私自身、日本の終末期医療について思うところも多くあり、その話を知り合いの研究者の方に話したところ、東大の医学部で社会人向

けの倫理講座が開かれるので参加してみたらと誘われ、特別に受講させてもらいました。講座は、3か月にわたり、毎週金曜日夜の6時半から9時まで東大の医学部の建物で行われました。受講者は、医師、看護師、薬剤師、臓器移植コーディネーター、サイエンスライターなど様々な方々でした。そのとき、参加した講座の世界がまさしく成人学習の場というもので、主にさっき写真でお見せしたようなグループワークを行うわけです。講師は、医学部の先生はそう多くなく、法学部、哲学の先生や院生が最初に30分から1時間ぐらい講義やビデオ視聴などで問題提起などをした後、6人ぐらいからなるグループでその日のテーマを議論するんです。

グループは多様な背景の人が毎回シャッフルされて構成されて、医師、臓器コーディネーター、薬剤師など、いろんな方とお話する機会でした。異なる方々の考えはその方たちの経験に裏付けられており、知らない世界の話も多く、とても勉強になりました。グループの中で、医師の方が自分の経験としてお話ししてくださったのは、「息子さんに最後に死に目に会わせたく一生懸命救命措置をしたところ、息子さんがやってきて「何だ、まだくたばっていないのかよ、おやじ」と言われ、生命倫理という価値観が揺らぐ場合がある」「臓器コーディネーターとして臓器提供への説明に行くと、親族が集まっていて、「おまえが臓器を提供しなければ死んでしまう。どうにかしろ」と親族会議からの圧力が一人の人にかかる場面に遭遇した」など、いろんな話が出てくるんですね。あるいは、「医学部を出たばかりの医師が人事交流のある地方の田舎の病院に行くと、患者さんと会話が成立しなくて、的確に症状を聞き出せない」などなど。生命倫理講座といったフォーマルな学習の場面ではありますが、一種のインフォーマルな感じで話されるそれぞれの経験知が、私にはとても勉強になりました。「成人教育における最高の資源は学習者の経験である」という言葉どおり、講義自体よりもそれぞれが経験してきたことをグループワークで語ってくれたもの、それが倫理の問題を考え、学ぶ上での資源だったのです。

その上で、先ほどのアンラーンの話なのですが、成人学習者は経験に基づいて学習すると同時に、学習によって過去の経験を再評価するということがあります。学習者の自己開示に基づき経験を引き出し、日常的な問題関心に近づく学習プログラムを意図する必要性はあると思います。そのため、学習者が社会人である場合、その人の経験を十分に配慮しなければいけないと思います。けれども、経験の全てが学習の資源にはなるとは限らないし、学習の障害となる場合もあると、確かにしっかり認識しなければならないと今回思いました。これはアンラーンという観点から、価値、知識を意識的に捨て去って学び直すことが必要な場合があるわけです。産業技術大学院大学での学び直しは、「学び直してアンラーンのことである」「みなさんの経験はこれからアンラーンしてイノベーションしなきゃいけないだよ」と大雑把ではありますが、言い切っても良いように思いました。

また、成人のほうが多く経験や質の高い経験をしていると思いがちなのですが、そうではないとも言われています。たとえば、海外で暮らした子どもは、他の人とは違う貴重な経験をしていると思います。ですから、成人のほうが良い経験をしているとは必ずしも言えず、経験の質や量に個人差

があるということです。ただ、最近、体験格差とか経験格差などと言われます。恵まれない家庭環境で育つ子供は、文化資本の蓄積ができない状況に置かれ、豊かな経験をするができない場合があります。そこで青少年教育振興機構という組織が、児童養護施設のお子さんたちを対象にスキーなど、普段できない体験や経験を増やす助成金を出して働きかけをしています。経験というのはその人のキャリアや人生で大きな意味を持つということでしょう。

たとえば、小さいときにキャンプの経験があるとキャンプ好きになる、学級委員やっているとリーダーシップ取れるようになる、など、経験がその人のキャリアをつくるということがあるでしょう。この議論は面白くて、リーダーシップを取るのが上手そうだとまわりから思われて学級委員に選ばれ学級委員をやって、ますますリーダーシップ取れるようになるのかもしれませんが。人付き合いが嫌いだから人と付き合わない、その結果人間関係としての交流の経験が少なくなることもあるかもしれません。機会がある、ないということよりも、その人の性格特性が経験の量を左右している要素もあります。いずれにしても経験がその人のキャリアの根底にあることは紛れもないことだと思います。

さて、成人学習実践編としては、教員はファシリテーターの要素を持たなければならないということを考えたいと思います。学習者を尊重し、くつろげる快適で友好的なインフォーマルな雰囲気や場をつくることが大事だと思います。その仕掛けや工夫をすることが必要で、フォーマルな授業のほかに、学生がお茶を気楽に飲める場所を設けるなど、これまでも申し上げてきました。たとえば、アメリカのIT企業の事例ですが、その会社では、従業員が自転車でそれぞれの自宅に立ち寄って誘い合って一緒に会社に来てくる、昼休みにオーガニックな市場に行って買い出しをして一緒にお昼を作る、お昼を作って一緒に食べながらプレゼンをして話を聞く、ビールを醸造してお客さんにお土産であげる、そういうことを企業全体でやるようです。

そうやって食事を一緒に取る、お茶の時間を設けてみんなで雑談するという仕組みや工夫は、アメリカやイギリスなどの組織や大学ではよくやることのようにです。そういうお茶飲み場は物理的にも機能的にも大事だと思います。昔、研究所に勤務していたとき、3時になるとお茶の時間でした。出張した人がお土産を持ってきて、先生によっては外国から買ってきたブランデーを紅茶に入れて…考えるに、そのような場で、プロジェクトのアイデアの種がいっぱい出ました。ですので、そういう仕組みは本当に重要で、心理的安全性が担保された、くつろげる快適な雰囲気、そんなインフォーマルな場や時間がとても大切なんだと思います。

成人学習者が望むものは、平等なパートナーとして扱われること、生活経験や職業経験の注意を向けられること、学習プロセスにかかわるような主体的な活動を積極的に行わせることが重要と言われています。問題解決のための知識が付与されることが必要で、このことはノールズがアンドロゴジーの一つとして言っているように、成人学習者は即座に何かを得たというその感覚が必要なんですね。教室に入ってきたときと出ていくときに、何かが自分は変わったという感覚が重要と言わ

れます。特に問題解決ということ言えば、解決につながる知識が1つでも2つでも獲得できる、課題がすぐに実践に結びつく、ここに来られる学生さんはここで得たことが次のステージに上がるキャリアアップにつながる、そういった目に見えた何かが重要と思います

社会人は一方的講義よりは、一緒にかかわらせて実践するなどの学習者の主体的かかわり、さまざまなやり方を組み合わせた出し物を行うことが必要とされます。新しい人との出会いや知的刺激も重要です。大事なのは、感情に対する配慮が必要なことです。

先ほどご質問された方の回答にもなりますが、子どもと大人の学習には漸次的移行があるのではとの指摘がありました。先ほど、子供の教授法をペダゴジーというと、大人の教授法をアンドラゴジーといって対立的な話をしました。ところが、ノールズは、子供と大人の教授法を2つに厳密に分けられないと後に考え直し、「Modern practice of adult education」の版を重ねたときに、副題を「ペダゴジーvsアンドラゴジー」から、「fromペダゴジーtoアンドラゴジー」と変えました。要は、子供から大人への漸次的移行もあり、また個人差もあります。

グロウという人が提示した成人学習者の成熟度を分けた段階モデルが漸次的移行を考えるうえでは有益かもしれません。グロウのモデルの段階1はdependentと言われる依存的学习者、これはいわゆる子供の学習者と近いものです。この段階の人は、小学校の教師のような牽引者、コーチが必要なのです。「こうしなさい」「あしなさい」「これを学びなさい」という指導が必要ということです。語学などの学習ではこういう指導的内容が重要なため、学ぶ内容によっても違うのかもしれませんが。しかし、こういう依存的な学習者が成人であってもいるのです。

次は、interestedと言われるような、関心的学習者です。関心はあるのですが、自分からは学習できない、やる気はあるけど実施に至らない、という学習者です。そういう人はやる気を起こさせる人や、学習に対するガイドが必要なわけです。

段階3はinvolved、いわゆる関与的学习者です。ここからが成人学習者として望ましい層に入ってくるんですが、このときの教育者の役割はファシリテーターというものです。教育者の役割は、それぞれの人たちの考えや経験を引き出すことです。学習スタイルとしては、グループによるプロジェクトであったり対等な立場に立つ教員に促される議論であったりセミナーなどになります。

段階4が、自己決定と言われるようなself-directed、いわゆる自己主導的学习ができる段階になります。この段階は学習を自律的にできることになります。この段階の人たちは、論文を書くとか個人で学習するなど、自分で学習することになりますので、教育者の役割はコンサルタントといった形になります。先生方が扱う学習者が、どの段階かということによって、先生方の立場が変わるんですけど、お話を聞いていると多分段階3、段階4ぐらいの学生さんが多いのかなと思います。基本的には、教育者の役割としてはファシリテーター、もし非常に優秀な学生さんだったら先生方はコンサルタントという位置づけかもしれないですね。

初めの依存的学习者に関しては、ドリルや講義になります。先ほどご覧いただいた小学校の授業

の風景は、依存的学習者ということになるわけですが、学習者が成熟して、高校生などで自己主導的学習者になると、独自のプロジェクト、生徒主導の議論とか探索学習とか探究学習などができるようになります。このように自分で自律的に学習できる状況が成人学習者の理想なんですね。自分で計画して学習できるということです。

ノールズの言葉ですが、from teacher to facilitator of learningということで、成人学習者の成熟に伴って、やはり教員ではなくファシリテーターになる、このことが結構重要だということです。

それで、みなさんの手元にファシリテーションに関するワークシートがあると思います。ファシリテートというのは、意見を引き出す、それぞれの経験も含めて引き出すことです。この図によりお話をしているように、ファシリテーターだけが教育者の役割ではありません。コンサルタントということもあるし、やる気を起こさせるような働きかけをする場合、ガイド的役割を求められます。また本当に知識がない場合はコーチングしなければならない場合もあります。そのため、学習者のタイプを見極めて役割を変えることになるわけですが、成人の学生を尊重して平等の立場に立つということであれば、先生方のお立場はファシリテーターでもあるとの認識を持たれることも重要かと思ひまして、ファシリテーションの教材を持ってきました。

このビデオを、ちょっと見てみてください。単に見るだけじゃ飽きてしまうので、ファシリテーションの定義、グループダイナミックスにおける役割、基本原則、グループにおける意思決定プロセス、まとめ、自分が参加した経験におけるよいミーティングと悪いミーティングについて、書いていただければと思います。

このビデオがつけられた背景をお伝えしますと、オレゴン州にあるポートランド州立大学に訪問した際に、大学の社会人むけエクステンションセンターのようなCEPE (Center for Executive and Professional Education) という機関を訪問しました。ここは企業の人事担当者のニーズに応じて研修教材を制作して講座を提供するところでした。受講料は企業の従業員が負担しますが、企業の人事担当者はCEPEに研修ニーズを提示し、両方で相談しながらニーズに応じた研修教材を制作します。私はオンラインの社会人向けの研修教材をどのように制作するのかについて興味があって、助成金をいただいて制作したビデオです。

ということで、ちょっと見ていただいて、ワークシートにファシリテーションについて、メモ書きをしていただければと思います。ファシリテーションというのは、明らかにアメリカでのミーティングの運営の仕方です。ですから、アメリカ的発想によるファシリテーションを理解してもらいと思います。

#### 〔ビデオ視聴〕

**岩崎講師** 最初に出てきた冒頭の方は、カウンターパートの方で、アメリカ人と結婚してCEPEのアシスタントディレクターをしている日本人の方でした。放送大学で社会人にどういった講座を提供するのか、こちらのニーズを聞いてくれて適切な講師を探して、教材を作ってくださいました。ミーティ

ングでのファシリテーターの役割としては場づくりが非常に重要で、その場づくりの中で社会人が気持ちの上で満足するという状況をつくるためファシリテーションの重要な点についてビデオは説明しています。

ビデオで言っている生産的な意思決定、合意形成などを含めて、ファシリテーションのスキルを基本として持っているのと持っていないのでは、社会人の学生と接するときの引き出しが変わってくるというか、引き出しが増えると思うわけです。特にゼミなどではグループダイナミクスの中で経験について言及し、そこで対話が生じて相乗効果が起きるような場づくりが必要です。そこでは、対立の構図や葛藤が生じる場合もあります。それをファシリテーターはうまく合意形成に導くといった力量が求められるということです。まずは、自分たちでルールや規範を決めたうえで、グループ内のファシリテートをしていくことが必要になります。

ファシリテーションのコア技能については、3つ先ほどビデオに出てきましたが、特に「丁寧に傾聴すること」「アイコンタクトを維持する」「ニーズをきちんと聞いて手助けする」「心からの賛同を得る」「心配していることを表面化させる」「問題を提起する」「全員を議論に平等に参加させるために働きかけをする」「イントネーションをうまく使う」「継続的に言い換える」などです。そのときに、ファシリテーターは、「それはいい考えだ」とか言うてはいけないのです。中立的ということは、「あなたの考えは面白い」とか褒めてもいいけないですね。「あなたの言っていることはこういうことですね」と言い換えることは良いのですが、「あなたの言っていることは非常に有益だね」などと、価値にかかわる言葉は使わない方がいいということです。指導の場面では褒めることも大事なので、グループワークのときの話です。

「フィードバックを受け入れて活用する」「時間とペースを確認する」「プロセスを監視して調整する」「本音を引き出す」「重要な問いかけをする」「オープンな姿勢を保つ」「中立的な立場を保つ」「役立つ発案をする」「楽観的で前向きである」「明るい雰囲気をつくり出す」というのが重要です。「対立を上手に処理する」「問題解決手法を取る」「プロセスに集中し続ける」「アイデアをピンポンする」など、要するに、グループの中で会話がスムーズに出てくるのが重要だということです。「ユーモアは効果的に使う」「穏やかで楽しそうに見える」「心理的安全性を確保する」ということです。「進め方を柔軟に変更する」「発話内容を差し支えなく要約する」「いつ行動を停止すべきかわきまえている」といったことがファシリテーションに役立つ振る舞いとして挙げられています。こういった意識を持つか持たないかによって、学生さんに接する内容も変わってくると思われます。必ずしも指導の上で中立的な立場を保つこともできないでしょうし、指導する上で心から学生に賛同を得るようなことは言えないかもしれません。必ずしも時間とペースを守って何かをやるわけでもないかもしれません。あくまで参考として、考えていただければと思います。

成人学習のキーワードとしては、経験、対話、振り返りの3つがあると思われます。これらの言葉は、アンラーンも含めて非常に議論の多い言葉だと思っております。経験に注目することは、アンラ

ーンを考える上でも重要です。対話ということは、ファシリテーションという形での場づくりが非常に重要です。振り返るということは、過去の時間を意味づけるということになります。過去の時間をもう一度振り返ることで、その時間が生きるという意味でも振り返ることが重要だということです。

最後に、どうすると対話できるのか、ということと一緒に考えたいと思います。この写真は、麻雀を4人でやっている風景です。麻雀はプレーの間、「そういえばあの話はどうなったっけ」と、気軽に話せる対話の場です。次はパーティの写真です。飲み会などの場では気楽にオフレコのように話せます。これはお祭りですが、お祭りは地域の人をつなぐには非常に有益とされます。米国のNPOの方に「NPOに人を誘うときはどうするの」と聞いたところ、飲み食いするようなフェスティバルの隅にブースを立てるといことです。そこで飲み食いしている人たちに声をかけて勧誘すると言っていました。アメリカでも、飲み食いというのがやはり非常に重要だというのがわかりました。

左下の写真はラジオ体操です。朝、犬の散歩で近くの都立公園に行ったところ、一、二、三、四、というかけ声が聞こえてきたので行ってみると、50人以上が手を一緒に動かしていました。そのときに突然、世話人の方が「1年間に一番楽しい暑気払いの日です。みなさん、今日、明日集まってください」と声かけをしていました。これはお金を取ってやる会員制かなと思って看板を見たら「無料。誰でも歓迎。お正月以外、雨、風、雪が降らなければ毎日やっています。冬は十数名、夏は100名近くなるときもあります」といった内容が書かれておりました。身体にいいと思って参加しますが、世話人の方が「おはようございます、今日は台風の後でぬかりますが大丈夫ですか」とか声をかけてくれます。全く知らないのに対話ができるという経験をしました。体操を介して、全く知らない人が集まって、「おはようございます」と挨拶し、ちょっとした会話をする、体操もそういう対話の仕掛けがあるなと思ったところです。

それから、真ん中が犬です。都会で犬を散歩していると、別に自分を表に出さなくても会話ができます。「おはようございます、ワンちゃんが調子悪いって聞きましたが、大丈夫ですか」とか、犬の話題で話ができるので、犬は対話の媒介になるツールだなと思います。くだらないような話をしているようですが、意外とそういう仕掛けが対話のツールだと思うんですね。一番端は読書会です。読書会というのも対話のツールです。なぜかという、本を介在させ、自分を表に出さなくて会話できる機会なんですね。犬もそうですが、自分をさらさないで、本によってプロテクトしながら、その内容を語る中で自分を出すわけです。感想を言ったり本を紹介したりするときには、自分のアイデンティティは垣間見られるんですけど、露骨に自分の話はしないで済む。本というものを介在して自分を出す。こういうものは非常に対話の仕掛けとして安全だし、とても楽しい仕組みだと思います。みなさんに対話の仕掛けを考えてみましょうということで持ってきました。

本フォーラムにお声がけいただいた際には、「どんな話がいいだろう、先生方の役に立つお話はなんだろう」と思いました。こちらに、「根は苦いが実は甘い」と書きましたが、何か実になるような

ことがあって、先生方のお気持ちが甘くなってもらえていたらいいなと思います。アフリカのこ  
とわざに「ドラムの音が変わったら、それに応じて踊る」というものがあります。それは政治体制が  
代わったら、それに応じて踊るということらしいです。ドラムの音に応じて柔軟に対応できる人間  
になりたく思いながら、そういうアフリカのことわざを読んだりしています。社会人の学生さんを  
扱うのは時に大変でしょうが、社会人の学生さんのドラムのリズムに合わせて、先生方も踊れるよ  
うに、お互い一緒に頑張りましょう。

以上、雑駁でしたがご清聴ありがとうございました。お疲れさまでした。

**中鉢FD委員長** 先生、どうもありがとうございました。それでは、質問よろしく願いいたします。

**三好教授** 学習契約のお話を、もう一回すみません。

**岩崎講師** パターンは幾つかつくれると思います。何月何日まで文献を読んできるとか、何月何日ま  
でリサーチクエスチョンつくるとか、博士課程の学生には「学習契約」をするといいいのではないかと  
いう話は同僚としたりはしています。ポイントは一緒に考えて一緒に合意形成することです。いつ  
までにやろうねと、サインをさせるという、そこがポイントですかね。社会人って、忙しいので期限  
がないと作業をしないことがあるので、必ずこのときまでにはやると決める、そのことが教育的な  
効果を持つかもしれません。私が学生さんに言っているのは、朝1時間だけ必ず机の前に座って、1  
行でいいから論文の文章を打ちましょね、習慣づけようね、とは話しています。

**三好教授** ありがとうございます。中鉢先生、PBLでやってみるとか。

**中鉢FD委員長** これをやるのはいいとして、このコントラクトって学生から教員に対する契約だけで  
すか。教員側にデューティーを発生させるような形になっちゃったときに、教員側がやらなかった  
から俺の予定が達成できなかったとか、言われかねないかと。

**岩崎講師** 確かに。これは学生だと思いますよ。学生だけが自らここまでこれをやりますとって、教  
員がオーソライズというか、じゃ頑張っってねということに留まるのではないかと思います。そうじ  
ゃないと教員はつらいですよ。

**中鉢FD委員長** そこまでは逆に約束はできないので。

**岩崎講師** できないですね。結構社会人の学生ってデマンディングですよ。ですから、そうではな  
く、「学習契約」は学生が自らやるためのペースメーカーじゃないかなと思いますね。教員側に課せ  
られることはあまりないですね。

**中鉢FD委員長** コミットメントの制約みたいなことにしたほうが、いいような気がします。

**岩崎講師** そうですね。多分これはコントラクトの主体は学生で、学生が自己的、自主的に何かをする  
ための宣言みたいな感じです。それを教員が頑張っってねって、そんな感じのイメージですよ。

**中鉢FD委員長** 宣言のほうがいいですね、そういう意味では。

**岩崎講師** デklarレーション。

**中鉢FD委員長** デklarレーション、そうですね。次に、高嶋先生、何か一言。

**高嶋教授** 幾つかの学習者のレベルによって教育側の役割というか、対応の仕方があるなというのは、そのとおりだなというふうに聞かせていただきました。その中で、成人と一口に言ってもいろいろな方々がいらっしゃる、大きな分類として子供といってもグラデーションになっているよねという話もありました。子供にアクティブラーニングは向かないというお話がありましたが、その子供というのが大体どれぐらいをイメージされて議論されているのでしょうか。今日の事例だと小学校4年生というのがありました。どこかのデータでは10代、すなわち小学校3年生、4年生ぐらいから、少しずつ自我であったりとか、その子そのものの思いが出てきたりすることが発表されています。そういうものをベースにしながら、子供にはアクティブラーニングはなかなか難しいよね、というふうに判断されているのか。子供という分類について、いかがでしょうか。

**岩崎講師** まずは、小学校4、5年生がクリティカルポイントだというのはそのとおりです。身近な例でいうと、質問紙調査に耐えられるのはその辺からとよく言われています。自分の言葉で語られるという意味では、小学校4、5年生がアクティブラーニングに入れられる時期なのかなという印象は持ちます。でも、もちろんこれも個人差があります。私が今付き合っている自治体は、学力調査で東京都の平均を超えるところなんですね。そこは低学年からアクティブラーニングをやることができる。学習者の成熟度の平均値が高ければ、学校もアクティブラーニングを導入できると思われます。

高校レベルですと、グロウのモデルに沿っているんじゃないかなと思った学校があります。それはカナダのオールズ（Olds）という地域の学校で、OECDでイノベーティブな学習環境の事例に取り上げられた総合制の学校です。そこでは、中学校のときは同一で、高校に入ると生徒が異なるストリーム（スクワットと呼ばれているのですが）のいずれかを選ぶんだそうです。その中の一つのストリームは、大学などの進学を目指す生徒を対象にしたもので、自己主導的に学習できる生徒が選ぶようです。その生徒たちは教室以外で勉強してもいい、先生が巡回している。自己主導的にできる生徒は、自分で学習をしたり仲間と相談したりして自分で勉強を計画して実施するのです。先生は回って歩いて、質問を受けたりアドバイスをしたりする役割なのです。グロウで言うと段階3か4という生徒と教員の関係性です。次のストリームは、日本の高校と同じく教室で先生が教えるコースで、生徒はグロウでいう段階1とか2なのだと思います。

ある年代になっていくと学力差も広がりますから、自己主導的な、自己決定できるような生徒には、先生が教えるのではなく、先生がファシリテーター的に回って歩くというやり方が有効ですし、アクティブラーニングでもすばらしい授業が成立すると思います。一般的には高学年からアクティブラーニングは非常に有効になると思われますが、小学校1年生は難しいんじゃないかという印象です。高校になると、高校では成熟度の高い生徒さんたちは、クラスルームで先生が教えるよりは、グループワークをしたり、自分で学習を進めたりするほうが有効であると推測できます。カナダでは、学習者の特性に応じた教員の役割が異なるやり方を取り入れていました。

**高嶋教授** ありがとうございます。日本の場合には、中学、高校になってくると受験という意識が大分高くなってきます。特に小学校の低学年ぐらいが一番自由にいろんな教育できるという感覚かなと思います。私も創造性教育というところに少しだけ足を突っ込ませてもらったときに、そういうふうに教わりました。でも逆に言うとその時期に枠にはめ過ぎてしまうと、それに慣れてしまって、中学校、高校と、受験の中で枠にはまった人たちがたくさん生み出されてしまっている気がします。その結果が、今の学習指導要領の変更につながってきたのかなというふうにも個人的には捉えています。その辺の日本の感覚というのを、ずっと変化を見られてきて、どういうふうに関心取られていますか。

**岩崎講師** そういう観点からすると、日本では子供たちが自ら発言する経験は学校教育の場面ではあまり多くやってきていないかもしれません。アメリカだとshow and tellといって、何かを見せて自分で説明することを小学校でよく行くと伺います。そうすると、自分の言葉で語るができるようになるのではないかと思います。比較的子供の学力が高い自治体でさえ、自分の考えや思いを表現するのが難しい子供が多いとよく聞くので、おっしゃるとおりだと思います。私は、国際バカロレア（IB）というプログラムに携わっていたことがあります。海外のインターナショナルスクールで授業を見ますと、文化度が高くて家で教育がしっかりなされた子たちが集まって一つのテーマで議論すると、すごく有益なディスカッションがされるのです。知識も豊かで、国や背景の違うお子さんたちがいる中で行われる議論と、自分の地域以外に電車に乗って外にあまり行ったこともない子たちが集まって議論するのでは、内容の多様性や幅が全然違うと思うんですね。そういう意味で、多様な経験を持ったお子さんたちの議論と、年齢・家庭・文化的な違いがなく、かつ知識や経験が少ない同士の議論では、やり方が変えなければならないと思います。

**高嶋教授** そうですね、子供がいる環境によって、全く違ってくるなというのは、そのとおりだなと思います。私も10年ぐらい子育てを海外でやって、日本に帰ってきたときに、多様性という感覚が日本と日本以外とでは違うように感じました。国にもよるかもしれませんが、地域にもよるかもしれませんが。日本でいうと、小学校の低学年ぐらいの子供たちをどういうふうにするのかなということを考えなければいけないと思います。今日の成人教育とは逆なんですけど、そこを踏まえた上で成人教育を考えていかないといけない。実際に私のPBLの中で、「自分の意見を言ってみな」というふうに言ってもなかなか言えない人たちが、社会人でこんなにいるのかというのをちょっと驚いている状況です。知識は持っているんですけど、考えとして自分の感情として考えをうまく出せなかったり、遠慮していたりする。そういう部分が非常に強い人が日本の中にはこんなにたくさんいるんだということに、ちょっと衝撃を受けました。その人たちをどうしていくかということも重要ですけども、遡っていくとやっぱり小学校低学年なのかなということに、今個人的には行き着いているものですから、ちょっとそういう質問をさせていただきました。ありがとうございました。

**岩崎講師** おっしゃるとおりで、これからの時代を生きていく子供たちは、どのような社会変動にあ

っても自律的に学習できる力がなくてはならないと思います。自分で意欲を持って、こういったときにはこういう学習ができると判断できなくてはならない。アントニオ猪木は、「元気があれば何でもできる」と名言を残していますが、誰もが元気で勇気を持って状況に対応していかなければならないわけです。このことを振り返ると、小学校のときから成人学習者になれるような教育をして、学校で嫌な思いをしたり、学習はしなくていいんだと思うような経験をしないで、学習すればいいことがあるんだよというふうに育ってくれたらいいなと思います。その意味で同感です。

**高嶋教授** ありがとうございます。

**中鉢FD委員長** まだ時間あるので、せっかく事務で太田さん、FD担当として何かご質問なりコメントなり、ぜひお願いしたいんですけども。

**事務局** すみません、本日はお時間いただいてありがとうございました。

今の高嶋先生の話、私も今ちょうど2歳の子供を持っていて、これからの学習、どうやって成人してからでも学習していける子供に育てられるのかというところ、興味深く考えているところです。難しい問題だなと感じました。

**中鉢FD委員長** うちの学生さんに対して、何か気になっていることはないですか。

**事務局** うちの学生さんは社会人になっても時間を割いて、お金を割いて通われている方々で、私も非常に尊敬しているのですが、その最初の4象限のうち、学習したくて学習できているというところで満足度の高い学生さんが集まっているという部分も感じます。一方で、学習したいけど、いろいろな制約でできない学生さんを本学に集めていくというところも、私たちの仕事かなというふうには思いました。

**中鉢FD委員長** どうもありがとうございます。

それでは、改めまして岩崎先生、どうもありがとうございました。

それでは、全体を総括するお言葉を研究科長、吉田先生、よろしくお願いいたします。

**吉田研究科長** 吉田です。本日は、岩崎先生、本当にどうもありがとうございました。

先生ご自身よくお気づきだと思いますが、大学院の教員というのが教職課程というのがなく、研究者や、実務家教員など、非常にたぐいまれな知見を持った人間が、そのまま教壇に立つというような形が取られています。その反面、本学には、社会の中で優れた人が、リスキルというよりは、オーバースキルのような、今までつけた考え方やスキルを超えるものを得るために入学される方が増えています。基本的には大学院のプログラムは研究者をつくるプログラムですので、研究者が研究を教えていけばいいというところからできていると思いますが、ここの大学院は非常にアグレッシブに新しい世界の中で求められているものをどんどんやっていこうという考え方でやっている面がございます。本学の教員が、何かおかしいなと思ったり、こういうこと知りたいなと思ったりしたことを、幾つものヒントをいただいたような気がいたします。本当にどうもありがとうございます。

また同時に、全員で暗中模索の中、手探りの状態で、正しい教育というのはどういうことなのかと

か、どういう方向に向かうべきなのかということを考えながら前に進んでいこうとしております。そういう点で、ここの大学院で起こっていることなどを見ていただくとともに、いろんなことを教えていただきながら、いい関係を持たせていただければと思っております。ぜひよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。全教員を代表いたしまして、御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

**岩崎講師** 過分なお言葉をいただき、ありがとうございます。

**中鉢FD委員長** 吉田先生、どうもありがとうございました。

それでは、本日の第36回FDフォーラム、内容については以上となります。改めまして岩崎先生、今日参加していただいたみなさん、質疑応答をしていただいたみなさん、感謝の意を拍手で表して終わりにしたいと思います。

今日は、みなさん、どうもありがとうございました。

○閉 会

# 2023 年度後期「学生による授業評価」 結果の概要報告

## 授業評価アンケート質問項目(通常科目)

| NO. | 項目                  | 設問                                                                                                                       | 回答                                                                                                   |
|-----|---------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1   | 出席回数(出席率)           | 出席回数(出席率)について回答ください。なお、Google MeetやZoom等を用いた対面授業がない授業回(動画配信のみの授業)があった場合は、担当教員からの指示への対応(動画の視聴、課題への取り組み等)をもって1回分として数えて下さい。 | ①0～3回(出席率0～20%)<br>②4～6回(出席率21～40%)<br>③7～9回(出席率41～60%)<br>④10～12回(出席率61～80%)<br>⑤13～15回(出席率81～100%) |
| 2   | 学習意欲                | この授業の予習や復習、配信されている動画の見直し、レポート制作等に積極的に取り組んだか回答下さい。                                                                        | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 3   | シラバス                | シラバス及び当初教員から示された授業計画は、実際の授業内容と大きな相違点はなく、必要な情報が記載してありましたか？                                                                | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 4   | 学習目的                | 授業は、各回の目的が明確で、どのようなことを学習しているのか、いま学習していることが何の役に立つか分かりやすかったですか？                                                            | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 5   | 学生の参加促進             | 担当教員は、学生との対話(授業中に質疑の時間を設ける、課題作業中に助言する等)に積極的で、授業への参加を促していましたか？                                                            | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 6   | 教材(教科書等)            | 教科書、配布資料(レジュメ)、黒板(スライド)、プログラムのソースコードなど、担当教員が準備した教材は、授業内容の理解に役立ちましたか？                                                     | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 7   | 教員の熱意               | 担当教員の指導に熱意はありましたか？                                                                                                       | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 8   | 教員解説力・指導力(話し方、質疑応答) | 担当教員の解説や指導は分かりやすかったですか？                                                                                                  | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 9   | 有用性                 | 学習した知識やスキルは、あなたの実務や将来の仕事に役に立つと思いましたか？                                                                                    | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 10  | 満足度                 | 学習できた内容に満足しましたか？                                                                                                         | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |

|    |                    |                                                                                                                                                                                                 |                                                                                                  |
|----|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 11 | 継続学習性(興味・関心)       | この授業を受講したことで、この授業に関する内容に興味と関心を持ち、更に学習したいと思いましたか？                                                                                                                                                | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                      |
| 12 | 参加について<br>／遠隔授業    | この授業は全回遠隔で参加しましたか？                                                                                                                                                                              | ①全回、対面で参加した<br>②一部遠隔、一部対面で参加した<br>③全回、遠隔で参加した                                                    |
| 13 | 適性<br>／遠隔授業        | この授業は遠隔授業に適していると考えますか？                                                                                                                                                                          | ①全く適していない<br>②あまり適していない<br>③どちらとも言えない<br>④適している<br>⑤大いに適している                                     |
| 14 | 学習効果<br>／遠隔授業      | この授業を遠隔で実施したことで学習効果は上がったと思いますか？<br><br>※本授業が一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施した授業については回答は不要。                                                                                                            | ①非常に下がった<br>②下がった<br>③あまり変わらない<br>④上がった<br>⑤非常に上がった                                              |
| 15 | コミュニケーション<br>／遠隔授業 | この授業において、教員や学生間とのコミュニケーションは十分でしたか？<br><br>※本授業が一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施した授業については回答は不要。<br><br>※ここでいう「コミュニケーション」とは、質疑応答や議論など、いずれかが含まれていることを指し、その手段はオンライン対話、manaba掲示板でのメッセージのやりとり(数日の遅延を含める)を含む。 | ①非常に不十分だった<br>②不十分だった<br>③どちらとも言えない<br>④十分だった<br>⑤非常に十分だった                                       |
| 16 | モチベーション<br>／動画配信   | 授業に対するモチベーションは対面授業形式(Meet/Zoom/一部は直接参加)に加え、動画配信のみの授業回があったことによって、途中で変化しましたか？(もしくは、動画配信のみの回を設けた場合、途中で変化すると思いますか？)                                                                                 | ①低下したと思う(もしくは、低下すると思う)<br>②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う)<br>③向上したと思う(もしくは、向上すると思う)             |
| 17 | 通学の負担<br>／動画配信     | もし通学があった場合、通学に関する負担は、対面授業形式(Meet/Zoom/一部は直接参加)に加え、動画配信のみの授業回があったことによって、軽くなりましたか？(もしくは、動画配信のみの回を設けた場合、軽くなると思いますか？)                                                                               | ①重くなったと思う(もしくは、重くなると思う)<br>②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う)<br>③軽くなったと思う(もしくは、軽くなると思う)           |
| 18 | 学習上の負担<br>／動画配信    | 学習に取り組む上での負担は対面授業形式(Meet/Zoom/一部は直接参加)に加え、動画配信のみの授業回があったことによって、軽くなりましたか？(もしくは、動画配信のみの回を設けた場合、軽くなると思いますか？)                                                                                       | ①重くなったと思う(もしくは、重くなると思う)<br>②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う)<br>③軽くなったと思う(もしくは、軽くなると思う)           |
| 19 | 理解度<br>／動画配信       | この授業の内容に対する理解は対面授業形式(Meet/Zoom/一部は直接参加)に加え、動画配信のみの授業回があったことによって、深まりましたか？(もしくは、動画配信のみの回を設けた場合、この授業の内容に対する理解が深まると思いますか？)                                                                          | ①理解が浅くなったと思う(もしくは、理解が浅くなると思う)<br>②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う)<br>③理解が深まったと思う(もしくは、理解が深まると思う) |

|    |               |                                                                                             |                                                                                                                                             |
|----|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 20 | 授業頻度<br>／動画配信 | この授業に動画配信のみの回を設ける数として、適切だと思う回数(割合)を教えてください。                                                 | ①0回(この授業は、すべて対面授業形式(遠隔授業を含む)で実施した方がよい)<br>②4回程度(全授業回数の25%程度)<br>③8回程度(全授業回数の50%程度)<br>④12回程度(全授業回数の75%程度)<br>⑤15回(この授業は、すべて動画配信形式で実施した方がよい) |
| 21 |               | 良かった点や、他の授業にも取り入れて欲しい点等について記述して下さい。                                                         | 自由記述                                                                                                                                        |
| 22 |               | 悪かった点や、改善した方がよい点等について記述して下さい。                                                               | 自由記述                                                                                                                                        |
| 23 |               | 授業をより良くするための提案や、授業内容に対する意見、担当教員に伝えたいメッセージ等を記述して下さい。                                         | 自由記述                                                                                                                                        |
| 24 |               | 新型コロナウイルス感染防止対策として遠隔会議ツール(Google Meet、Zoom等)を用いた授業形式や教室での参加が条件付になったことになったことについての意見を記述して下さい。 | 自由記述                                                                                                                                        |
| 25 |               | 13-16の遠隔授業に関する質問以外で、気付いたこと、感じた点等について記述して下さい。                                                | 自由記述                                                                                                                                        |

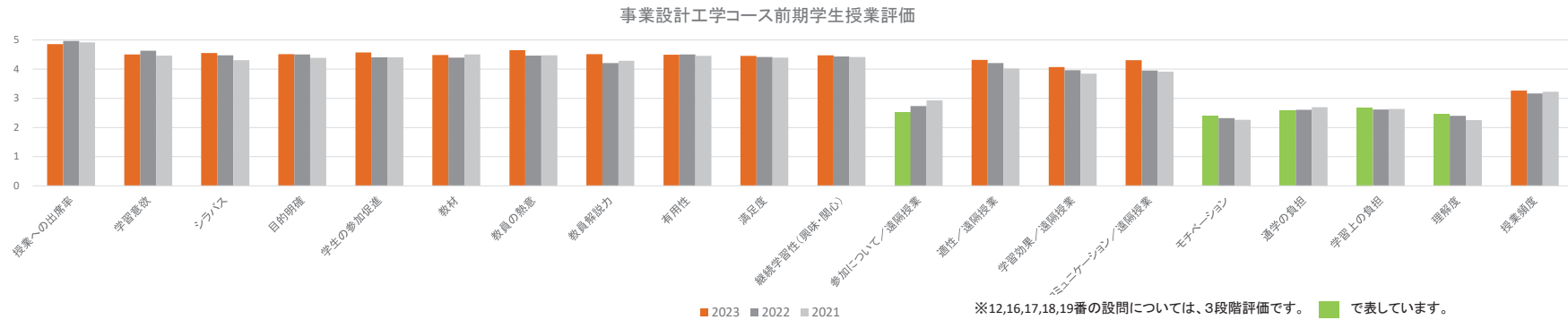
## 分析グラフ

以下のグラフと表は、34ページから36ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。  
※ 設問12,16,17,18,19は、3段階評価で実施

### 【事業設計工学コース(後期)】

#### 後期学生授業評価平均値

| 設問   | 1       | 2    | 3    | 4    | 5       | 6    | 7     | 8     | 9    | 10   | 11           | 12          | 13      | 14        | 15             | 16      | 17    | 18     | 19   | 20   |
|------|---------|------|------|------|---------|------|-------|-------|------|------|--------------|-------------|---------|-----------|----------------|---------|-------|--------|------|------|
|      | 授業への出席率 | 学習意欲 | シラバス | 目的明確 | 学生の参加促進 | 教材   | 教員の熱意 | 教員解説力 | 有用性  | 満足度  | 継続学習性(興味・関心) | 参加について／遠隔授業 | 適性／遠隔授業 | 学習効果／遠隔授業 | コミュニケーション／遠隔授業 | モチベーション | 通学の負担 | 学習上の負担 | 理解度  | 授業頻度 |
| 2023 | 4.85    | 4.50 | 4.55 | 4.52 | 4.57    | 4.48 | 4.65  | 4.51  | 4.50 | 4.45 | 4.48         | 2.52        | 4.32    | 4.07      | 4.30           | 2.40    | 2.58  | 2.69   | 2.45 | 3.26 |
| 2022 | 4.97    | 4.64 | 4.47 | 4.50 | 4.41    | 4.40 | 4.47  | 4.20  | 4.50 | 4.42 | 4.43         | 2.74        | 4.21    | 3.97      | 3.95           | 2.32    | 2.60  | 2.62   | 2.40 | 3.17 |
| 2021 | 4.91    | 4.46 | 4.30 | 4.38 | 4.40    | 4.50 | 4.47  | 4.28  | 4.45 | 4.39 | 4.41         | 2.93        | 4.02    | 3.84      | 3.91           | 2.26    | 2.70  | 2.64   | 2.25 | 3.23 |



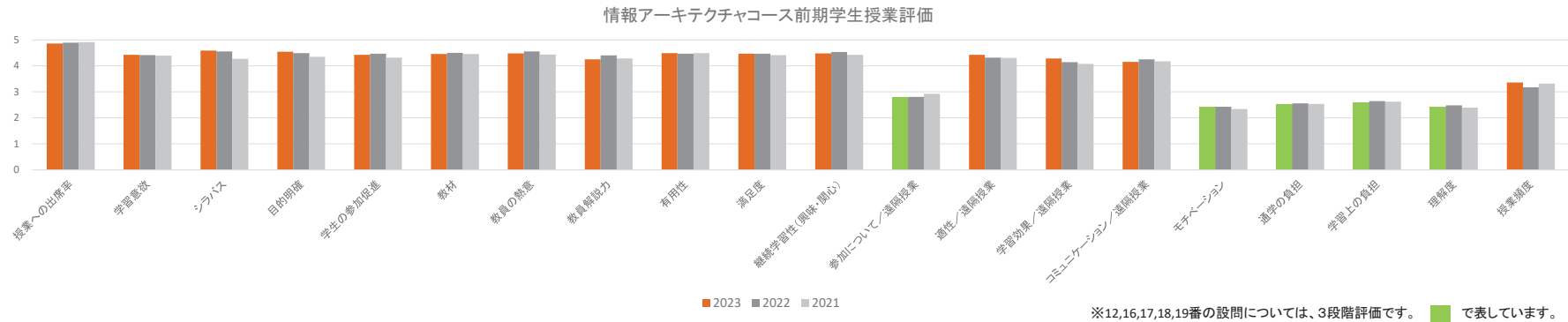
## 分析グラフ

以下のグラフと表は、34ページから 36ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。  
※ 設問12,16,17,18,19は、3段階評価で実施

### 【情報アーキテクチャコース(後期)】

#### 後期学生授業評価平均値

| 設問   | 1       | 2    | 3    | 4    | 5       | 6    | 7     | 8     | 9    | 10   | 11           | 12          | 13      | 14        | 15             | 16      | 17    | 18     | 19   | 20   |
|------|---------|------|------|------|---------|------|-------|-------|------|------|--------------|-------------|---------|-----------|----------------|---------|-------|--------|------|------|
|      | 授業への出席率 | 学習意欲 | シラバス | 目的明確 | 学生の参加促進 | 教材   | 教員の熱意 | 教員解説力 | 有用性  | 満足度  | 継続学習性(興味・関心) | 参加について／遠隔授業 | 適性／遠隔授業 | 学習効果／遠隔授業 | コミュニケーション／遠隔授業 | モチベーション | 通学の負担 | 学習上の負担 | 理解度  | 授業頻度 |
| 2023 | 4.86    | 4.43 | 4.59 | 4.55 | 4.43    | 4.47 | 4.48  | 4.26  | 4.49 | 4.48 | 4.49         | 2.80        | 4.43    | 4.29      | 4.16           | 2.43    | 2.52  | 2.60   | 2.42 | 3.37 |
| 2022 | 4.89    | 4.42 | 4.56 | 4.50 | 4.48    | 4.50 | 4.55  | 4.41  | 4.47 | 4.47 | 4.53         | 2.81        | 4.32    | 4.14      | 4.26           | 2.43    | 2.56  | 2.65   | 2.48 | 3.18 |
| 2021 | 4.92    | 4.40 | 4.28 | 4.35 | 4.31    | 4.46 | 4.44  | 4.28  | 4.50 | 4.41 | 4.43         | 2.92        | 4.31    | 4.08      | 4.17           | 2.34    | 2.54  | 2.63   | 2.40 | 3.31 |



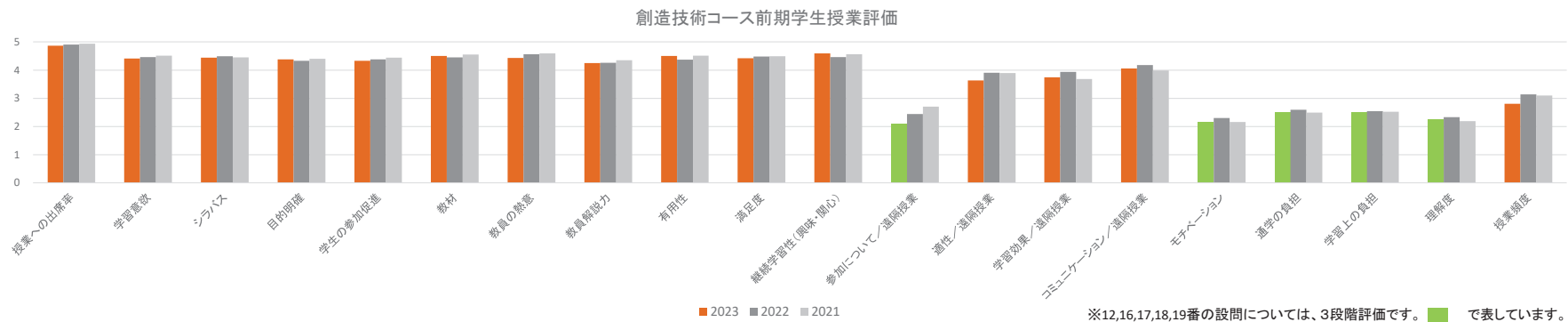
## 分析グラフ

以下のグラフと表は、34ページから36ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。  
※ 設問12,16,17,18,19は、3段階評価で実施

### 【創造技術コース(後期)】

#### 後期学生授業評価平均値

| 設問   | 1       | 2    | 3    | 4    | 5       | 6    | 7     | 8     | 9    | 10   | 11           | 12          | 13      | 14        | 15             | 16      | 17    | 18     | 19   | 20   |
|------|---------|------|------|------|---------|------|-------|-------|------|------|--------------|-------------|---------|-----------|----------------|---------|-------|--------|------|------|
|      | 授業への出席率 | 学習意欲 | シラバス | 目的明確 | 学生の参加促進 | 教材   | 教員の熱意 | 教員解説力 | 有用性  | 満足度  | 継続学習性(興味・関心) | 参加について／遠隔授業 | 適性／遠隔授業 | 学習効果／遠隔授業 | コミュニケーション／遠隔授業 | モチベーション | 通学の負担 | 学習上の負担 | 理解度  | 授業頻度 |
| 2023 | 4.86    | 4.41 | 4.44 | 4.38 | 4.33    | 4.50 | 4.43  | 4.25  | 4.50 | 4.42 | 4.59         | 2.09        | 3.64    | 3.74      | 4.06           | 2.18    | 2.50  | 2.50   | 2.25 | 2.80 |
| 2022 | 4.91    | 4.46 | 4.49 | 4.33 | 4.38    | 4.45 | 4.56  | 4.26  | 4.37 | 4.48 | 4.46         | 2.44        | 3.91    | 3.93      | 4.18           | 2.30    | 2.59  | 2.54   | 2.33 | 3.13 |
| 2021 | 4.93    | 4.51 | 4.45 | 4.40 | 4.44    | 4.55 | 4.59  | 4.35  | 4.51 | 4.49 | 4.56         | 2.71        | 3.89    | 3.68      | 3.99           | 2.16    | 2.49  | 2.52   | 2.18 | 3.10 |



## 授業評価アンケート質問項目(PBL型科目)

| NO. | 項目              | 設問                                                                                      | 回答                                                           |
|-----|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| 1   | 出席時間数(出席率)      | 1週間あたりのコアタイムに参加した時間について回答ください。                                                          | ①2時間以下<br>②2～3時間以下<br>③3～4時間以下<br>④4～5時間以下<br>⑤5時間以上         |
| 2   | 学習時間            | 1週間あたりのコアタイム以外での学習時間について回答ください。                                                         | ①2時間以下<br>②2～3時間以下<br>③3～4時間以下<br>④4～5時間以下<br>⑤5時間以上         |
| 3   | 参加意欲            | チーム活動が活発になるよう取り組みましたか？                                                                  | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う  |
| 4   | プロジェクト説明書       | プロジェクトの選択に当たってPBLプロジェクト説明書は役立ちましたか？                                                     | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う  |
| 5   | 教員の熱意           | 担当教員の指導に熱意はありましたか？                                                                      | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う  |
| 6   | 参加について<br>／遠隔授業 | このPBLは全回遠隔で参加しましたか？                                                                     | ①全回、対面で参加した<br>②一部遠隔、一部対面で参加した<br>③全回、遠隔で参加した                |
| 7   | 適性<br>／遠隔授業     | このPBLは遠隔授業に適していると考えますか？                                                                 | ①全く適していない<br>②あまり適していない<br>③どちらとも言えない<br>④適している<br>⑤大いに適している |
| 8   | 学習効果<br>／遠隔授業   | このPBLを遠隔で実施したことで学習効果は上がったと思いますか？<br><br>※本PBLが一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施したPBLについては回答は不要。 | ①非常に下がった<br>②下がった<br>③あまり変わらない<br>④上がった<br>⑤非常に上がった          |

|    |                    |                                                                                                                                                                                                    |                                                                        |
|----|--------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| 9  | コミュニケーション<br>／遠隔授業 | <p>このPBLにおいて、教員や学生間とのコミュニケーションは十分でしたか？</p> <p>※本PBLが一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施したPBLについては回答は不要。</p> <p>※コミュニケーションとは、質疑応答や議論など、いずれかが含まれていることを指し、その手段はオンライン対話、manaba掲示板でのメッセージのやりとり(数日の遅延を含める)を含む。</p> | <p>①非常に不十分だった<br/>②不十分だった<br/>③どちらとも言えない<br/>④十分だった<br/>⑤非常に十分だった</p>  |
| 10 | 有用性                | このPBLで学習した知識やスキルは、あなたの実務や将来の仕事に役に立つと思いましたか？                                                                                                                                                        | <p>①全くそう思わない<br/>②あまりそう思わない<br/>③どちらとも言えない<br/>④ややそう思う<br/>⑤強くそう思う</p> |
| 11 | 満足度                | このPBLを通じて学習できた内容に満足しましたか？                                                                                                                                                                          | <p>①全くそう思わない<br/>②あまりそう思わない<br/>③どちらとも言えない<br/>④ややそう思う<br/>⑤強くそう思う</p> |
| 12 | 継続学習性(興味・関心)       | このPBLを受講したことで、この授業に関する内容に興味と関心を持ち、更に学習したいと思いましたか？                                                                                                                                                  | <p>①全くそう思わない<br/>②あまりそう思わない<br/>③どちらとも言えない<br/>④ややそう思う<br/>⑤強くそう思う</p> |
| 13 |                    | 良かった点や、他の授業にも取り入れて欲しい点等について記述して下さい。                                                                                                                                                                | 自由記述                                                                   |
| 14 |                    | 悪かった点や、改善した方がよい点等について記述して下さい。                                                                                                                                                                      | 自由記述                                                                   |
| 15 |                    | PBLをより良くするための提案や、授業内容に対する意見、担当教員に伝えたいメッセージ等を記述して下さい。                                                                                                                                               | 自由記述                                                                   |
| 16 |                    | 上記のほか、新型コロナウイルス感染防止対策として遠隔会議ツール(Google Meet、Zoom等)を用いた形式になったことについての意見を記述して下さい。                                                                                                                     | 自由記述                                                                   |
| 17 |                    | 上記6-9の遠隔におけるPBLに関する質問以外で、気付いたこと、感じた点等について記述して下さい。                                                                                                                                                  | 自由記述                                                                   |

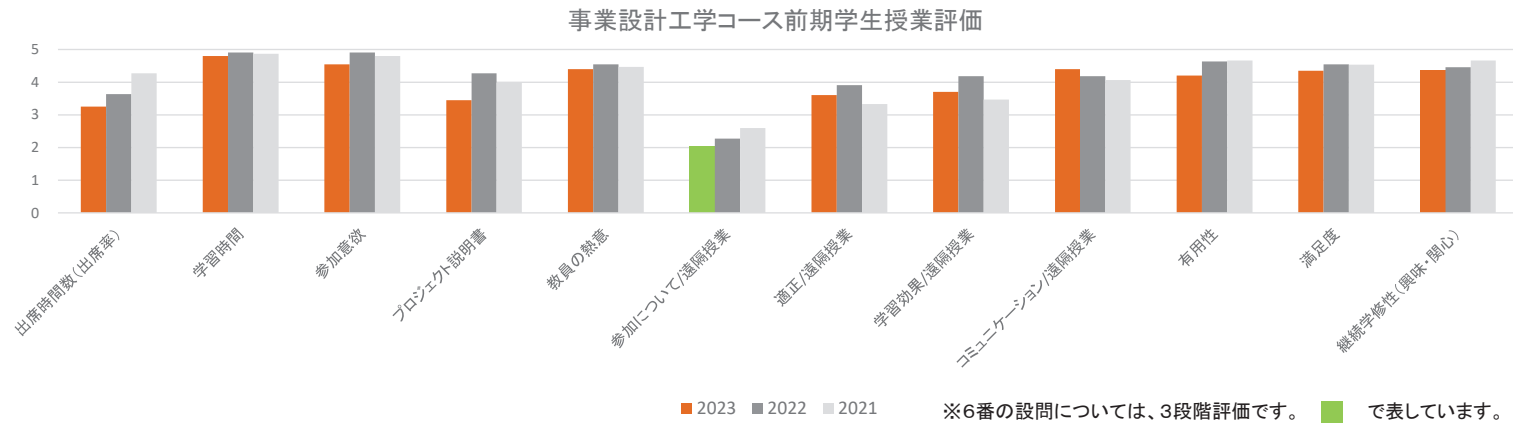
## 分析グラフ

以下のグラフと表は、40ページから41ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。  
※ 設問6は、3段階評価で実施

### 【事業設計工学コース(事業設計工学特別演習2)】

#### 学生授業評価平均値

| 設問   | 1              | 2    | 3    | 4             | 5     | 6               | 7       | 8             | 9                  | 10   | 11   | 12               |
|------|----------------|------|------|---------------|-------|-----------------|---------|---------------|--------------------|------|------|------------------|
|      | 出席時間数<br>(出席率) | 学習時間 | 参加意欲 | プロジェクト<br>説明書 | 教員の熱意 | 参加について<br>/遠隔授業 | 適正/遠隔授業 | 学習効果/遠<br>隔授業 | コミュニケー<br>ション/遠隔授業 | 有用性  | 満足度  | 継続学修性<br>(興味・関心) |
| 2023 | 3.25           | 4.80 | 4.55 | 3.45          | 4.40  | 2.05            | 3.60    | 3.70          | 4.40               | 4.20 | 4.35 | 4.35             |
| 2022 | 3.64           | 4.91 | 4.91 | 4.27          | 4.55  | 2.27            | 3.91    | 4.18          | 4.18               | 4.64 | 4.55 | 4.45             |
| 2021 | 4.27           | 4.87 | 4.80 | 4.00          | 4.47  | 2.60            | 3.33    | 3.47          | 4.07               | 4.67 | 4.53 | 4.67             |



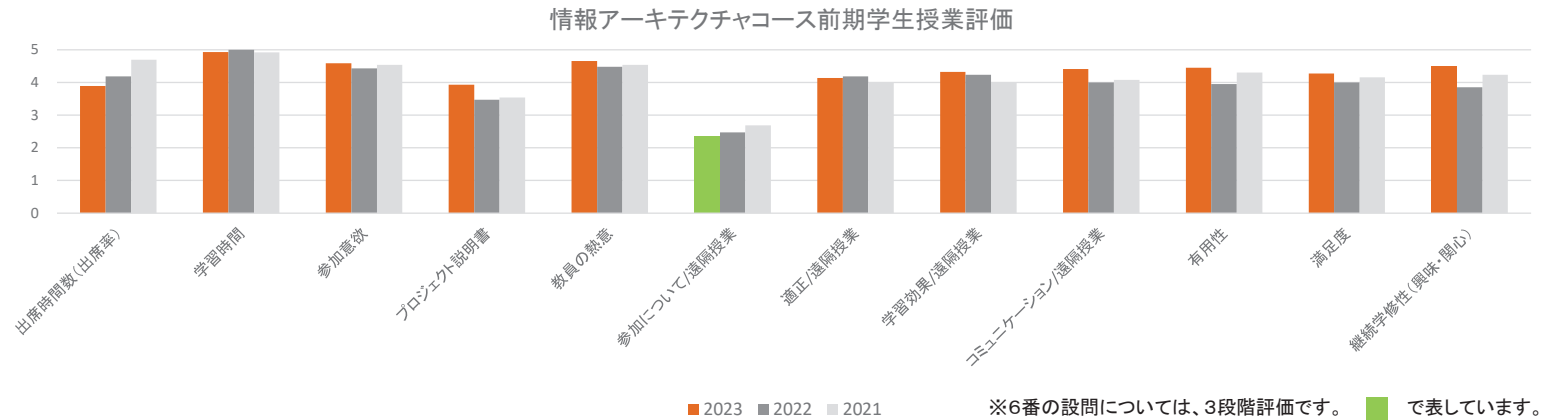
## 分析グラフ

以下のグラフと表は、40ページから41ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。  
※ 設問6は、3段階評価で実施

### 【情報アーキテクチャ技術コース(情報システム学特別演習2)】

#### 学生授業評価平均値

| 設問   | 1              | 2    | 3    | 4         | 5     | 6               | 7       | 8             | 9                      | 10   | 11   | 12               |
|------|----------------|------|------|-----------|-------|-----------------|---------|---------------|------------------------|------|------|------------------|
|      | 出席時間数<br>(出席率) | 学習時間 | 参加意欲 | プロジェクト説明書 | 教員の熱意 | 参加について<br>/遠隔授業 | 適正/遠隔授業 | 学習効果/遠<br>隔授業 | コミュニケー<br>ション/遠隔授<br>業 | 有用性  | 満足度  | 継続学修性<br>(興味・関心) |
| 2023 | 3.90           | 4.93 | 4.59 | 3.93      | 4.66  | 2.34            | 4.14    | 4.32          | 4.41                   | 4.45 | 4.28 | 4.48             |
| 2022 | 4.19           | 5.00 | 4.43 | 3.48      | 4.48  | 2.48            | 4.19    | 4.24          | 4.00                   | 3.95 | 4.00 | 3.86             |
| 2021 | 4.69           | 4.92 | 4.54 | 3.54      | 4.54  | 2.69            | 4.00    | 4.00          | 4.08                   | 4.31 | 4.15 | 4.23             |



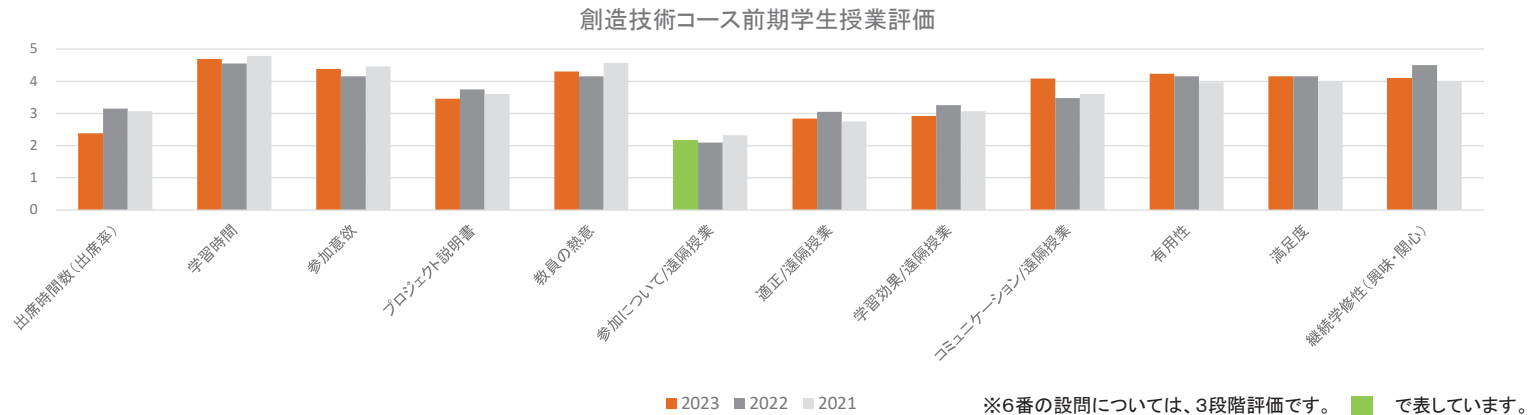
## 分析グラフ

以下のグラフと表は、40ページから41ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。  
※ 設問6は、3段階評価で実施

### 【創造技術コース(イノベーションデザイン特別演習2)】

#### 学生授業評価平均値

| 設問   | 1              | 2    | 3    | 4         | 5     | 6               | 7       | 8             | 9                  | 10   | 11   | 12               |
|------|----------------|------|------|-----------|-------|-----------------|---------|---------------|--------------------|------|------|------------------|
|      | 出席時間数<br>(出席率) | 学習時間 | 参加意欲 | プロジェクト説明書 | 教員の熱意 | 参加について<br>/遠隔授業 | 適正/遠隔授業 | 学習効果/遠<br>隔授業 | コミュニケー<br>ション/遠隔授業 | 有用性  | 満足度  | 継続学修性<br>(興味・関心) |
| 2023 | 2.38           | 4.69 | 4.38 | 3.46      | 4.31  | 2.15            | 2.85    | 2.92          | 4.08               | 4.23 | 4.15 | 4.08             |
| 2022 | 3.15           | 4.55 | 4.15 | 3.75      | 4.15  | 2.10            | 3.05    | 3.26          | 3.47               | 4.15 | 4.15 | 4.50             |
| 2021 | 3.07           | 4.79 | 4.46 | 3.61      | 4.57  | 2.32            | 2.75    | 3.07          | 3.61               | 3.96 | 4.00 | 4.00             |



## ■ 第3クォータ アクションプラン ■

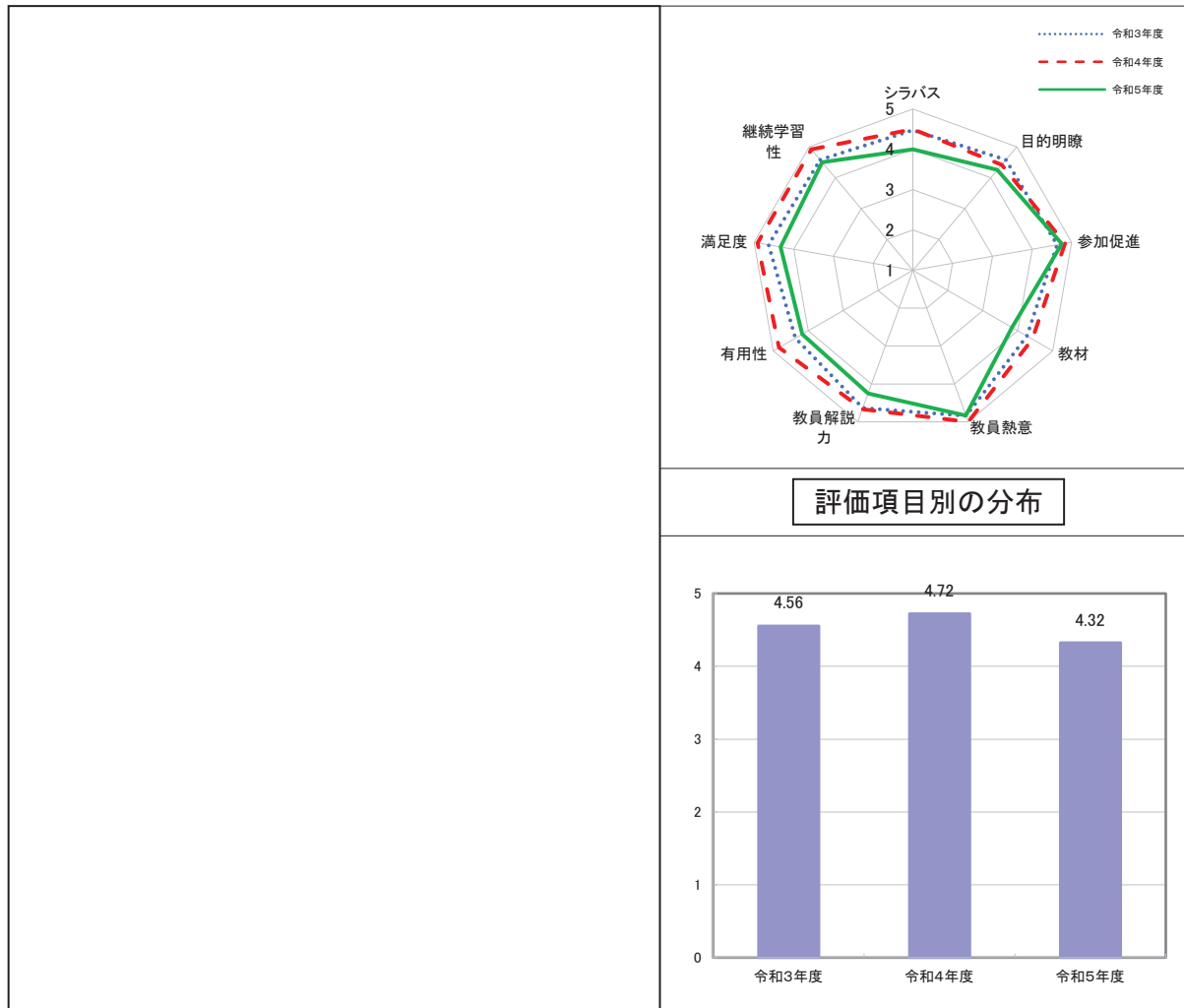
### 1 各コース共通科目

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 国際開発特論

氏名： 前田 充浩

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）



### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： テクニカル・ライティング特論

氏名： 嶋津 恵子

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

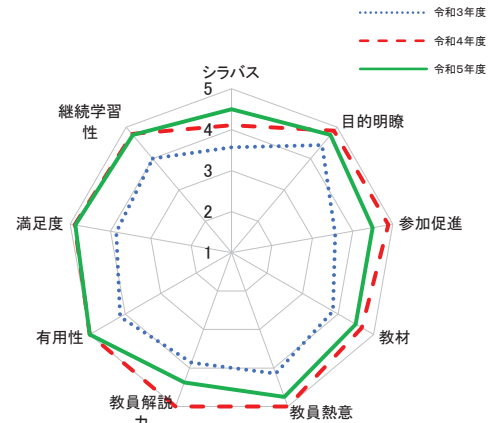
昨年度同様に、毎週ライティングの実習（テクニカルライティングにのっとったレポート作成）を義務付け無記名状態で公開し、すべての提出物に公表を公開でおこなった。これは自身の提出物だけでなく、他の履修生の提出物とそれに対する指導内容を参照することで、より学修効果が高まると考えたためであった。そしてこの方式に対し昨年度のアンケートで高評価を得ていたことが今年度継続の理由である。

昨年度のアンケートの自由記入欄を参照し、次の2つの改善を行った。

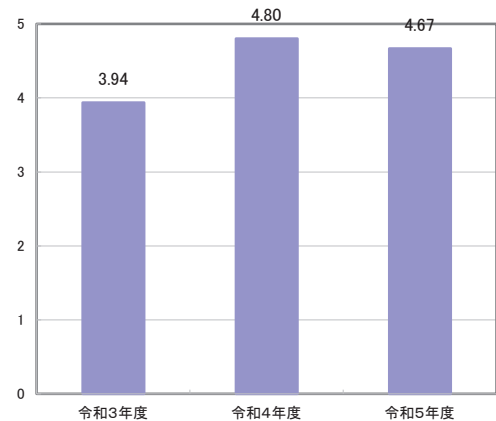
① 科書の どの部分を どのように 使って 学修をすすめるのかより詳細の説明を行う

② 提出物の無記名による公開指導に関し、提出イベントごとに、履修性の希望を確認する

これらが効を奏したことは、今年度のアンケートにネガティブな意見がないことから判断できる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

授業に対する無記名のアンケートを取ると、期待する評価を得られなかった履修生から仕返しのコメントが入る状況を何度か目にしてきた。

一方、本授業に対するコメントには「高得点を取ることは最後までできませんでしたが受講して本当によかったと思います。」というものなどがあり、高い評価を得たかどうかと、授業が価値のあるものであったかどうかを区別してコメントしている。

本来大学院の講義はかくあるべきだと考える。

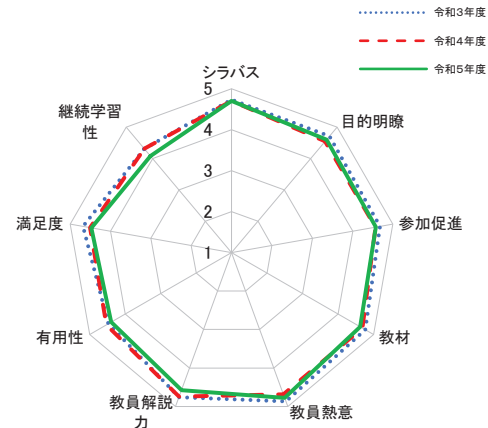
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報技術者倫理

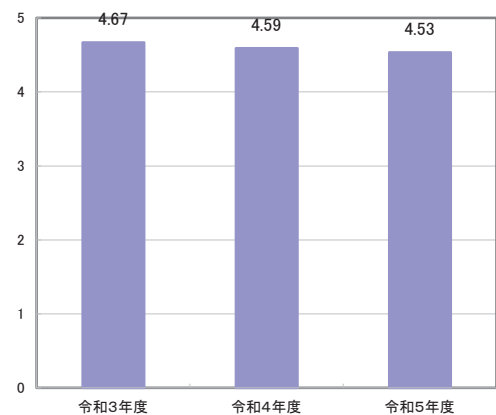
氏名： 稲垣 実

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

倫理という「絶対的な正解」が無い科目であるため、ビデオ回においては情報技術者として対面するであろう問題点について多角的に取り上げ、ハイフレックスの対面回においては学生同士のディスカッションで構成することで、情報技術者倫理の観点は、自分の観点と他者の観点到に相違があることを発見できた学生が多く、形態に関しては継続させることが良いと判断できる。また、対面回は徹底してグループディスカッションの時間に割り当て、同期の学生間のコミュニケーション機会として好評であった。手法としても、ビデオ回と対面回の割合、課題内容のフィードバックの適切さ、資料の構成、成績の評価基準についても、学生からの理解が得られていると判断できた。また、ディスカッションについてはグループの全員に役割が分担されるように配慮し、このことがとても公平で授業に出席するモチベーションが高まったという学生がほとんどである中、役割が与えられるのが辛いという学生がみられることは、今後の授業を展開する上で課題と思う。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

選択必須科目であるため、出席して学ぶことより出席することが義務とを感じる学生も多く、その学生からの改善要求事項として「土曜日1限目」から「土曜日2限目、または3限目」に設定してほしい意見が圧倒的である。非常勤講師の立場では改善できないので、ぜひ大学にて前向きに検討いただきたい。また、受講者数が60名を超えているため、ハイフレックスによる対面回は「1限目」と「2限目または3限目」と分けることも検討頂けるとありがたいです。

## ■ 第3クォータ アクションプラン ■

### 2 事業設計工学コース科目

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： スタートアップ戦略特論

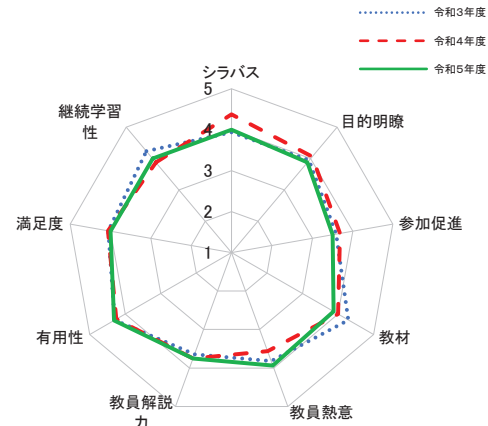
氏名： 板倉 宏昭

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

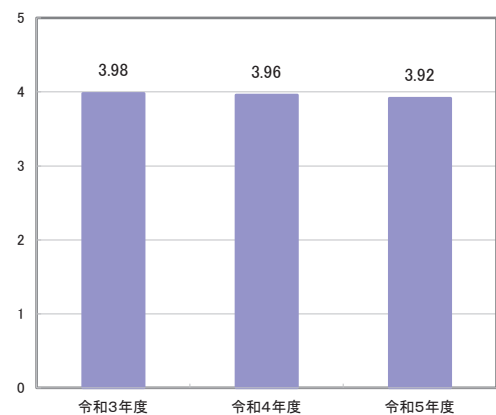
第一に、授業内容について評価されている。例えば、「スタートアップ現状、基本的な考え方が理解でき、よかった。」「先生の豊富な人脈のおかげで、貴重な話をたくさん聞かせていただけたことを特にありがとうございました。」といった評価である。

第二に、講義を通じた学修の後に、課題に取り組み、総括するという構成について評価されている。例えば、「講義を通して学修した知識を課題報告で使用し、総括することで、使い方やアプローチが学べた。」や「グループ演習と個人演習のバランスが取れていて、受講しやすかった。」

第三に、「全員にプレゼンをさせる点は良かったと思う」という指摘である。遠隔から多様な受講生が参加している点が評価されてるように、多様な学生間の討議から学ぶことが重要となっていると思われる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

授業内容や授業をきいて課題に取り組み、全員がスタートアップについて発表するという授業構成は、評価されているので、発展させていきたい。

「オンライン授業で音声が不安定になっていたこと(受講生側)」や「外部講師の場合は、録画が良いのではないか」といった意見もあった。収録とリアルタイムのバランスや割り当てを考えたい。また、受講生数の制限を求める意見や「受講生が多すぎると思います」といった指摘もあった。追加履修登録等でグループの人数が多くなってしまったので、グループの人数を少なくするなど改善を図りたい。

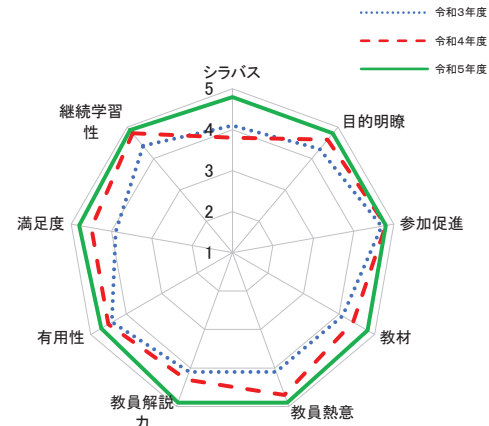
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 統計・数理計量ファイナンス特別演習

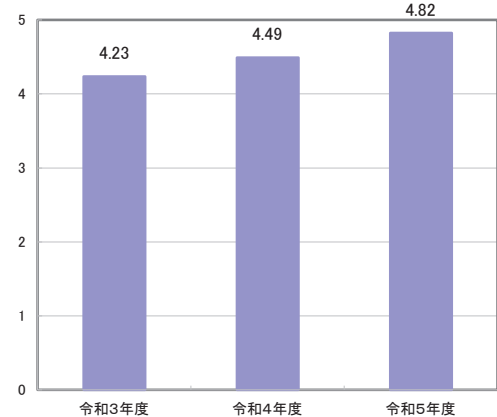
氏名： 三好 祐輔

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

- ・難易度が高く、動画を何回も見直すことで理解が深まった点。
- ・学生の自主性に任せて学生同士のコミュニケーションを取らせてくれる点。
- ・初見のソフトウェアは利用のハードルが高く感じるものだが本講義に関してはそれが一切なかった点。
- ・先生の授業中の丁寧な指導であった点。
- ・対面授業の進捗に応じて動画が作成されるため、進捗(動画のアップするタイミング)が一定でなく後半盛りだくさんの内容であった点。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・多くの受講生から好評価のコメントをいただいた。意欲的に統計学を学ぼうとする学生が受講してくれたことに本当に感謝したい。
- ・統計ソフトを使う講義でかつ、ハイブリッド環境での演習で多くの人が満足する講義を作るのは非常に難しい。多くの受講生の声に耳を傾けてゆきたいと考えている。
- ・社会人は、平日の授業を受けるのが難しいので、後日ビデオで学習して、レポートを出しても、成績評価も劣後しない仕組みが必要だという考えに沿った方向を今後考えてゆきたい。

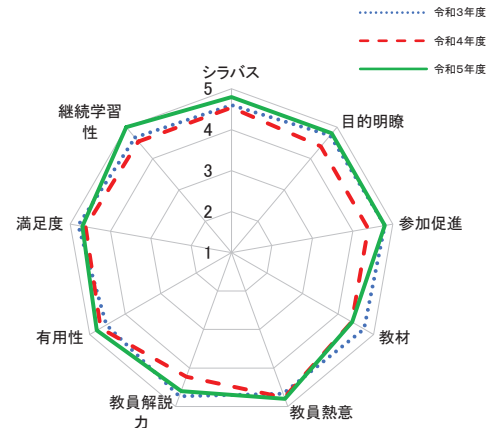
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 製品開発組織特論

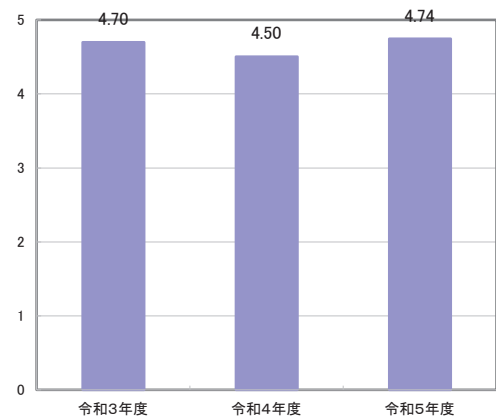
氏名： 吉田 敏

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

目的明確や学生の参加促進については、昨年度に比べ本年度は学生の評価が向上している。これらの点については、できるだけ学生の声に耳を傾けながら、継続的に高い評価を得るように努めていく。また、教材については、昨年度からの評価の向上がほとんど見られない。この授業の学術的特性から考えると、協力企業や共同研究者との関係性から、すべての教材スライドを配布することは難しい面がある。しかし、このような面から改善が必要であることも想定されるため、継続的に検討を加えていきたいと考えている。また、講師に問いかけ確認する時間に制限があるという点に満足できない感覚を持った学生がいたが、できるだけ自由に質問できるようにすることを心がけていきたいと考えている。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

教材に関しては、研究成果が大きな情報源となっているため、研究の促進を検討していくべきであると考えている。そのために、今年度中に、新しい研究を進めることを検討し、できるだけ来年度以降の授業へ、反映させていくことに努めるものである。また、個別の質問への対応として、授業時間には限界があるため、授業前後にも質問ができるように、メールなどを活用しながら、学生から見た質問の機会の充足を推進していきたいと考えている。

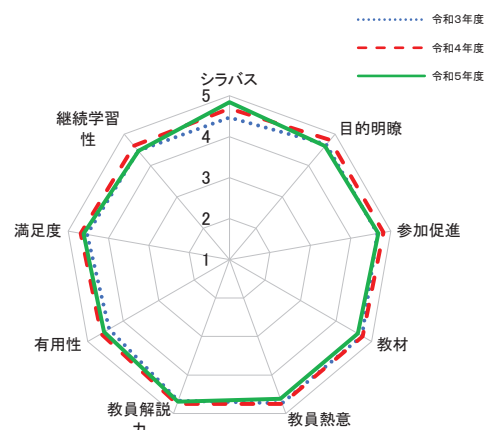
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： ネットワーク事業設計特論

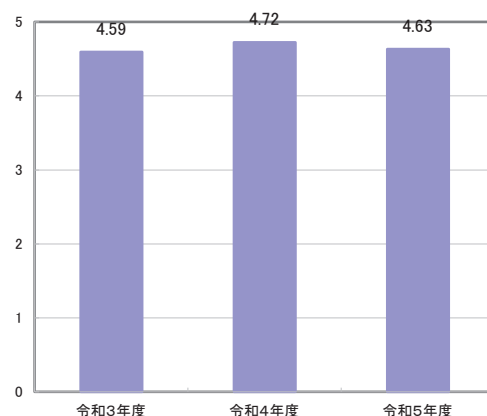
氏名： 細田 貴明

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

- ・全体として一定の評価を得ることができた。
- ・今年度も録画形式回と講義形式回の回数について、バランスが良いとの評価を受けた。
- ・今年度も受講生が講義後のコメントを残し、それにフィードバックを行う点について、振り返りができ良い取り組みであるという評価を受けた。
- ・演習時間が少し長いというコメントがあった。
- ・他受講生の課題の解答をフィードバックしてほしいというコメントがあった。
- ・演習時の他グループの内容を共有したいとのコメントがあった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・今年度も全体としては高い評価を受けることができたことから講義方針として継続することに問題がないと判断する。
- ・録画形式と講義形式のバランスについても、昨年度同様高い評価を受けることができたので今後も継続したい。
- ・今年度は課題のフィードバックを各自に行う取り組みを昨年度のコメントをうけて追加した。
- ・他受講生の課題は、演習前に公開することを前提として作成してもらい、全受講生で共有する形式で次年度は行いたい。

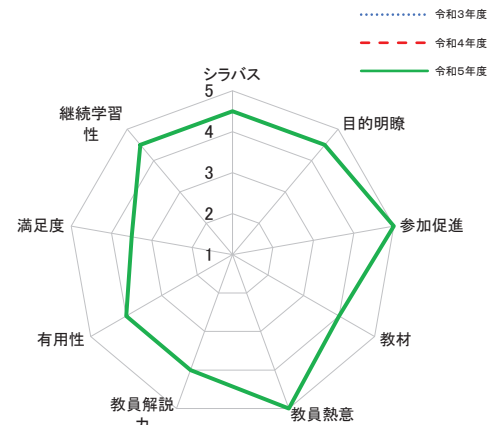
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 事業方向性設計演習

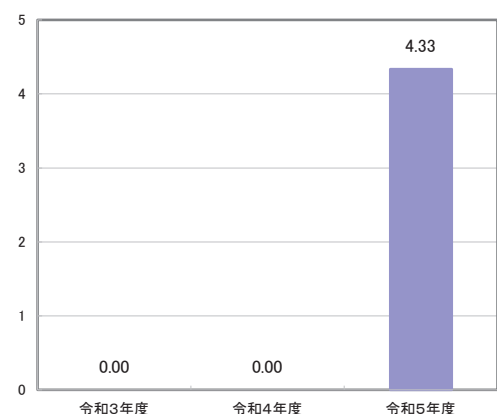
氏名： 植木 英雄

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

演習授業にもハイフレックスを併用を要望される件について、履修5回目以降の途中からの要請がり、大学事務担当課とも相談しましたところ途中からの使用については、大学所管委員会へお申請・承認手続き必要になりリスク等の責任負担を言明されました。そこで、今回はその併用を見送りましたところ、授業の後半以降に再度と外履修者1名より仕事の関係でGoogle Meetの使用の依頼が再度あり、最終レポートの発表をそれで行って頂いた経緯があります。初めての併用で最初設定に手間取りましたが、うまく繋げて発表と質疑討論を実施できました。次年度は最初からハイフレックスを併用をしたいと思います。但し、使用教室のPC機器がwindows対応でないため、次年度は第1Qの教室と同じ設備付きの教室割り当てを要請します。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

改善策としては、①ハイフレックスの当初からの併用、②演習履修の選択者は講義科目より少ないため課題テーマや演習レポート、討論などで個人別のシラバス対応を当初からします。（今回は授業3回目に履修者名簿が確定したため、それ以降の演習授業運営を小グループ別編から個人別学習に対応可能なシラバスの修正とmanaba 提示資料を変更しました。）

次年度からはシラバスを当初から修正して開示できれば、ハイフレックスの当初からの併用と合わせて、さらに多くの履修希望者の要望と期待に応えられると考えます。

演習の運営では、個別のニーズや学習レベルに対応して、適宜履修者が希望する複数の学習レベルを選んで学習できるように、共通資料と課題レベル別の資料を準備してmanabaに事前に提示できるように準備をします。（履修者の学習・実務経験度がかなり大きな差異があるため、演習の運営や資料の準備等でさらに工夫と改善をいたします。）

## ■ 第3クォータ アクションプラン ■

### 3 情報アーキテクチャコース科目

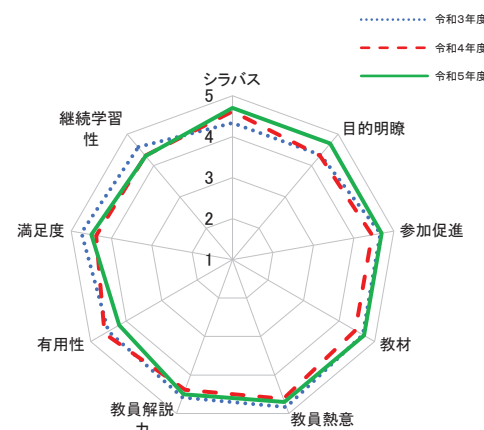
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： OSS特論

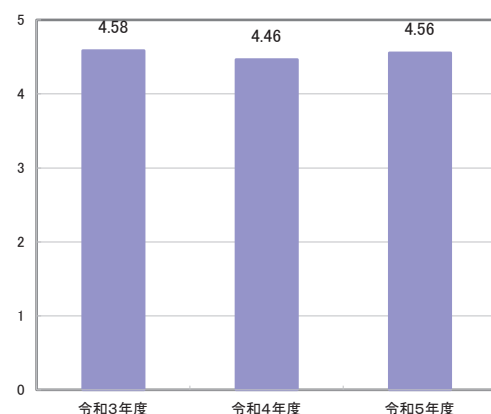
氏名： 小山 裕司

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

今年度も科目等履修生が多く、昨年同様の20名強の履修者数であった。昨年度は評価平均4.46、回収率61.9%であったが、今年度は評価平均4.56、回収率62.5%と若干上がった（昨年度若干下がっていたので、一昨年度程度に戻った）。個々の項目では、有用度が4.2、継続が4.3と低めであり、この2項目で2名の学生が評価3以下を付けている。逆に、シラバス、目的明確、学生参加、教材、教員熱意は4.7であり、すべての項目で評価5の学生が最も多かった。昨年度を振り返ると、目的明確、教員解説、満足、有用度、継続が低めで、シラバス、教員熱意、有用性の評価は4.6以上であった。2年連続では継続が低めで、シラバス、教員熱意が高めである。また、遠隔授業の取り組みも評価されていたように感じた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

学生からの評価及びコメントは概ね妥当だという評価だと理解している。科目等履修生が多めで、この関係で（すでに単位を取っているの）必然的に正規の履修者が減ってしまうことと、共同作業でのメンバ間での連絡の問題は気にかかっている。学生からのコメントを参考に長所は継続し、指摘いただいた短所は改善を試みたい。授業内容は年次で新しく更新する。また遠隔授業、共同作業等の仕組みの改善を継続する。

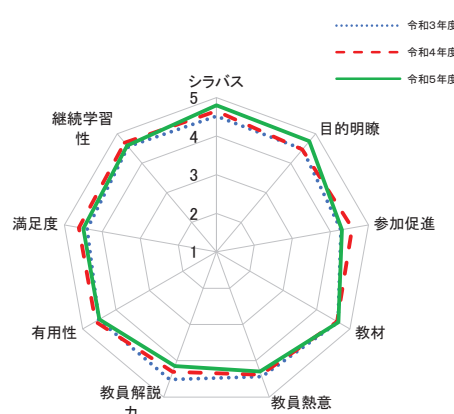
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： データ分析特論

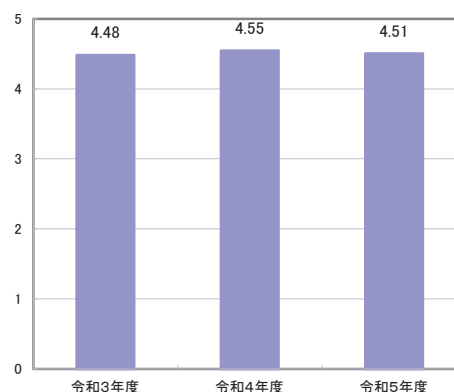
氏名： 追川 修一

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

評価の平均は4.51となり、前年度の4.55よりもやや下がった。各設問でも全般的に低下しているが、中でも設問Q6. 学生の参加促進が4.30, Q8. 教員解説力が4.15と低めである。評価の低下に伴い、学生からのコメントも、昨年度までと比べて、授業内容が分かりにくい、ソースコードを含めて資料が分かりにくい、説明が不足している、双方向性が不足している、議論する時間が無いなど、否定的な内容が増加した。単純にとらえると、授業のレベルの低さを問題にしているように考えられるが、コメントを丹念に追いかけていくと、理解が追いつかない、本講義の前段の知識を得るための講義が必要、といった履修者に前提知識が不足していることを理由として、授業内容や資料の理解が難しく、また説明も不足しているととらえられてしまっていることがうかがえる。このことは、説明や資料が分かりやすいので数理統計学の講義を担当して欲しい、という意見もあることからわかり、学生のレベルによって受け止め方が大きく異なっている。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

学生にレベル差があることは本学の特徴であるため、しっかりと受け止め、対応する必要がある。本講義だけで対応できることとしては、グループで演習を行い、学生間で教え合うことのできる時間を作ることで、前提知識の不足を補える可能性がある。ほとんどの学生は遠隔で受講しているため、単に議論するよりも難易度は高いが、検討する必要がある。また本学では、データ分析・データサイエンス系の講義群は3コースにわたり乱立している状況であり、各コースで同様の問題が生じていることが考えられるため、入門レベルから始めて、段階的に知識・スキルを取得できるように体系化する方向が最も良い方法である。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： クラウドインフラ構築特論

氏名： 山崎 泰宏

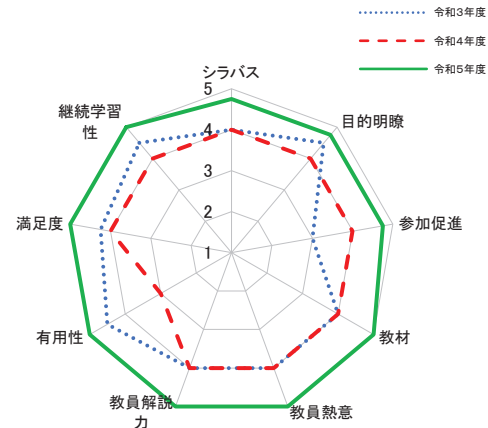
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

AIITの設備が変わっていたり、使い方がわからないところが多い。

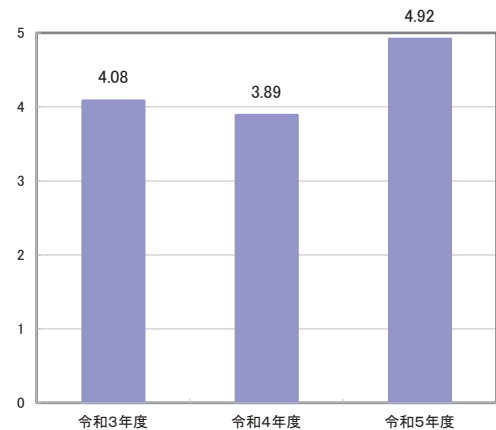
今年から遠隔(Zoom)と現地の両方を対応しなければならないのは限界を感じるので、来年はどちらか一方にしていきたい。

最初はうまくいかず、授業の半分を無駄にするなどあった。

この辺りは、授業設備のインストラクターが必要ではないか。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

演習を遠隔か現地かの一方に絞れば改善する。

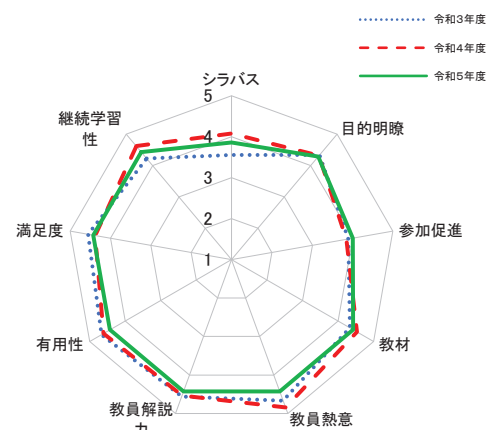
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報ビジネス特別講義1

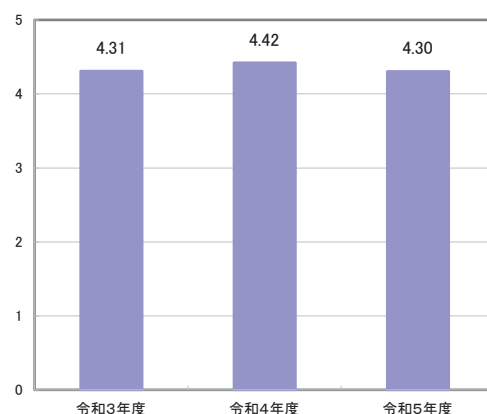
氏名： 六川 浩明

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

毎回の授業でタイムリーな最新の時事的トピックを取り上げていたこと、担当講師自らの経験に基づく経験や話題を取り上げたことは、受講生の皆さんから、評価して頂いている。世界における技術革新に伴い、法制度も次々と改正していきますので、来期も、同様に、これらの取り組みをしていきたいと思ひます。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

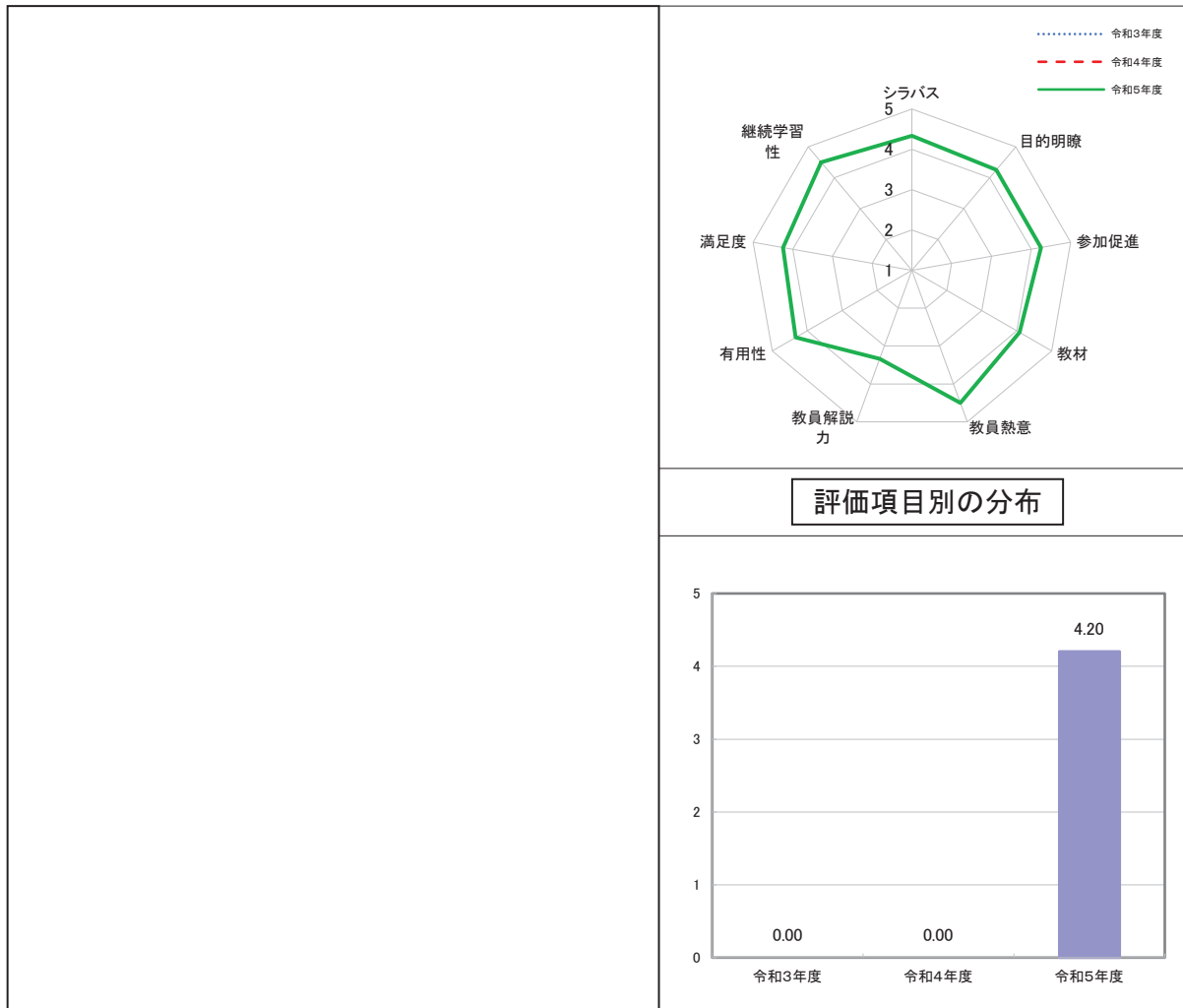
オンライン参加者との質疑応答がうまくいかないことがあったことや、受講生からの音声が教室にいる担当講師に通じないことが、時々、ありました。来期は、これらを、ぜひ、改善していきたいと思ひます。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： セキュアプログラミング特論

氏名： 黄 緒平

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）



### 評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

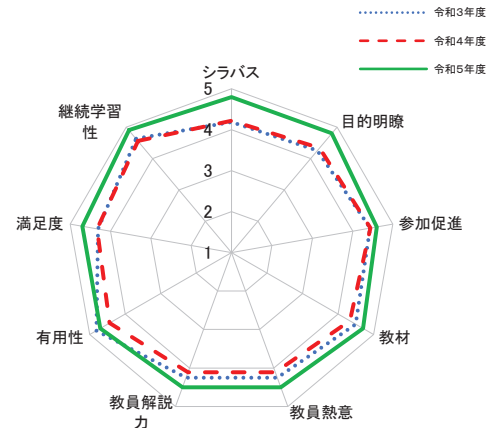
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： クラウドサーバ構築特論

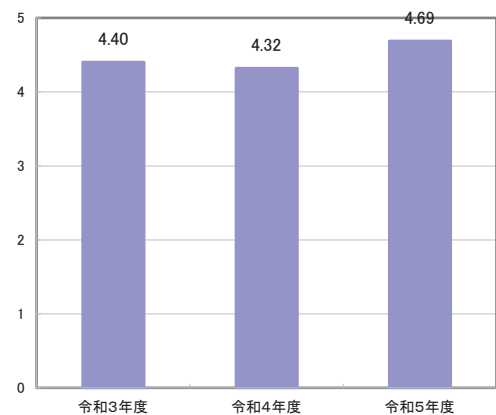
氏名： 飛田 博章

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

全ての項目で前年度を上回り合計も4.32から4.69となった。各項目で4.5以上の評価となり、「継続学習性」が4.9で「シラバス」と「目的明確」は4.8となった。授業内容で昨年度時間が掛かっていた部分を見直し効率化する工夫をしたことで、予定していた内容を全て扱うことができた点は何らかの評価に繋がったと考える。LambdaやAI系のサービスを扱った授業内容や、グループワークの実施に関して好意的なコメントが見られた。一方で、今後学び続けるための方法などをもう少し紹介して欲しいとのコメントも見られた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

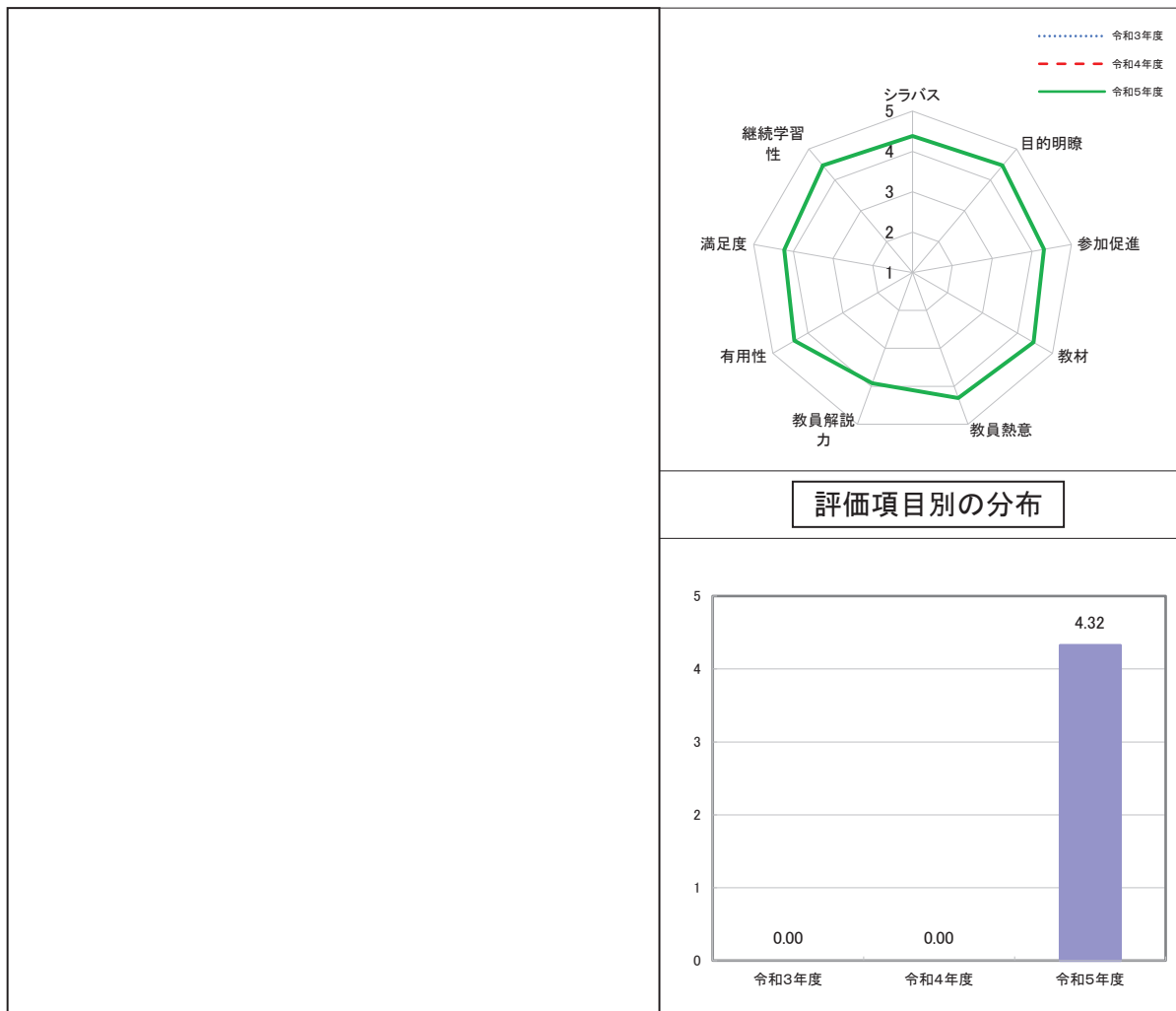
評価を維持できるように、引き続き内容を精査し改善を心がける。良い点は維持しながら、指摘のあった部分についてもできる範囲で対処したいと考えている。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： データベース特論

氏名： 安部 秀基

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）



### 評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

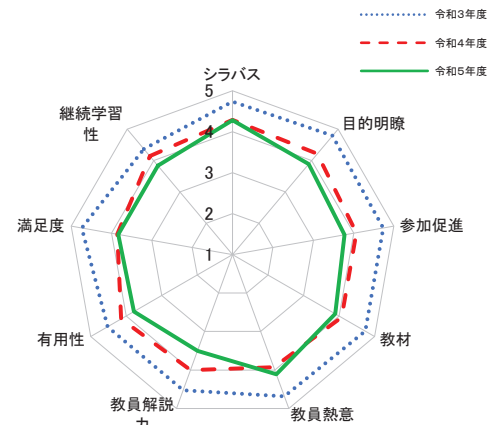
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： プロジェクトマネジメント特論2

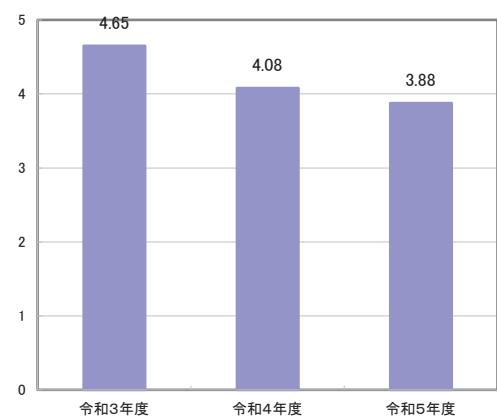
氏名： 上條 英樹

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

昨年評価項目で低かった「教員の熱意」が今年度は受答えや事例を交えた積極的な話し方で熱意が伝わったようでポイントが一番高い項目に改善されたがその他は全般的に昨年より低い結果となった。全体的に1ポイントと評価している生徒がいるのでアンケートの母数も少ないこともあり全体的に昨年より低いポイントとなっていると考えられる。第1回のガイダンス時に無記名で生徒さんの講義に関わる前提知識を確認しているが前提を満たさない生徒が多くいたのも生徒の期待を満たさない原因の一つと考えられる。また、実務に直ぐ役立つように内容の濃いものになっており学ぶボリュームが多いのと新しい用語が多いのでそれらに関する生徒さんからのコメントを頂いているので今後に向けての改善ポイントであると考ええる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

昨年から改善された「教員の熱意」で効果を上げたと思われる熱意を持った話し方は継続するとともに全体的にポイントを下げている講義の期待を満たしていない要因と考えられる前提知識不足については、ガイダンス時に講義受講の前提を強調し前提を満たさない場合は期待に沿えない旨は強調して伝えたうえで講義の受講判断をしてもらう期待値コントロールを実施するように改善したいと思います。また、講義内容量の課題には、内容を絞り込む方向で見直し一つ一つのテーマをより丁寧に解説する事とし用語解説についても用語解説の範囲を拡大するなどの改善を実施したいと思います。

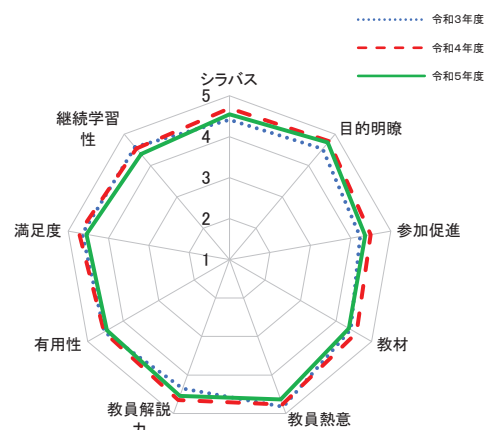
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報ビジネス特別講義2

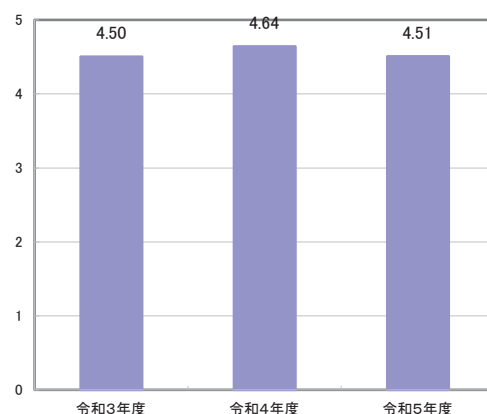
氏名： 小酒井 正和

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

昨年と同じ条件での授業方法による実施を前提とすると、教材、教員解説力、満足度が低くなっている点には注意を要すると考えられる。実際のところ、教材については昨年よりも充実させたつもりだったので、学習者層が学習したかった内容との齟齬があるか、あるいは解説が容易か、あるいは難しかったなどのこともあって理解を促進できなかった可能性がある。これについては改善したり、受講者の学習意向の再チェックが必要となると考えられる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

今回の授業評価アンケートでは、発展的に学習をするために参考文献等の提示が欲しいとのことでしたので、今後、資料のなかにそれを入れ込めるようにできればと考えております。

また、授業内容のポイントを少しずらして特定の単元内の内容充実を図る必要があると考えられる。

## ■ 第3クォータ アクションプラン ■

### 4 創造技術コース科目

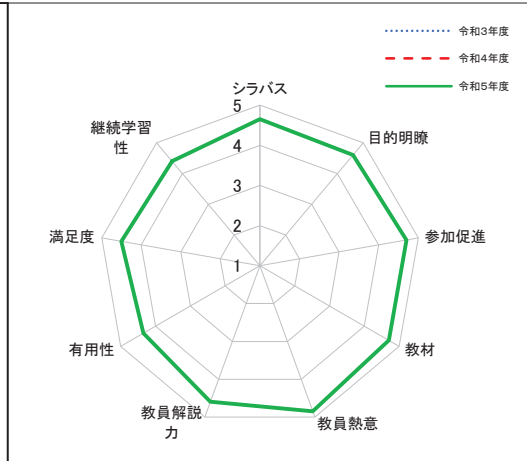
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 人間情報学特論

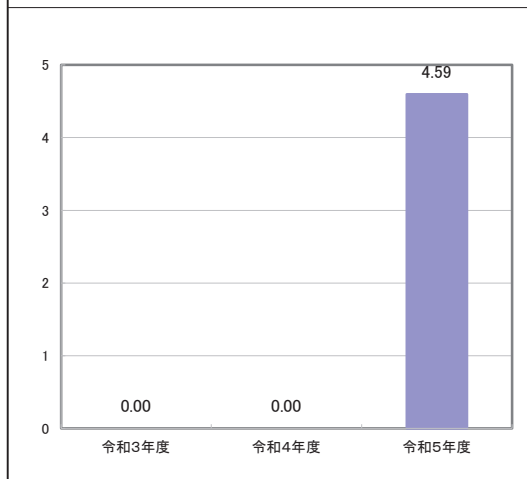
氏名： 田部井 賢一

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

学生のフィードバックから浮き彫りになった重要な点は、テーマの幅広さとそれに伴う講義時間の不足、重たい課題、授業中の技術的な問題、情報量の多さ、および遠隔参加者の疎外感などです。学生たちは、扱うテーマの多さにより、各トピックに割く時間が不足していると感じています。これは理解の深化を妨げ、学習の機会を減少させている可能性があります。また、課題の難易度が高く、準備不足や技術的な問題が学習体験を損なっていることも指摘されています。特に、ソフトウェアのインストールや操作に関する課題では、事前の準備指示が不足していたり、一般的なソフトウェアの使用を望んでいたという声があります。情報量の多さに関しては、学生は理解が追いつかないと述べており、これが学習過程でのストレスの原因となっているようです。遠隔参加者が疎外感を感じていることも問題であり、教室の参加者との会話が遠隔参加者には聞こえず、クラスの一体感が損なわれています。良い評価に関しては、授業と資料のわかりやすさ、学習意欲の喚起、ManabaやGoogle Driveの有効活用、汎用性のある教育内容などが挙げられています。これらのポジティブなフィードバックは、学生が教材を理解しやすいと感じ、学習ツールや資源の使用が効果的であることを示しています。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

良い評価の発展策: 授業資料のわかりやすさと有効なデジタルツールの利用を維持・強化することが重要です。学習意欲をさらに促すためには、授業のインタラクティブ性を高め、学生の参加を促す工夫をすることが効果的です。また、選択したテーマの深掘りや、興味のある学生に対して追加の資料や講義を推奨することで、自主学習の機会を提供することができます。

改善策:

テーマの幅と講義時間: テーマの選択を見直し、より集中的かつ深い学習が可能な範囲に絞り込むことを検討します。また、各テーマに割く時間を増やすために、必要に応じて講義回数を調整します。

課題と技術的問題: 課題の事前説明を詳しく行い、実施前に必要な準備やサポートを提供します。ソフトウェア関連の課題では、より一般的でアクセスしやすいツールの選定を心がけます。

情報量の調整: 情報量を適切に管理し、学生が各セッションで消化できる量に調整します。必要に応じて、補足資料を提供し、学生が自身のペースで学習できるようにします。

遠隔参加者の疎外感対策: 遠隔参加者がクラスのディスカッションに積極的に参加できるように、技術的な配慮（より良いマイクの使用、オンラインでの参加促進など）を行います。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

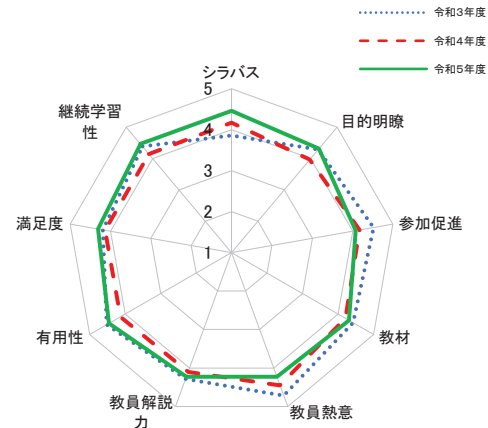
講義名： 人間中心デザイン特論

氏名： 伊藤 潤

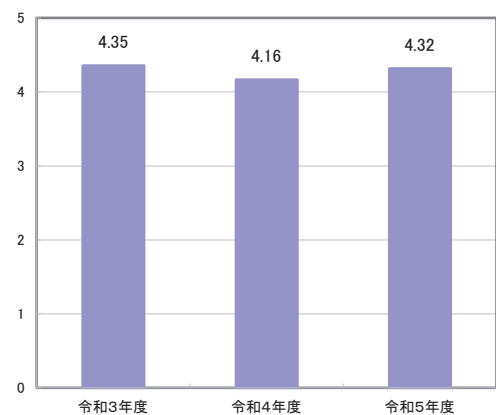
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

毎回の課題について「レポート課題で、参考になるサイトを読むなどの課題は情報を知ることにもなったためになった。」「授業がわかりやすく、楽しかった。また授業中にツールを使ったSurveyが行われたり、宿題が出されることで授業の内容をより深く理解することができた。」という評価があり、授業外のインプットとして有効に機能していると考えられる。

また2つのPBLを設定しているが「実践演習ということで、授業にリンクするような公募サイトに応募するというのは面白かった。」「2年次のPBL活動前に、PBLに似た活動が行え、よい経験と今後のPBLに向けた準備や、自分の活かし方や足りない部分に気づくことができた良い機会であった。」といった評価があり、アウトプットの演習として有効に機能していると考えられる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

「授業時間内でもう少し、PBL課題の話し合いが行えれば、より良かったと思う。」という評価があった。今年是对面の学生が多く、教室内でのリアクションへの対応があり、これまでのオンライン中心の授業のペースよりも時間が押しがちであった。今後は講義の一部を事前録画にするなどして時間配分に留意したい。

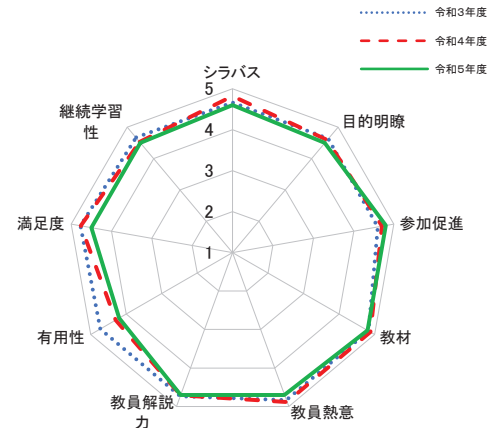
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： コミュニケーションデザイン特論

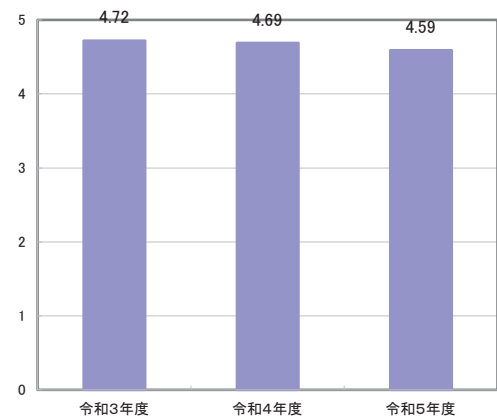
氏名： 高嶋 晋治/河西 大介

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

- ・体験型演習（高齢者体験キット活用）、グループ演習（ミニPBL）、個人演習（レイアウト、ダイアグラム制作）は大変好評。
- ・他のメンバーのレポートも見たい。→見せたくない人の配慮も考慮し、確認を行なったが反応が不明だったため実施しなかった。
- ・グループワークにおいてメンバー間で負荷の差がある。→それらを相談し合うことも含め体験学修してもらう狙いのため基本方針は変更せず。
- ・最終試験のオンライン化
- ・色弱に対する配慮（カラー関連の講義など）



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・体験型演習（高齢者体験キット活用）、グループ演習（ミニPBL）、個人演習（レイアウト、ダイアグラム制作）は大変好評。
- 2024年度は更に充実を図る。（体験キットの拡大など）
- ・他のメンバーのレポートも見たい。
- 見せたくない人の配慮も考慮し、確認を行なったが反応が不明だったため実施しなかった。「見せ合うことを前提」での推進を検討。（事前告知を実施）
- ・最終試験のオンライン化
- リアルタイム（制限時間）であることを担保し、実施の方向で検討。
- ・色弱に対する配慮（カラー関連の講義など）
- 該当する学生の有無を確認し、授業内容への配慮を徹底。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

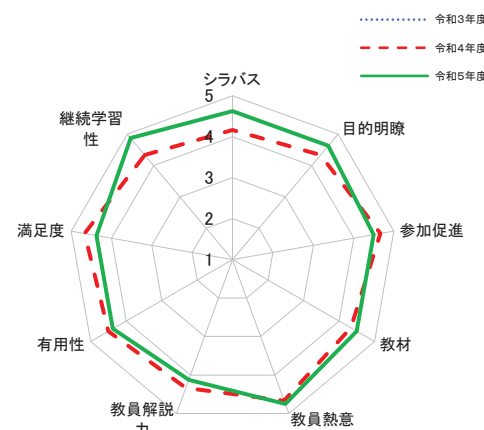
講義名： 工業デザイン材料特論

氏名： 内山 純

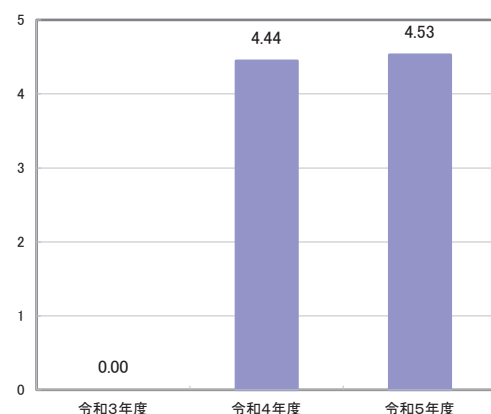
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

平均として4.53となり、昨年度の4.44に比べて0.09程度上昇し、目標である4を上回ることができた。シラバス、目的の明確さ、教材については0.5程度の上昇が見られた。一方で、満足度に関しては0.3程度の低下があった。

『これまでの授業とは違う視点で材料について学び、それをどうプロダクトに活かせるかを検討でき、予想以上に面白かった』、『他の授業よりもお互いの課題について話し合う機会が多かったのは良かった』、『デザインと材料の関係について、実際の物を使って説明していただき、デザインだけでなくコストなどの面も考慮する必要があることが学べた』などのコメントが寄せられた。一方で、『実際に材料を加工・作成する機会があればもっと良かったと思う』（今期も自習用に夢工房を利用できなかったことへのコメント）など、コロナ対策に関する意見もあった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

平均評価はわずかに上昇したが、引き続きコロナ対策として授業の実施方法に柔軟性を持たせ、対面を必須とせずハイブリッド形式で対応し、受講方法の選択肢を増やしたこともあるようだった。今後も安全を最優先に考慮し、大学の方針に沿って臨機応変に対応していく。その他、発表を通じた学習効果や、材料が専門の学生からも評価されていることから、授業形態やレベルは維持していく。また、夢工房を自習用に利用できる環境の復活については、強く望まれている。

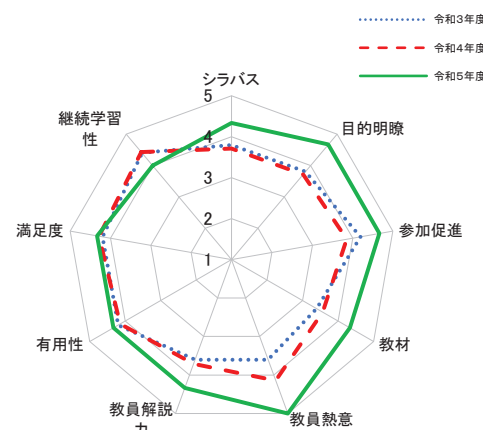
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： プロダクトデザイン特別演習

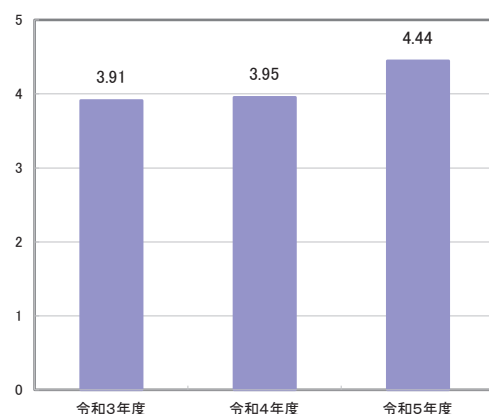
氏名： 高嶋 晋治/伊藤 潤/茂木 龍太

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

以下のように、実践的な演習授業として評価されている。「短い期間で、プロダクトを3つ提案でき、ポートフォリオに活かせるように挑めて、とても良い授業であった。また、発表後に指摘やアドバイスを頂け、修正が行えとても良かった。」「デザインの演習ということで手を動かすという授業は座学とは異なる学びになったと思う」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

「デザイン制作でよく使われる、3DCADやIllustratorなどのツールを全く使ったことがない初心者には敷居が高い授業と思いました。(自分は2Qまでにツールを使う授業があったのでまだ何とかついていけたのですが)」という意見があったが、そのために開講時期を3Qと遅めの時期にしている。来年度以降も同じ時期の開講予定である。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

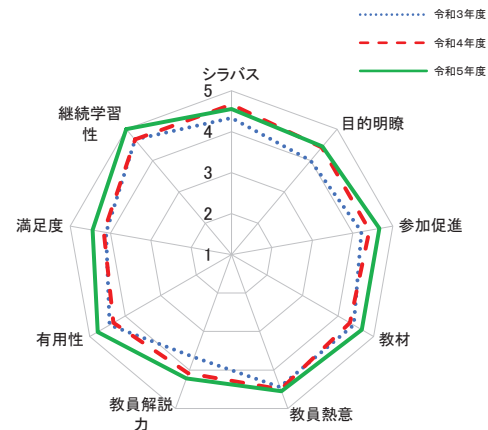
講義名： ET(Embedded Technology)特別演習

氏名： 村越 英樹

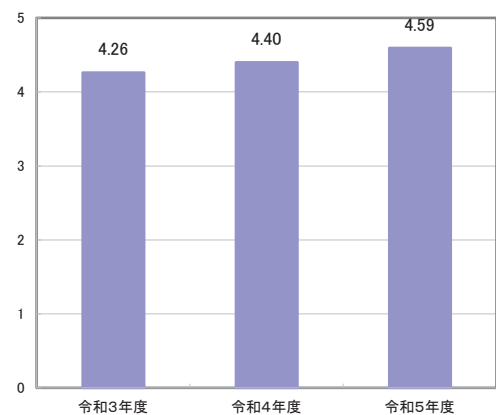
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

評価項目の平均値(Q.3～Q.11)は4.59であり、前年度の4.40よりは上がっている。最も良い評価はQ.11(継続学習性(興味・関心))の5.00、最も悪い評価はQ.8(教員解説力)の4.22である。

自由記述回答では、「実際のものをいじくるのは、やはり対?授業でよかったと考える」、「熱心に指導していただき、組み込みシステムの基本的な知識を実体験として理解できた。実際の物を使つての講義は必要であると感じた。」などの良い意見がある一方、「課題が多すぎて、仕事との両立が厳しかった」、「RTOSの利用やもっと進んだ組み込みプログラムについて学習したかった」など、改善を要望するご意見も頂いている。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

2020年度から昨年度(2022年度)までは、新型コロナウイルス対応でオンライン形式での実施でしたが、本年度は対面での授業を再開した。授業アンケートの自由記述回答では、「本演習に関して言えば、実際の回路や動作をリアルタイムに共有できたのが良かったので、対面ベース(遠隔にも対応可)がいいと思います」など、対面での授業を望むようなコメントをいただいている。来年度は水曜日の6、7時限(夜間開講)となるが、対面での授業を続けていく。

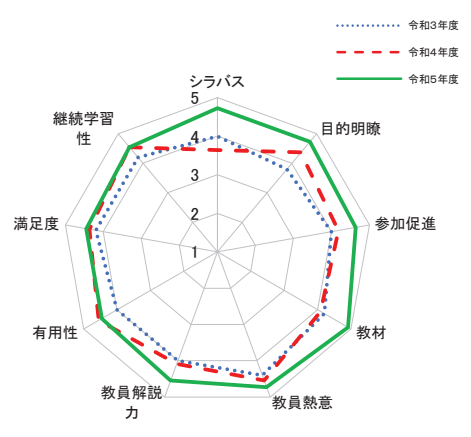
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： デジタルデザイン実習

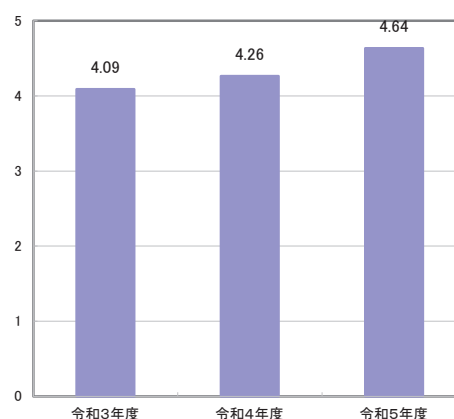
氏名： 村上 和

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

- アンケートの9割の項目で前年度以上、第3Qの全授業でも上位の評価が得られた。
- 学生の学習に支障がないようにシラバスに沿って計画通り授業を行なったことが評価されたと考えられる。(Q3 シラバス)
- 実習作業に入る前に必ずその日の実習の概略などを説明し、また次週の授業では前回の実習を振り返って改めて解説を行ない、目的を明確にするようにしたことが評価されたと考えられる。(Q4 目的明確)
- 〈基本操作の短めの講義〉⇔〈学生の作業の見回り〉を繰り返す授業形態にすることで、一つひとつの操作に丁寧に対応できるようにし、学生に個別に実演したり質問に答えたりする時間を長く設けたことが評価されたと考えられる。(Q5 学生の参加促進、Q7 教員の熱意)
- 基本操作の手順だけでなく、実習作品の歴史的背景なども解説した講義資料が学生の学習に非常に有用だったと考えられる。(Q6 教材)
- IllustratorとPhotoshopの基本操作を習得できたという評価だけでなく、美術・デザインへの関心や理解が深まったと評価されたのは、ソフトの基本操作の習得、デジタルデザインやビジュアル表現の考え方の理解など、本授業が掲げた目標が計画通りに達成されたと考えられる。(記述式回答)



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- 初心者を対象とした授業という点から、ベジェ曲線など未経験者にはやや難度の高い操作の場合は、よりわかりやすい解説を行なうか操作を実演した動画を用意するなどして、さらにスムーズに習得できるように考慮し、復習の際にも役立つように工夫する。
- 基本操作を早くに習得した学生には、実習課題を応用するなどしてより難度の高い課題を用意する。
- 有用性や満足度をより感じてもらうために、学生自身の仕事、日常生活、趣味などにつなげるように促すためのソフトウェアの利用例や制作事例などを増やす。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 機械学習特論

氏名： 林 久志

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

○内容や構成が好評

「学習の順序という意味で本講義はその点をしっかり練られていたカリキュラム」

「講義の序盤でルートとして提示されており自習・予習も取り組みやすかった。」

「ALPHA GOを理解するために非常によく考えられた講義構成だった」

「到達点がとても高かったので最後は大満足であった。」

「短期間で機械学習とは何なのかを学ぶことができ受講して良かった。」

「短期間でここまでの内容を説明してもらえて満足しています。」

○グループ学習が好評

「グループ課題があったのがよかった」

「グループワーク実施など、運営を工夫されており、初学者の脱落防止を企図されておられた。」

「グループワークで他の学生とディスカッションを行うことで理解が深まりました。」

「教えあい学習は良い取り組みだと思いました。知識を深めるだけでなく生徒同士の交流を促進するためです。」

○ハイフレックスと録画の講義が好評

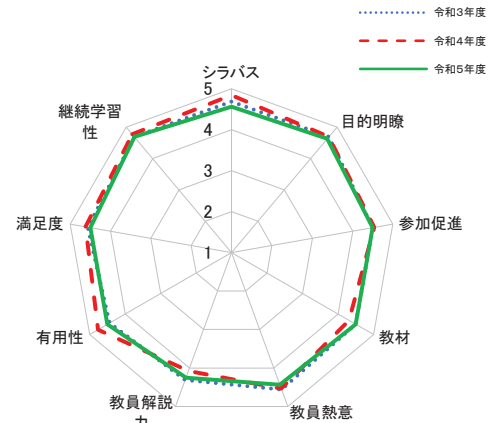
「半数の講義を動画配信していただいたことで仕事との両立がしやすかった。」

「遠方なので、ハイフレックスや録画授業は助かった。」

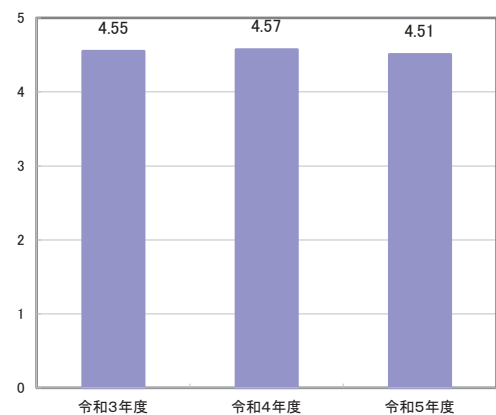
「特に座学については自分の学びたいタイミングで授業を聞ける録画授業が仕事との時間調整がしやすい点で助かった。」

「仕事でやむえず登校できないこともあったので、非常に良かったです。」

「勤務先が大学院から50km程度離れているため、遠隔の授業は大変助かりました。」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

講義の内容や構成は完成してきたが、今後も講義に最新のトピックを反映できるようにしたい。  
TAはいないが、今後もグループワークを効果的に用いて、学生同士で理解促進できるようにしたい。  
ハイフレックスと録画講義は好評なので、継続する。

## ■ 第4クォータ アクションプラン ■

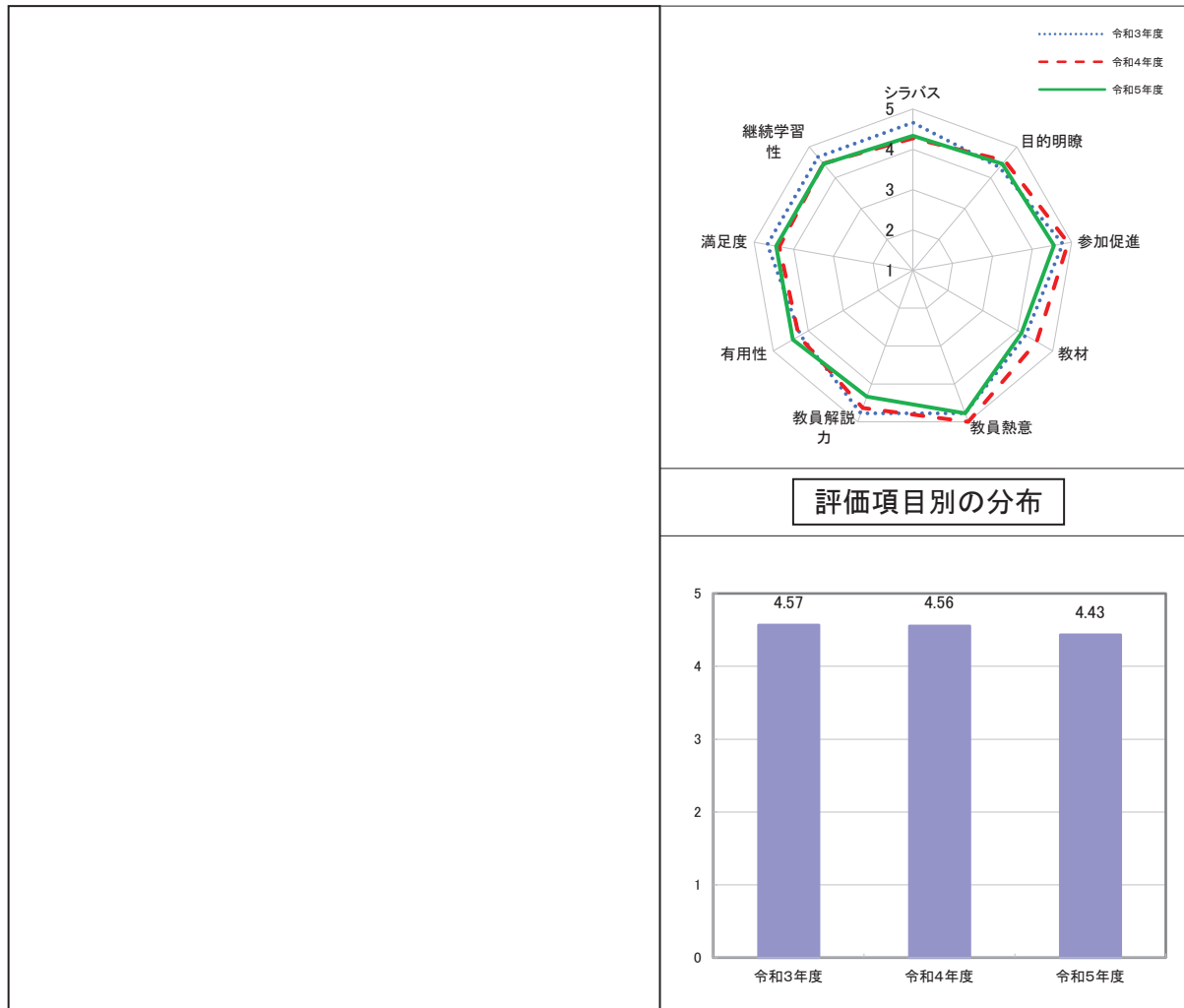
### 1 各コース共通科目

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 国際経営特論

氏名： 前田 充浩

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）



### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

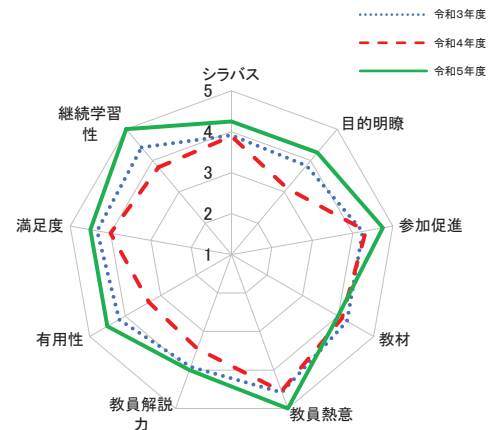
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： DESIGN [RE] THINKING

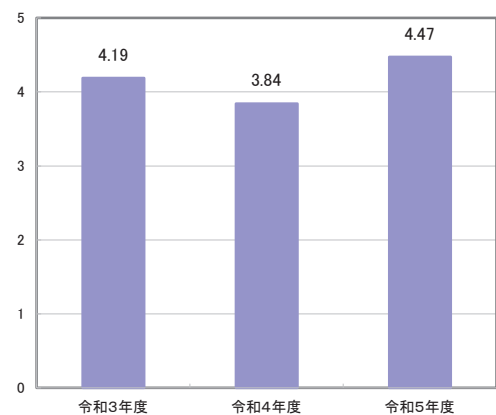
氏名： 松井 実

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

履修人数が少ない。デザイン思考を期待すると「ちょっと違う」と感じる。科目履修生には不親切。チャット上の情報は残らないため、チャットで共有されたリンクなどを探すのが大変。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

後半の、既往PBLの成果を批判し改善していくプロセスに高い評価をいただいた。前半の座学は「難しい」「わかりにくい」といった評価が散見されるが、扱っている内容がかなり発展的なので、よりわかりやすい授業資料をめざし改善していく。授業内で都度更新されるリンク情報などを随時アップデートする一元的なGoogle Docsファイルなどを用意し、履修者がそこにアクセスすればどこに何があるかが一目瞭然となるようにしたい。

## ■ 第4クォータ アクションプラン ■

### 2 事業設計工学コース科目

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

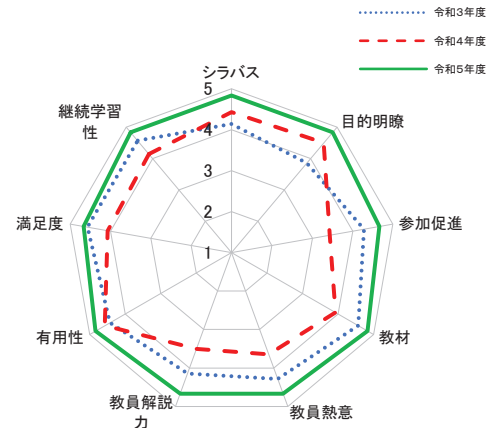
講義名： マネジメントシステム各論

氏名： 板倉 宏昭

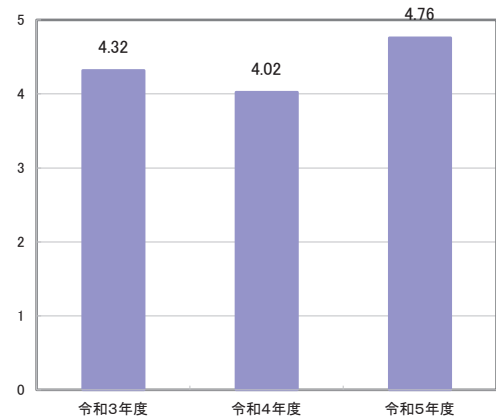
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

平均点は、4.76と高い評価をいただいている。

自ら執筆した経営学の体系の基本書に解説、問題集とその回答、ショートケースが網羅されている。教科書にそって授業を展開するのが評価されている。例えば、「教科書に記載されている内容の解説と演習による整理と理解を促すパターンが良かった。」「ふりかえりテストで重要ポイントが理解できた」、「講義レポート(個人)で、自組織における課題を問われており、改めて、自組織がどんな状態にあり、どう進めていけばいいのかという気付きを与えて頂いた。」「知識だけでなく、よく考えられた課題テーマで、理解が深まりました。」といった指摘である。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

グループワークの発表方法については、検討の余地があると考えます。例えば、「グループワークの際、グループとしてまとめて発表する場合と、個別に発表する場合があったと思います。明示的に個別に意見を述べてください、という場合以外は、基本的にはグループで話し合ってまとめたものを発表するようにしないと、グループ分けした意味がありませんのでは、と思う時がありました。」といった指摘である。

ブレンディットラーニングとオンライン遠隔講義でも「質を落とさず、授業されているので、良いです。」「遠隔会議方式は、時代の流れに沿っており非常に役に立っています。」といった肯定的な評価が多く、否定的な意見はみあたらない。社会人が多い本学にふさわしい授業方法だと考えられる。

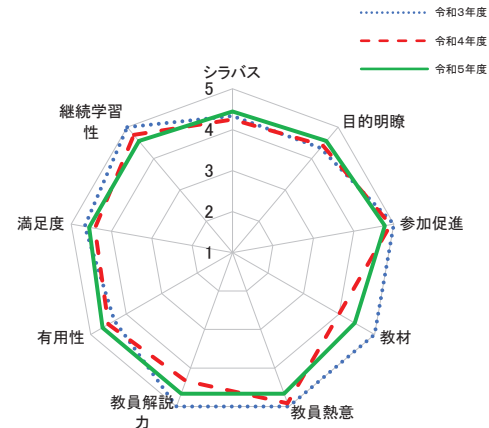
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 地域経済分析特別演習

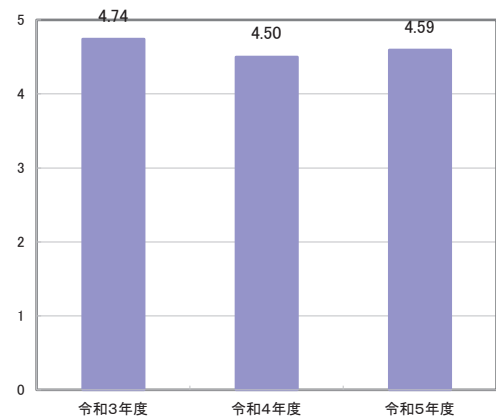
氏名： 三好 祐輔

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

- ・ 学生の理解度を見ながら、授業ペースや授業内容を柔軟に変えていた点。
- ・ 授業が終わった後の質疑応答を行った点。
- ・ 不明な点について、分るまで講義した点。
- ・ 微分積分など数学的背景がないと理解が難しい点
- ・ 受講生は、平日は授業を受けるのが難しいので、録画のみであったり、土曜日に受講できる講義があると、社会人の学生には勉強する機会が増えるので、このような講義形態を希望する点。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

以上の指摘を踏まえ、次年度も講義内容及び形態を改善してゆきたいと考えている。

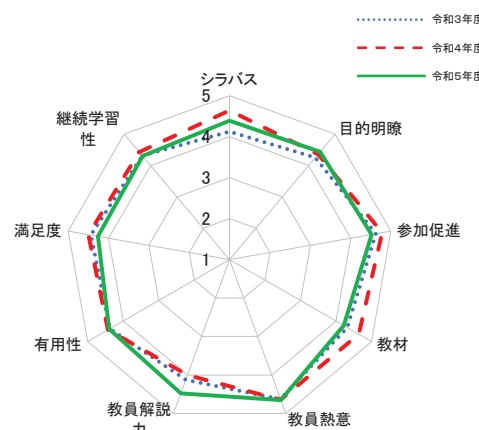
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 技術経営戦略特論

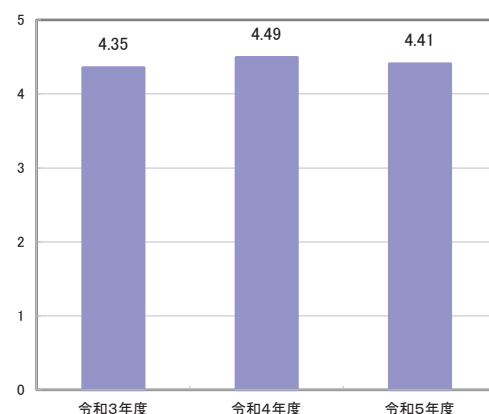
氏名： 吉田 敏

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

教員解説力については、昨年度に比べ本年度は学生の評価が向上している。この点については、研究を促進しながら、できるだけ学生の声に耳を傾けることに努めた。このことについては、継続的に高評価を得ることができるように検討を持続するようにしたい。また、学生の参加促進や教材については、昨年度の評価より下がった評価となっている。この授業の特性としては、実際の企業活動が対象となっているため、すべての内容を事例を挙げて解説することは難しい面があるが、改善が必要であることも否定できないため、持続的に教材内容の検討を加えていきたいと考えている。また、学生の参加促進については、教員に問いかけ確認する時間に制限があるという点に満足できない感覚を持った学生がいたが、できるだけ授業時間内だけでなく時間外も自由に質問できるようにすることを心がけていきたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

グループ議論に関して、様々な意見が出てきている。メンバーを固定すべきか、学生の1人による長い発言を抑止すべきか、時間の配分などの指定をした方が良いのかなど、検討すべき意見が出てきている状況である。内容に即した洗濯を進めることを、今後の方向性としていきたい。また、この授業は、研究成果が大きな情報源となっているため、新しい研究を進めることが重要となる。できるだけ研究を進め、来年度以降の授業へ、反映させていくことに努めたい。また、個別の質問への対応として、授業時間には限界があるため、メールなどを活用しながら、学生からの質問の機会の充足を推進していきたいと考えている。

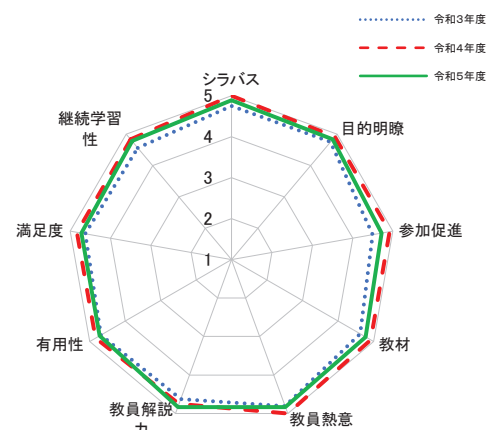
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： イノベティブサービス技術特論

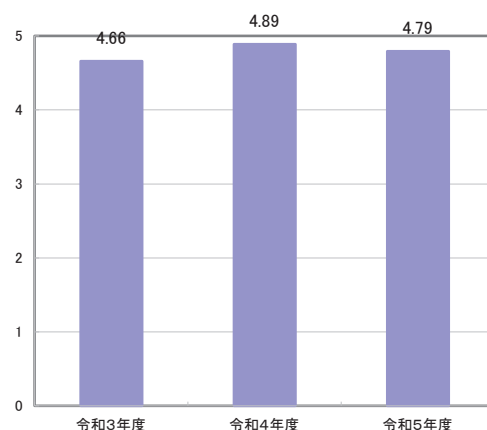
氏名： 細田 貴明

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

- ・全体として一定の評価を得ることができた。
- ・講義内容のアップデートの重要性についての指摘を受けた。
- ・学習ルーティンの構築への有効性について指摘を受けた。
- ・昨年度同様に、グループ演習におけるフィードバックの重要性に関する指摘があった。
- ・講義動画／資料をもっと早く公開すべきであると指摘があった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・全体として、一定の評価を受けたことから講義方針として継続することに問題がないと判断する。
- ・講義の特性上から、情報のアップデートは必須であると考えている。しかし、普遍的に変わらない考え方もあるので、その辺バランスをうまくとった講義構成を引き続き検討したい。
- ・座学講義と演習講義の組み合わせは学習習慣をつけることを意図したもので今後も継続していきたい。
- ・フィードバックについては、昨年度までは、講義へのコメントを中心に行ってきたが、今年度は演習課題に対するコメントも行う取り組みを行った。総じて評判がよかったので継続していきたい。
- ・講義動画／資料の公開時期であるが、1週間の過ごし方のバランスから配信／実施日を決めている。事前にシラバスでも計画を公開していることから特に大きく変更する予定はない。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 事業継続戦略特論

氏名： 松尾 徳朗

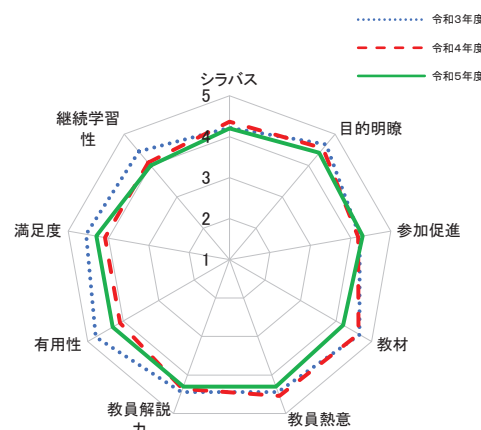
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

#### 【ポジティブな意見】

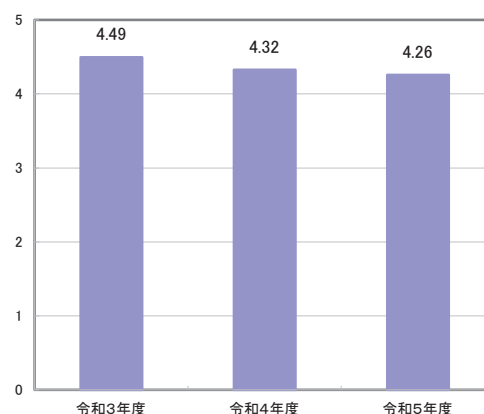
- リアルのコミュニケーションが可能であれば、それを実現した方がよいと思うが、時間的制約等でそれがかなわぬ生徒も多いことを配慮した最適な授業設計である。
- 課題はハードなボリュームであったが、とてもためになった。
- 参考書が充実しており、まだ2冊ほどしか目を通せていないが良書で学びが深まる。
- 具体例が多かったので実務に使いやすかった。
- 座学だけでなくグループ実習が取り入れられていた点。
- 学修した内容を確認する演習とレポートが組み合わせられていたこと。

#### 【ネガティブな意見】

- グループディスカッションの中で、講師が指導的に加わってもらえるとより分かりやすくなる。
- アンケートの作成についてはかなりコツがありそうな気がしたため、参考書を必読として理解を深める機会を設けても良い。
- ビデオ講義では一つの例に沿って講義全体の一通りの流れを説明してもらえるとより理解が進む。
- 演習グループは当初より割当てしていただいた方が良い。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

グループディスカッションにおける指導において、机間巡視をより効率的に実施できるように工夫する。具体的には活動内容が見えるかする方法などが考えられる。また、社会調査法などにおいては体系的に継続した学習が可能となるように、データ分析関係の書籍と併せて紹介する。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：ヘルスケアデザイン特論

氏名：田部井 賢一

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

#### ・教材の充実と課題の即時解決:

配布される教材が充実しており、課題もその場で考えて記載する形式で、他の生徒の作成風景も見ながら進められる点が良い点であったとの意見があった。これは他の授業でも取り入れて欲しいという声もあった。

#### ・積極的なコミュニケーション:

授業中に掲示板やチャットを積極的に使いコミュニケーションや情報収集に活用したことが評価された。また、授業途中での課題や同時に資料を作成することで、他の参加者とのフィードバックが得られたことも良かったとされた。

#### ・受講生同士の交流と学習効果:

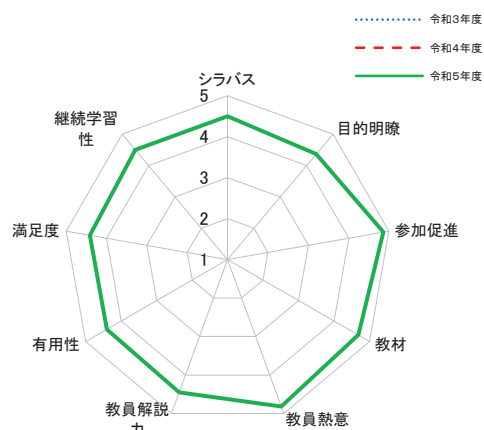
Manabaでの議論が積極的に行われていることや、グループワークや意見交換が学びにつながった点が評価された。特に、他の受講生の作品を閲覧することで学びが深まったという声があった。

#### ・遠隔授業の効果:

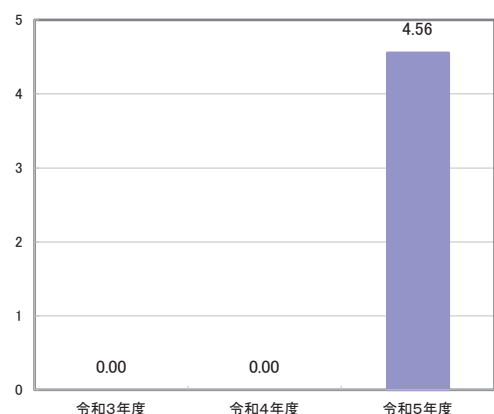
遠隔授業形式によって、時間の節約や受講効果の高さが評価された。特に、リアルタイムでの受講が課題への取り組み成果を高めたとの声があった。

#### ・授業改善への提案:

ヘルスケアデザインを実践している先生をゲストに招き、交流の機会を設ける提案や、授業資料の充実、課題の締め切りの設定など、授業の改善点についての具体的な提案があった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

#### ・良い評価を発展させる策:

教材のさらなる充実：生徒の好評価を受けている教材の充実に努め、実践的なツールやケーススタディを取り入れる。

コミュニケーション強化：Manabaや掲示板を活用して生徒同士のコミュニケーションを促進し、意見交換や情報共有をさらに推進する。

#### ・改善すべき評価に対する改善策:

Manabaの改善：チャット機能の使いやすさを向上し、課題書き込みの納期設定を行うなど、生徒の利便性を向上させる。

資料の充実：授業資料のブラッシュアップや医学的・心理学的な経緯などの内容の充実に図り、授業内容の理解を深める。

## ■ 第4クォータ アクションプラン ■

### 3 情報アーキテクチャコース科目

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

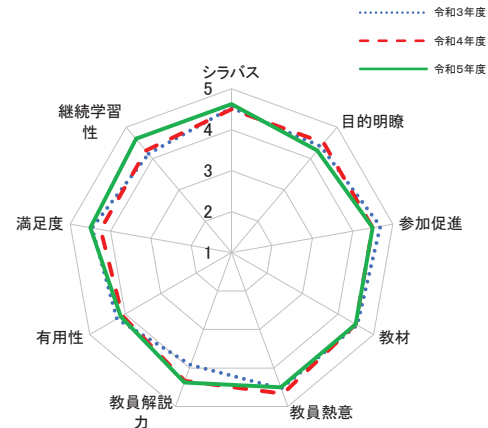
講義名： セキュアシステム管理運用特論

氏名： 真鍋 敬士

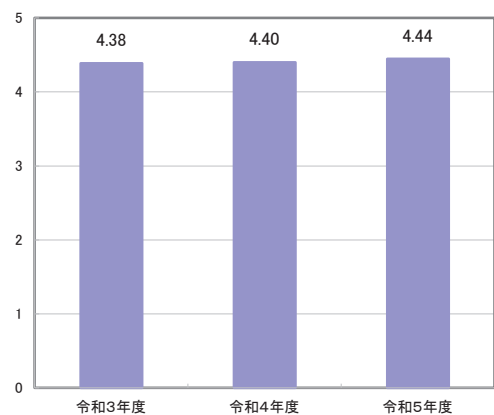
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

設問（Q.3～Q.11）への回答状況は前年度同様の傾向になっており、記述回答では前年度まで見られていたグループワークでの負担配慮や評価の透明性についての要望や教室設備の使い方に関する指摘はなかった。グループワークでの評価については前年度からの取り組みにより具体的に説明できるようになった面がある。教室環境については、期初から持込PCも併用するようにしたため、受講者の視点を確認できていた。それでも、期中にメール等でグループワークについての要望や確認を受けており、また、講義中に教室設備の使い方について指摘されたことも何度かあった。記述回答でのポジティブな意見としては、事例紹介やインシデント対応演習に関するものが見受けられる。

講義後に提出される出席票でも期中に質問や指摘をいただいております。特に演習環境については設問で何度か進捗確認をするようにしているが、サポートには至っていない。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

最新の事例紹介、グループワークでの貢献度評価、全体構成解説といった改善策を引き続き実施する。本年度は出席票内で履修生とやりとりができるようにしたが、全く活用できなかった。講義内容と連動した設問を増やす等の試みを行う。演習については昨今のPC環境に合わせた教材データの刷新は困難であることから、引き続き演習シナリオの更新や部分的な教材データの入れ替えを行う。

本年度も期が始まる前に教室設備の使い方の説明を受けた。環境に変化はないが、設備に慣れるまでの時間を短縮できていることは間違いないので、今後もお願いしたい。また、授業評価アンケートの回答率を少しでも高められるようにしたい。

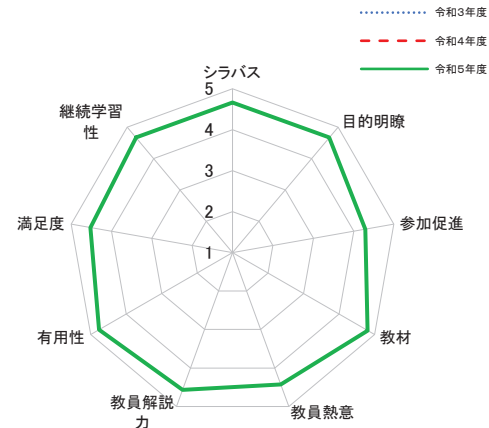
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： データ分析実践特論

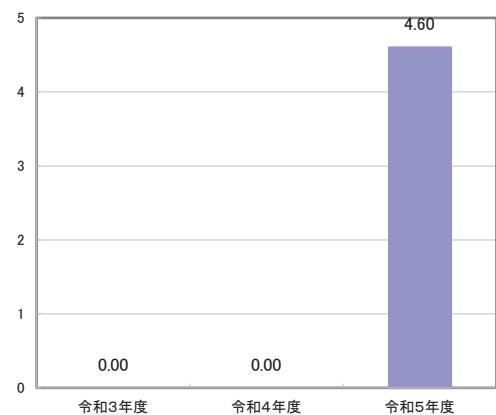
氏名： 追川 修一

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

評価の平均は4.6となり、前年度の4.64よりもやや下がった。各設問では上がっている設問（Q6.教材、Q8.教員解説力、Q9.有用性）もあるが、その他の設問は下がっている。特にQ5.学生の参加促進が4.47から4.29の下げ幅が大きい。これは、グループワーク等で疑問を共有して解消したいというコメントが複数あったため、それを反映していると考えられる。データ分析特論の次の科目としてより発展的な学習をしたい学生が履修しているためか、データ分析特論で見られた、授業内容が分かりにくい、ソースコードを含めて資料が分かりにくい、説明が不足している、といったコメントは特に見られず、むしろソースコードを含む資料が充実しており、わかりやすいというコメントが目立っていた。データ分析特論とデータ分析実践特論で資料のレベル差は無いにも関わらず、このようにコメントが大きく食い違うことが、履修者によって大きく評価が変わってくることを裏付けている。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

演習には各自で取り組むものの、グループ分けをして、お互いに質問しやすい時間を設けることは、学生からのグループワークの要望を取り入れる一つの方法となると考えられる。ほとんどの学生は遠隔で受講しているため、単純に議論するよりも難易度は高いが、PBLで同様の取り組みは行われているため、講義での実施についても検討する必要がある。多様な学生に対する対応については、本学ではデータ分析・データサイエンス系の講義群は3コースにわたり乱立している状況であり、各コースで同様の問題が生じていることが考えられるため、入門レベルから始めて、段階的に知識・スキルを取得できるように体系化する方向が最も良い方法である。

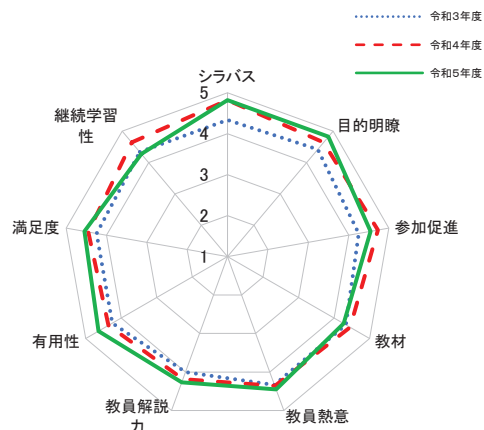
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： IoT開発特論

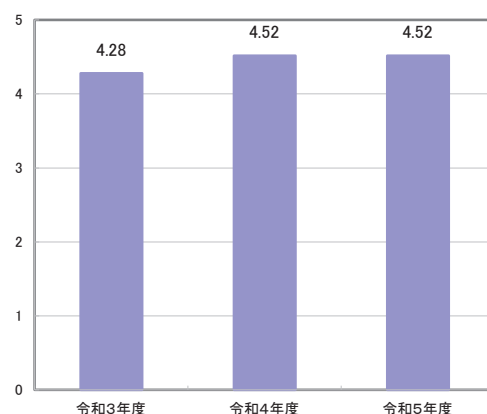
氏名： 飛田 博章

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

全体的評価は4.52で昨年度と同じであるが、項目別に見ていくと若干の違いがあった。「自己学習量」「目的明確」「教員の熱意」「教員解説力」「有用性」の各項目が昨年度に比べて良い評価を得ることができた。一方で、「学生の参加促進」「教材」「継続学習性」に関しては若干評価を落とす結果となっている。内容に関して精査するとともに、次年度の改善に繋がっていきたいと考えている。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

個人ワークとグループワークに関して、バランスが良かったとの意見がある一方で、時間が少ないとの意見もあった。履修者の状況にもよるが次年度は時間を増やせるように工夫することを考えている。また、個人・グループワークに関してフィードバックが少ないとの意見もあった。フィードバックや模範解答の説明のための時間をより多く確保することを考えていきたい。また、グループ分けに関しては特にコメントはなく、今年度同様にバランスを考えながらグループを構成する予定でいる。

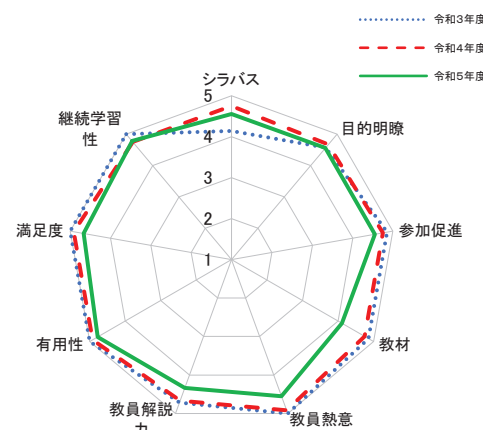
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報システム特論2

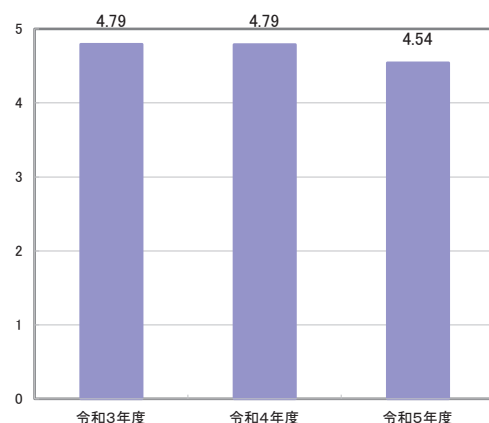
氏名： 亀井 省吾

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

項目1-2について、出席率5.00、自己学習量4.56と相対的に高水準であったことから学生の負担の高さが窺われる。一方、項目3-11では、それにも関わらず、評価平均が4.54と大凡及第点評価を頂いたと理解している。当年度学生の多くが学習経験レベル高く、コメントからも負担の高さを意欲に転換しチーム活動を実施する傾向が読み取れる。一方、本講義はハイブリッド型で大半の学生が遠隔受講を選択していた。よって、ケースのイントロダクションを、理論解説含め厚めに実施することで、学生負担を削減しつつケース理解を促すよう心掛けるなど諸施策を講じたが、学生間の横のつながりの深化を期待する声も見受けられ、一層の工夫が必要と感じている。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

以下の改善・発展策の必要性が読み取れた。

- ①学習興味を喚起する今日的トピックを盛り込んだケースの継続投入を進めていきたい。
- ②課題企業のゲスト招聘を可能な限り実現していきたい。
- ③提示する参考文献のブラッシュアップ、絞り込みを行いたい。
- ④チーム討議方法、講師の関わり方について検討していきたい。

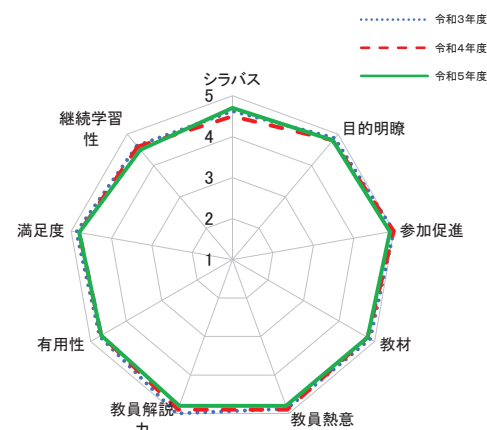
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報ビジネス特別講義3

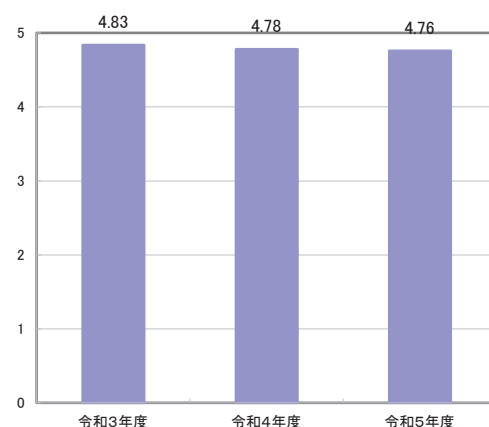
氏名： 川名 周

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

今期は、ハイフレックス（＝教室参加者もZOOMに入る）形式で実施した。ブレイクアウトルーム及びチャットによるオンタイムでの講義感想や質問を丁寧に拾う等、双方向な講義に努めた結果が評価に繋がり、教育効果をあげることができたのは良かったと思う。また、ZOOM上でケースメソッドを行い「クラス討議」ができたこともグッドポイントであった。毎回5-6名の教室参加者がいたことは心強かった。授業アンケートの回答でも、全てリアル講義でも良いのではとの意見もあり、それはそれで参考となった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

最終日はほとんどの受講者が教室での受講でオンラインは二人であったにもかかわらず、ZOOMツールでの配信に拘ったことは反省点である。教室でリアル講義、プレゼンを行い、それをオンラインの二人だけに中継すべきであったと思われるので、来期もそのような機会があれば改善したい。また、今期も大学より、講義時に、一台pcを貸与していただき感謝しております。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報セキュリティ特別講義2

氏名： 奥原 雅之

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

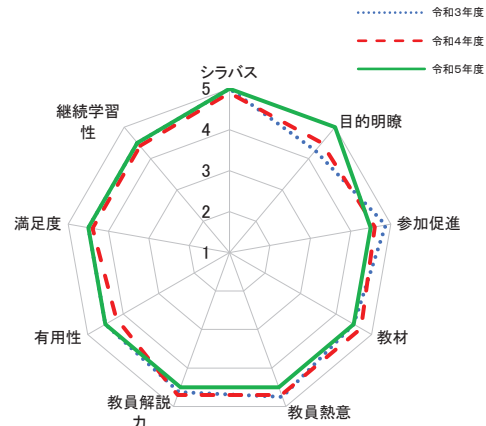
評価アンケートの回収率がよくない。受講者8名，うち最後まで走り終えた受講者が6名，これに対してアンケート回答者が3名。最後まで受講した学生を対象を限っても回収率50％は十分とは言えない。評価アンケートを提出しないこと自体，科目への暗黙の不満の表明となっている可能性もあり，次回以降の回収率向上へ働きかけを行いたい。

#### ・講義内容

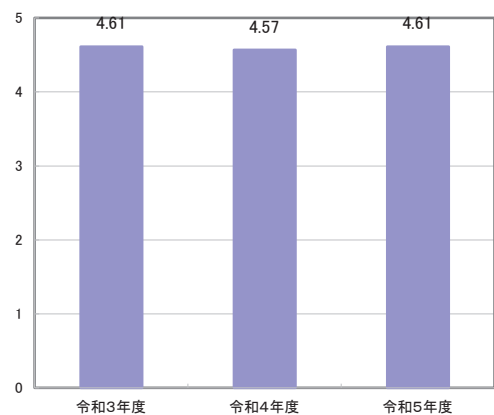
講義の内容については，期待とは異なっていたという趣旨の回答者が1名あった。自由解答欄に「ISO/IEC 27001などの内容のほうよかった」とあるが，この規格は別科目の情報セキュリティ特別講義1で取り扱っている。本科目はセキュリティ開発者向けのかかなり特殊な科目なので，期待と内容が違っていた場合はかなり参加に困難があったことと思う。

#### ・コミュニケーション

コミュニケーションが不足しているという回答が1名あった。Zoomを使った遠隔グループ演習という環境で，どのようにコミュニケーションを取るかは課題であり，今後試行錯誤を続けて行くことになると思う。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

・今年度の演習は，受講者が少ない上に途中ドロップアウトもあり，演習グループが全員揃わないなど，受講者にとっても負荷が高い演習になってしまった傾向がある。次年度以降は，受講者が少ない場合は無理にグループを分けないで，受講者全体による課題演習にするなど，臨機応変の対応ができるように演習内容を検討したい。

・題材としている国際標準ISO/IEC 15408は，内容が非常に高度で特殊であるため，期待した内容と乖離がある場合には，受講者に大きな負担となる。シラバスの表現や，第一回のガイダンスなどで，この点について受講者に誤解がないようにガイダンスしていきたい。

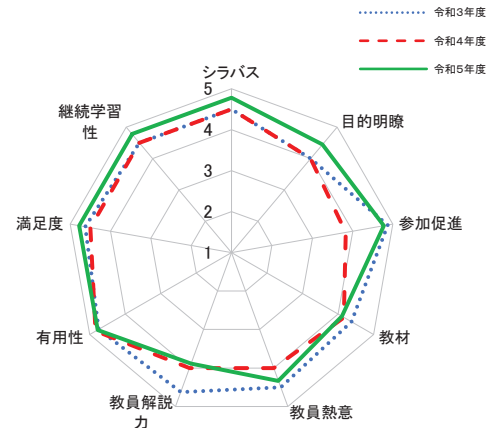
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： コラボレイティブ開発特論

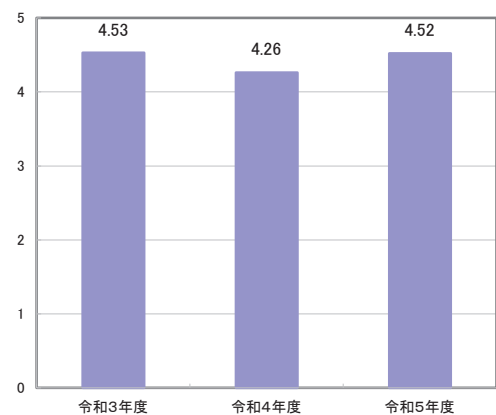
氏名： 中鉢 欣秀

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

例年のことであるが、学生が熱心にグループワークに取り組み、成果を出している。学生が自ら考えて学ぶアクションラーニングの手法が機能している。受講者の協力もあり、大変円滑に授業が進められた。受講生の事前知識やモチベーションが多様であるため数値的尺度に基づく定量比較は難しい。ある種の目安として評価結果を受け止め、評価の低いものについては継続的に改善を行い、高いものについてはこれを維持して行きたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

アジャイル開発におけるマネジメントの手法についてアドバイスが欲しいという意見があったが、シラバスに記載している通り、アジャイル開発の手法そのものについては他の授業科目を履修して事前に学習することを推奨している。今期はこの科目を履修していた学生がほとんどいなく、前提となる推奨科目の履修について浸透していなかったことは改善すべき課題である。

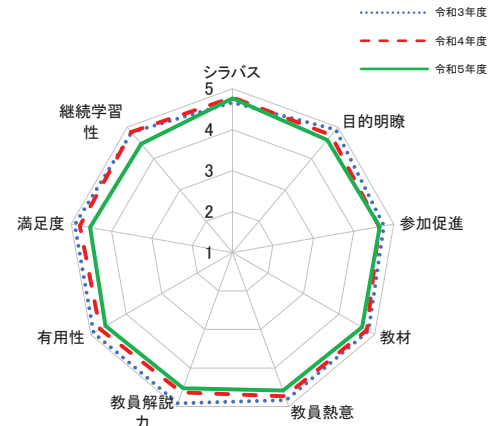
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： プロジェクトマネジメント特論3

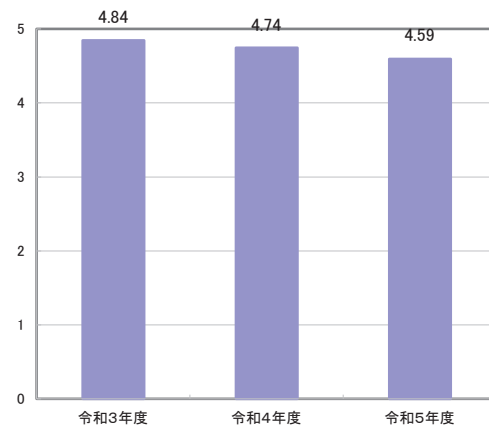
氏名： 三好 きよみ

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

- ・ほかの受講生の気づき(授業アンケート)を共有いただけたことで学びがさらに深まった。
- ・特定の分野に焦点が当てられているため、PM1などと比較して濃く学びが多かった。
- ・自己学習の回の後、グループディスカッションで互いの考えを伝えあい、発表するスタイルが良く、学びの他に楽しさも感じられた。
- ・最終発表での相互評価の仕組みは、刺激があるとともに、自身では気づかない部分に向き合うきっかけになった。
- ・受講生が顔出ししていない+オンライン授業なので、グループディスカッションの際に不安になった(先生が顔出し推奨とアナウンスしていただけるとよいと思う)
- ・WBS作成については経験がなかったことなので、もう少し、詳しく教えていただけると幸いです。
- ・後期のクラスであるため、基礎知識がある前提で進められた方がより良かったと思います。
- ・若干、資料の出所が古かったりするところがあったので、最新にアップデートをしていただけると嬉しい。
- ・(manabaによる相互評価で)回答フォームのトラブルがあった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

毎回の受講生レポート(気づき)を共有すること、反転学習方式(動画視聴+個人課題→講義+グループディスカッション)、プレゼンテーションの相互評価については、好評のため継続したい。ただし、個人課題は予習の扱いとする、相互評価は基準を明確にするなどの対応を検討する。

取り扱う内容は、基礎知識前提ではあるものの、後期からの受講者もいるため、基礎部分は1Qの動画視聴の推奨などについて検討する。

資料については最新のものを提供できるようにする。

manaba回答フォームのトラブル対応として、今後はgoogleformなどの利用も検討する。

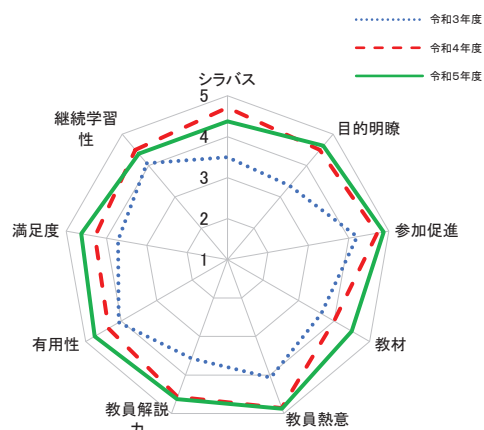
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報システム特論1

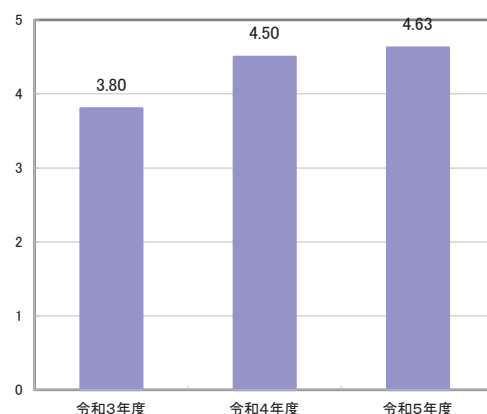
氏名： 嶋津 恵子

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

「授業中のディスカッションにGoogle Meetのチャット機能を活用しても良いのではないかと思います。例えば先生への質問とそれ以外(感想や気づき、自分の体験等)を区別できるように投稿ルールを設けて、質問はTAの方が先生へお伝えいただくような方法はいかがでしょうか。」という自由記入は注目に値する。利活用を検討すべきだ発ったと考える。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

「移動や時間的な負担は軽減できるので、社会人にとってハイブリッドでの授業は非常にありがたいと思う。一方で、教員への質問は遠隔で聞いている時よりも対面で受講している時の方がすることが多いと感じた。対面することで、積極的にコミュニケーションを取る気持ちが湧くのかもしれない。」

に代表されるコメントが数件あった。対面の良さを遠隔方式ではまだ十分に再現できていないように思う。

## ■ 第4クォータ アクションプラン ■

### 4 創造技術コース科目

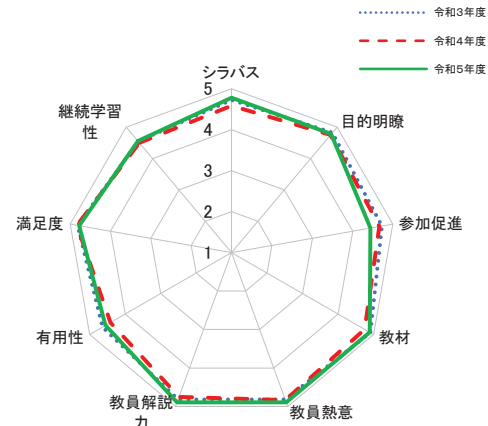
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 品質工学特論

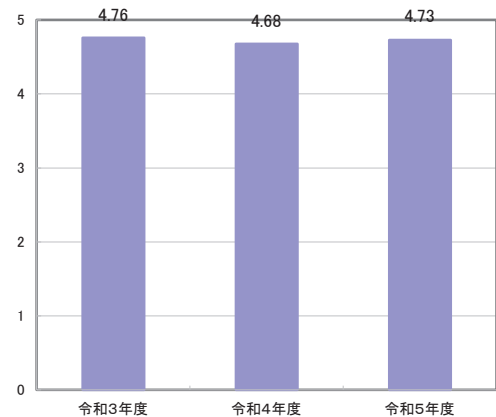
氏名： 越水 重臣

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

授業アンケートの評点（平均値）は、前年度の4.68から僅かではあるものの4.73へ向上した。その理由を推察するに、自由記述のコメントが大いに参考になった。自由記述によると、良かった点として「発表会があること」「質問の時間があること」「補足資料が多いこと」「ツールの提供があること」「事例をもとに授業が進むこと」「様々なバックグラントの学生に理解できるよう解説されている」などが挙げられていた。これらいただいた意見は、今後の授業設計に引き続き活かしていくよう心掛けたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

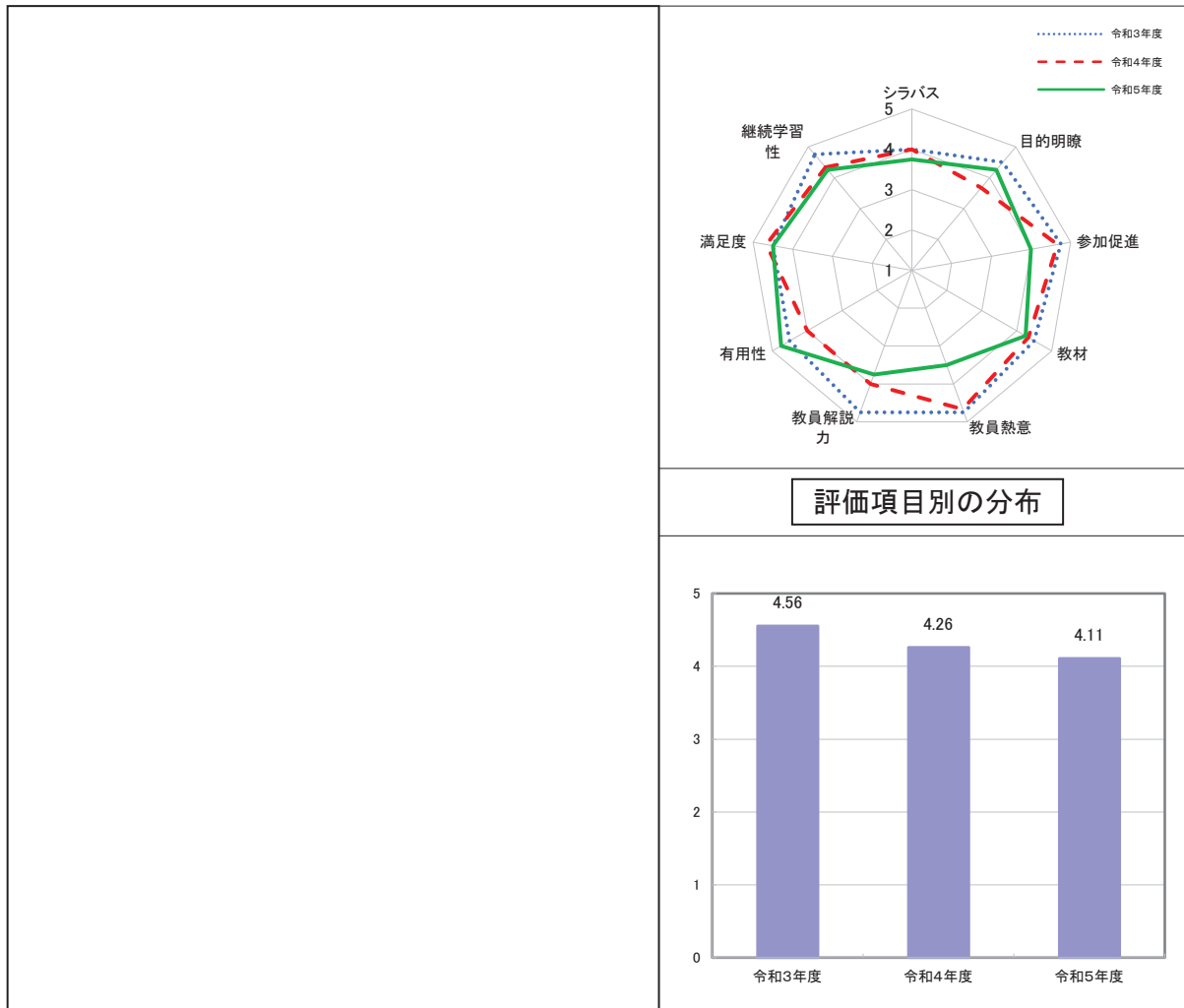
本講義では、第1回授業のときに「良いエンジニアは固有技術と汎用技術の両方を兼ね備えているべきである」ということを伝えている。固有技術はその人が持っている（その業界における）専門技術のことであり、それがないと仕事ができない。エンジニアであれば開発設計ができない。一方の汎用技術はどの業界でも役立つ汎用的・普遍的な技術のことであって、効率よく仕事を進めるには欠かせない技術のことである。エンジニアであれば開発設計のスピードアップに寄与する技術である。品質工学は汎用技術であり、今回のアンケートで「汎用技術を自身の業務に適用したい」との記述があった。初回講義で話したメッセージが受講者の心に刺さっていたのだと思うと嬉しくなった（泣けた）。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： チーム設計・試作特別演習

氏名： 伊藤 潤

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）



### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 価値デザイン特論

氏名： 蓮池 公威

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

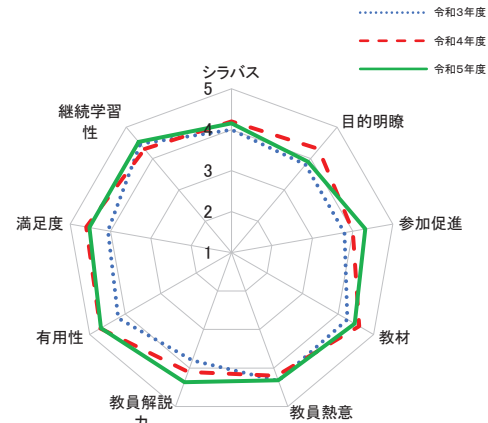
「有用性」が4.63、「満足度」が4.53と、有用性と満足度が昨年に引き続き高く評価されていて、授業の内容については高く評価されていると捉えています。

「グループワーク自体はとてもよかったと思う。」「グループワークがほぼ毎回あるのは非常に好感だった。」「グループワークの良さもわかり、色々な気づきがあってとても良かった」「最終的には面白いグループワークになった」「グループワークで多角的な視点の意見交換ができた」など、グループワークに関するポジティブなコメントが多く、グループワーク自体は、評価されていると捉えています。

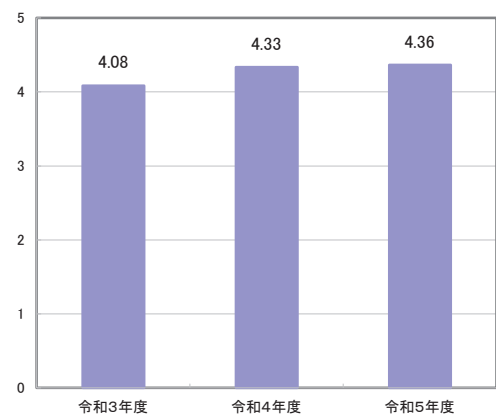
一方で、一方で、「目的明確」が、3.89と、昨年度の4.30から下がっており、グループ課題について、やっていることの意味が、授業の後半でわかってくるという進め方に対して、戸惑いがある学生がいたと受け止めています。

これは、昨年よりも受講生が多く、デザイン以外の仕事をしている人が多かったことも影響していると思っています。

「定義などの理解が所々あやふやになってしまったところもあり、うまく理解できていない状態での作業や課題に取り組んだことが残念」「先入観なく進めることが目的だと先生はおっしゃっていたが、やり方がわからないまま暗中模索するのは効率が悪すぎる」というコメントなどから、もう少し事前にガイドをした方が進めやすかった学生もいたと感じています。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

映像で理論面を解説し、並行するグループワークで、リサーチからの価値発見と提案を進めていくという進め方は、学生のコメントからも効果が高いと感じており、より、理論面とグループワークの内容がリンクするように説明のタイミングの調整やグループワークの振り返りを多段階にしていくなどの改善をしていきたいと考えています。

授業外の時間での作業については、規定の事前事後学習時間内で収まるようにしていますが、グループで時間を合わせることなどが難しい場合もあるため、初回の説明でグループワークのイメージを具体的に説明するとともに、早期からグループメンバーのコミュニケーションを図り、柔軟にグループワークを進めていけるような進め方にしていきたいと思っています。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： システムモデリング特論

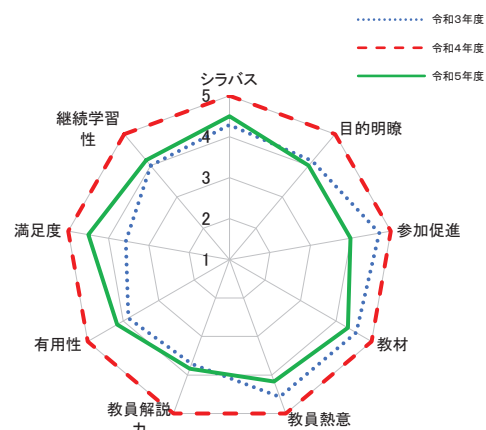
氏名： 村越 英樹

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

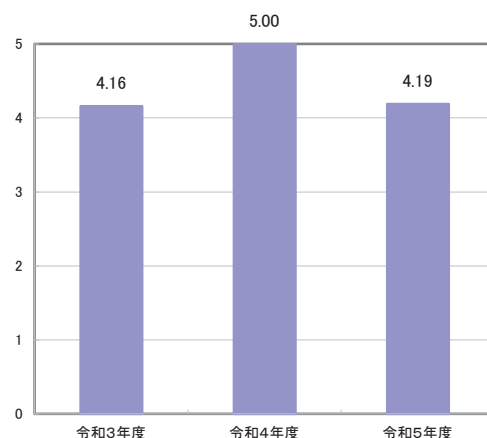
評価の平均点は、4.19である。昨年度は回収率が低く、5.00となっていた。一昨年度は4.16、更にその前年度は4.15であり、本年度の評価はこれまで通りの評価点であるといえる。

比較的良好な評価を受けている項目は、Q3.シラバス、Q10.満足度の4.50であり、Q9.教員解説力は3.83と悪い評価を受けている。

自由記述欄では、「グループワークが中心で、学生主体で取り組めた。聞くだけの授業ではなく実践的であり、より深く理解できた。」などの意見を頂いた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

昨年度は、履修者数6名、回収率40%であったが、本年度は、履修者数10名、回収率66.7%となり、回収率の向上は達成した。

オンラインで参加する学生さんが増加しているが、グループワークを主体とする授業なので、学生間のコミュニケーションが密になり、学習効果がより向上するよう努力したい。

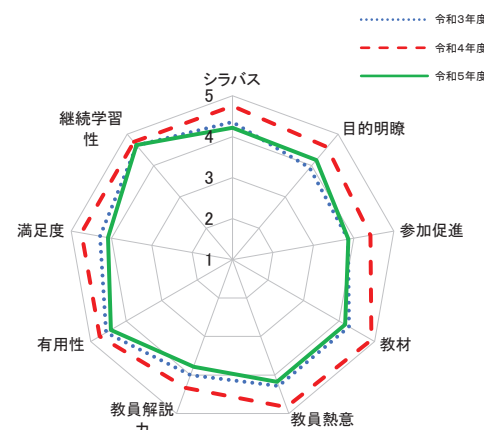
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： データサイエンス特別演習

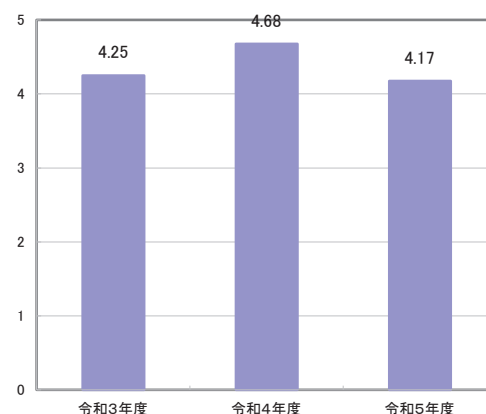
氏名： 浅野 浩美/小畑 崇弘/宮津 和弘

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

対面の学生が何人かいてくれたおかげで、様子がわかりやすく、よかったです。その一方で、学生から、やり方はわかったが、論文など精緻さが求められる時にどう使うか、もっと深く知りたい、という声も聴きました。また、3人の外部講師で構成されているため、一人ひとりの内容が結構深いため、学生にとっては通常よりも負担の大きなものになっていたと感じます。さらに、本校の専任教員でないため、manaba等のシステムに常時アクセスしておらず、専任教員よりもコンタクトが疎となりがちでした。その反面、3人とも実務経験を有しており、身近な事例を題材とした講義であることは、特に働きながら受講している学生には有意義であると評価されていました。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

やり方やロジックの説明だけでなく、より精緻さを求められる時にどう使うかについて、論文を挙げて説明するなど、さらに工夫をしたいと思います。教員側としてはできるだけ多くのことを学んで欲しいとの思いから、講義内容は結構多くなっていた感があったので、内容を厳選するように教材や事例の見直しをしたいと思います。また、講師への質問は授業時間には特に受けていなかったため、充分理解していると思われましたが、実は遠慮がちだったようなので、細目に質問の時間を設けて学生の理解を確認しながら進めようと思います。但し、R、Python、KHCoderを利用したハンズオンであるため、ツール理解と利用レベルには個人差は大きく、全員を満足させることは大変難しいのも事実です。究極は資料を見て自習することになりますが、そのレベルもまちまちであるため教員としては悩ましいところです。その解決策としては、可能な限り対面で授業に参加することをプロモーションしようと思います。

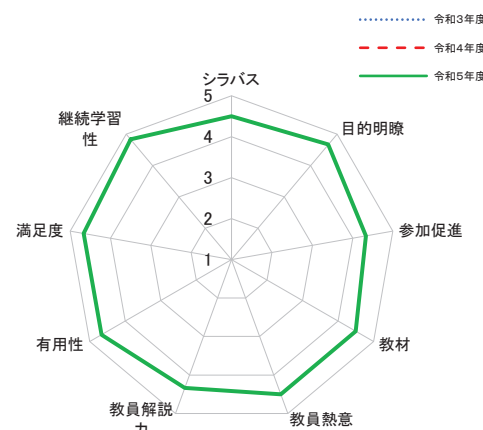
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： システムインテグレーション特論

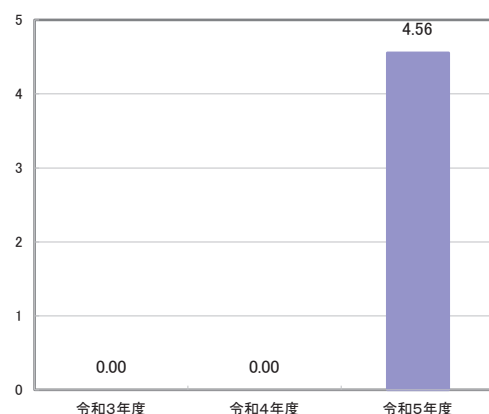
氏名： 大久保 友幸

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

本年度から担当した授業であるが、学生からの評価は5満点中合計4.56点であり、4点を下回る項目はなかったため、授業は好評であった。「幅広く技術を知って、使ってみたことで、プロダクトやサービスで利用するイメージができた。自分の興味のあるシステムについて調べて理解を深める良い機会になった。」との意見があり授業全体を通してシステムについて学べる良い機会になったと思われる。また、「グループワークが中心で、学生主体で取り組めた。聞くだけの授業ではなく実践的であり、より深く理解できた。」との意見があり、プログラミングや調査などで、実践的な授業を行ったことが評価されたと思われる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

演習課題にはプレゼンテーションを用いたが「プレゼン後の質疑がもう少しできた方が良かったと思います。」との通り、質疑の時間を十分に取れなかった面があり、質疑の時間を十分にとるように対処する。また「もう少しだけ、レベルを上げてよいと思いました。」との意見があり、4Qでの開講と言うことを考慮すると、全般的に授業レベルを上げ難易度の高い講義にしたい。

2022 年度 後期  
コースごとのアクションプラン (PBL)

- 1 事業設計工学コース科目
- 2 情報アーキテクチャコース科目
- 3 創造技術コース科目

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：事業設計工学特別演習2

氏名：コース担当教員

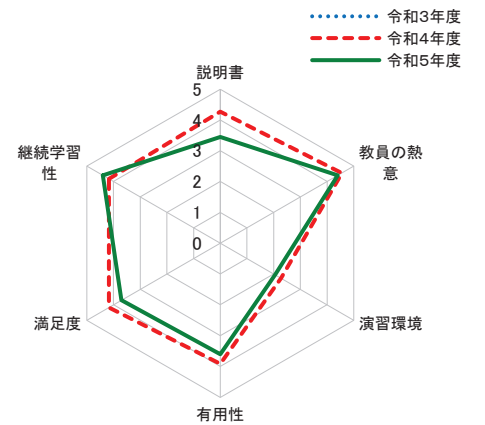
### 1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

#### 【ポジティブな意見】

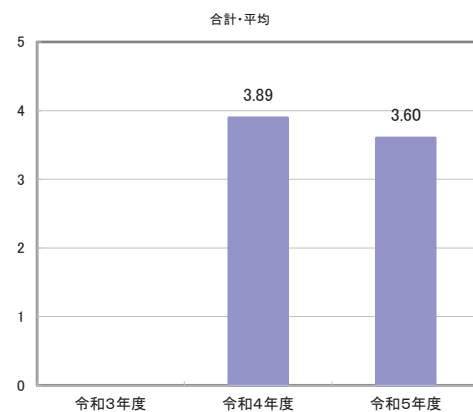
- 指導教員が熱意をもって接してくれた。
- 大変熱心な指導を受け、将来につながるビジネス機会をいただくことができた。
- 研究対象の変化に伴うアプローチの再考、実施についても研究の新たな視点として取り入れることができた。
- 新規性の高い課題に取り組めたことにより、論文化にもつながられそう。
- 多くの時間を使い、ディスカッションを重ねたことで、他の方々の考えや知識を共有できた。
- 学生が相互に尊重する意識を持ちながら、言いたいことを言える状態のチーム運営ができた。

#### 【ネガティブな意見】

- 他のチームの進捗や進め方を知る機会が少なかった。
- 個人に活動に対する熱意や能力、担当タスクの偏りがあり、非常にストレスが溜まる活動だった。
- 事前に公開されたPBL資料やシラバスをよく理解してPBLに参画する仕組みを強化すべき。
- テーマとしている活動地域が遠いため、往復の移動に時間と燃費を要した。
- 生がゼロから効果的なアンケートやマーケティングを実施することは難しいと感じた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

教員の指導力向上を目的とした研修や、複数のPBLのテーマをより早い時期に共有できる体制をとることにより、さらなる教育の品質向上がはかれるため、今後このような体制をとることができるよう継続的にPBL指導の品質向上を目的とした活動を実施できるようにする。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：情報システム学特別演習2

氏名：コース担当教員

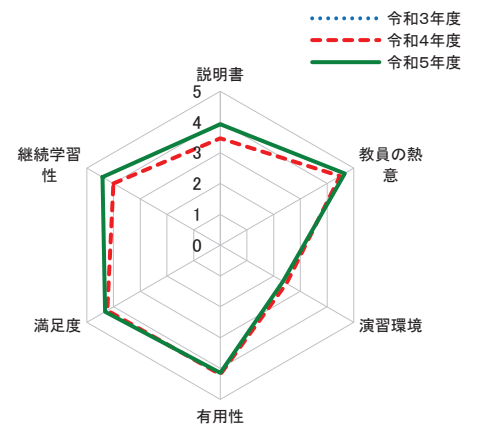
### 1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

良い評価を得た点

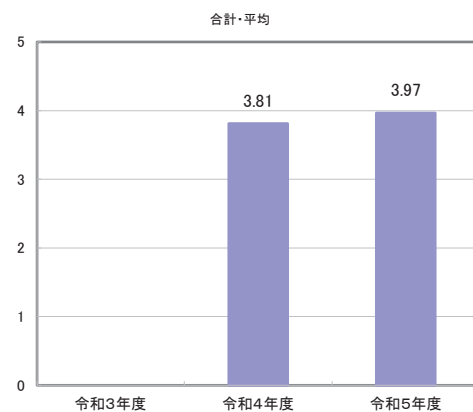
- ・毎週、チームの現状などについて客観的なアドバイスを受けた
- ・進め方については学生の自主性を最大限に尊重してくれた
- ・担当教員の指導が的確で、後でこういうことだったかと気づくことが多かった
- ・先生が積極的に参加してくれた

■改善を要する点

- ・タスク量の違いが顕著だった
- ・主担当と副担当の意見が相違することがあった
- ・副担当の位置づけが不明確
- ・PBLの運営に関するノウハウが一年間でリセットされてしまうのはもったいない
- ・チーム活動についていけなくなった段階でお荷物扱いされ、学びという意味で疎外されたと感じた瞬間があった



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

・本年度は主担当と副担当2名、それぞれの間で視点が異なっていることに起因する指摘が目立った。副担当の面談も始まり、副担当と主担当の意見の相違が強調されるようになったことも理由かもしれない。これら以外の指摘事項についても、継続的に改善を行う。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：イノベーションデザイン特別演習

氏名：コース担当教員

### 1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

共同活動が良い体験になった点：

「各位が協調して取り組みました。社会(企業)において、今後活かせる活動であると思います」

「毎週研究したことを、発表しあい自身の勉強に対する強い刺激となった」

「複雑な組織での動き方が学べた」

「先生方やメンバーから色々アドバイスを頂くこともでき、大変満足しております」

「メンバーが色々な事にトライしているので、知らない事も多くの事を学べたと思います」

遠隔会議と対面会議の使い分けがよくなってきた点：

「対面実施時と使い(目的)分けを行えば十分効果を発揮出来ると思います」

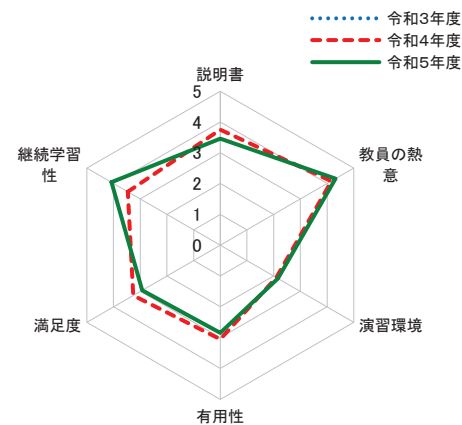
「移動時間もなく、時間の節約につながり良いのですが、複数メンバーでの会議は目線がわから

ず少々会議をしづらい部分がありますので、1ヶ月に1回ほどは対面で皆集まって会議を行うと

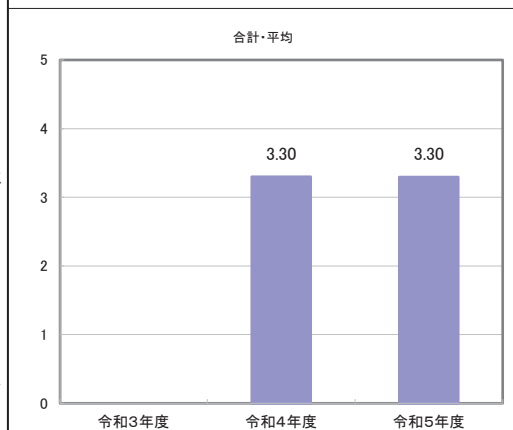
いうのも良いのかと思います」

「平日夜の打合わせは、遠隔会議の方が負荷が少なかった」

「サブMTは遠隔、コアMTは対面で、ハイブリッドで行えたことがとても良かった」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

グループで議論をしながら、プロジェクトを進めるPBLメソッドの有効性は確認できるため、これは引き続き継続していくべきである。また、遠隔会議が普及し、対面会議も復活してきており、この遠隔会議と対面会議をうまく使い分けていくことが重要である。

一方、学生が夢工房を自由に使えないことに対する不満は減ってきているものの、まだ、かなり不満は残っているので、安全面とのバランスをとりながら、夢工房を活用していく方策を検討することは重要な課題である。

[執筆者]

東京都立産業技術大学院大学（令和6年3月現在）

|        |                       |
|--------|-----------------------|
| 橋本 洋志  | 東京都立産業技術大学院大学学長       |
| 吉田 敏   | 東京都立産業技術大学院大学産業技術研究科長 |
| 中鉢 欣秀  | 東京都立産業技術大学院大学産業技術専攻長  |
| 板倉 宏昭  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 内山 純   | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 追川 修一  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 奥原 雅之  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 越水 重臣  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 小山 裕司  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 嶋津 恵子  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 高嶋 晋治  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 飛田 博章  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 林 久志   | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 前田 充浩  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 松尾 徳朗  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 三好 きよみ | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 三好 祐輔  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 村越 英樹  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 伊藤 潤   | 東京都立産業技術大学院大学准教授      |
| 田部井 賢一 | 東京都立産業技術大学院大学准教授      |
| 細田 貴明  | 東京都立産業技術大学院大学准教授      |
| 五十嵐 俊治 | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 王 中奇   | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 河西 大介  | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 木下 修司  | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 黄 緒平   | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 佐藤 里恵  | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 柴田 淳司  | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 張 晁逢   | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 松井 実   | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 横山 友也  | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 浅野 浩美  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 安部 秀基  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 和泉 秀明  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 稲垣 実   | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 今給黎 隆  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 岩政 幹人  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 植木 英雄  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 大久保 友幸 | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 小畑 崇弘  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 上條 英樹  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 亀井 省吾  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 川名 周   | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 小酒井 正和 | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 近藤 嘉男  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 酒瀬川 泰孝 | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 庄司 敏浩  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 蓮池 公威  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 伏見 靖   | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 真鍋 敬士  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |

|       |                    |
|-------|--------------------|
| 宮崎 淳  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師 |
| 宮津 和弘 | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師 |
| 村上 和  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師 |
| 茂木 龍太 | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師 |
| 安川 要平 | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師 |
| 山崎 泰宏 | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師 |
| 六川 浩明 | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師 |

東京都公立大学法人

東京都立産業技術大学院大学

AIIT FD レポート第 36 号 2025 年 2 月

発行：東京都立産業技術大学院大学 FD 委員会

〒140-0011 東京都品川区東大井 1-10-40

<https://aiit.ac.jp/>